

## 「自主活動」への参加と成人教育研究

著者	崔 敏奎
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18394号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00125759">http://hdl.handle.net/10097/00125759</a>

# 「自主活動」への参加と成人教育研究

崔 敏奎

## 目次

序章 問題所在 .....	1
第1章 研究対象と方法 .....	7
第1節 研究の目的と視点 .....	7
第2節 研究対象の設定 .....	7
1. 事例選定と背景	
2. 具体的な事例選定の基準	
第3節 研究の方法 .....	13
第4節 本稿の構成 .....	14
第2章 先行研究の検討 .....	16
第1節 教育学分野における市民や住民の自主活動 .....	16
1. 市民や住民の自主活動における教育・学習力	
2. 市民や住民の自主活動と学びの意義	
まとめ	
第2節 成人教育学理論への注目 .....	23
1. 成人教育における経験と学習をみる2つの視点	
2. 個体主義的学習論と参加としての学習論：成人学習論が もつ意義と課題	
3. 状況的学習論の分析単位と分析視野	
まとめ	
第3節 本研究の課題と方法の再設定 .....	35
1. 先行研究の指摘と本研究の課題	
2. 研究の方法	
3. 分析手法	

第3章 高齢者の「自主活動」と健康づくり .....	42
はじめに .....	42
第1節 先行研究の整理 .....	43
1. 高齢者の社会参加に関する先行研究の整理	
2. 高齢者の介護予防運動への参加に関する先行研究の整理	
まとめ	
第2節 調査の概要 .....	51
1. 仙台市宮城野区鶴ヶ谷地区の「つるがやりフレッシュ倶楽部」の活動概要	
2. 調査の方法と分析概要	
3. 参加前の状況と参加のキッカケ	
第3節 高齢者の「自主活動」と健康づくりにおける学びのプロセス .....	63
1. 健康に対する意識及び行動の変革	
2. 人間関係の広がり的重要性	
3. 「自主活動」に運営者として参加することの意味	
4. 高齢者の「自主活動」と「包摂」のプロセス	
おわりに：高齢者の健康づくりの「自主活動」における学びのプロセス .....	103
第4章 住民の「自主活動」と災害復興地域づくり .....	109
はじめに .....	109
第1節 災害復興地域づくりにおけるレジリエンス概念への注目 .....	109
第2節 調査の概要 .....	113
1. 南三陸町入谷地区の住民の活動概要	
2. 調査の方法と分析概要	
第3節 地域住民の「自主活動」と災害復興地域づくりにおける学びのプロセス .....	124
1. ボランティア団体と災害復興地域づくりの始まり	
2. 災害復興地域づくりと連携	
3. 自立志向	

4. 信頼の学び

5. 学びの場としての災害復興地域づくり

おわりに：災害復興地域づくりの「自主活動」における学びのプロセス .....	161
--	-----

終章 「自主活動」へ参加を通じた学びのプロセスと成人教育学的意義 .....	167
--	-----

第1節 本稿のまとめ .....	167
------------------	-----

第2節 本研究における新たな知見と学術的意義 .....	170
------------------------------	-----

第3節 残された課題 .....	173
------------------	-----

参考文献

謝辞

## 図目次

図 1	成人の教育・学習活動における活動性格の類型化	10
図 2	社会的サービスとサードセクターの位置	17
図 3	状況的学習論の分析単位と分析視野 1 - 「特定の実践コミュニティ」への着目	32
図 4	状況的学習論の分析単位と分析視野 2 - 「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者」への着目	33
図 5	「つるがやりフレッシュ倶楽部」の健康づくりにおける学びのプロセス	56
図 6	入谷地区の住民の「自主活動」と災害復興地域づくりにおける学びのプロセ	123

## 表目次

表 1	2015 年度「つるがやりフレッシュ倶楽部」のインタビュー調査協力者の概要	53
表 2	2010 年度「つるがやりフレッシュ倶楽部」のインタビュー調査協力者の概要	53
表 3	「つるがやりフレッシュ倶楽部」における学びのプロセス - 「意識・行動」「実践コミュニティ」「状況」の分類表	54
表 4	南三陸町における人口数と世帯数及び入谷地区における人口数と世帯数	114
表 5	入谷地区の復興の地域づくりにおける主な活動の概要	116
表 6	2017 年度「入谷地区」のインタビュー調査協力者の概要	120
表 7	入谷地区の住民の「自主活動」による災害復興地域づくりにおける学びのプロセス - 「意識・行動」「実践コミュニティ」「状況」の分類表	121

## 序章 問題所在

本研究での問題意識の出発点は、従来社会教育施設を拠点として多様な市民や住民の自由な教育・学習活動が公共性として守られてきたが、今日では市民や住民の自由な教育・学習活動を支えていた政策が市場原理に基づいた政策として転回され、従来の公共性として守られてきた市民や住民の自由な教育・学習活動が後退したところにある。この問題を筆者は社会教育行政におけるグローバリゼーションの支配として捉えている。

周知のように社会教育法は、戦後教育基本法（1947年）を受けて1949年に制定された。当時日本の社会教育法は国家の権限を限定し国民の自由な活動が保障される自由主義の理念のもとに制定された。しかし、間もなく1950年代に入ってから国家の介入から社会教育法が改正され、1960年代の「生涯教育政策」として大きな転換を迎える。この国家の介入からの「生涯教育政策」は、自由主義の原理に基づいた初期の社会教育法を大きく変容されるものである。

具体的にこの時期の国家の介入は、福祉国家のスタンスからの「生涯教育政策」として公民館といった社会教育施設の設置が広がり、社会教育主事の配置、社会教育機関への補助金支給など1970年代まで社会教育の環境が充実され、住民が社会教育施設を中心に教育・学習活動をするのにその基盤が整えられた。つまり、この時期の福祉国家的な公共性による「生涯教育政策」は社会教育施設を拠点とし市民や住民の権利として自由に教育・学習活動が行われ、保障されていたといえる。

しかし、高橋満（2003）は、「生涯教育政策」における市民や住民の自由な学習活動を支える国家の福祉国家的なスタンスからの加入と展開について両面性としてみる必要があるという。高橋は、「社会教育施設の拡充」や社会教育主事といった「専門的人材」の配置などの福祉国家的なスタンスを認めつつも、「県・市町村は国の政策に無条件に追随するだけではなく、具体的な事

業実施においても国や県からの財政的裏付けのある活動や事業を実施するのが、最も確実な生涯学習の推進である」と批判し「自主性を求める住民の運動と鋭く対立する」と指摘した<sup>1</sup>。つまり、高橋が指摘したように「生涯教育政策」は、当時の中央集権化の強化と財政的な補助を受けるための事業が多く展開された点、社会教育のプログラムづくりなどへの住民の参画が薄くなる可能性も持っていた点から、戦後の「国家の権限を限定し国民の自由な活動が保障される自由主義の理念」を否定する側面と、この時期における社会教育施設の拡充と専門職の配置によって社会教育施設を拠点とした市民や住民の自由な学習活動が公共性として保障され、展開された側面の両方有している。

しかし 1980 年代に入ってから「生涯教育政策」は「生涯学習政策」へ転回する。この「生涯学習政策」は、冒頭で問題意識として挙げた「社会教育行政におけるグローバリゼーションの支配」として今日まで至っている。そこには 1960 年代から 70 年代まで展開された社会教育行政における「福祉国家的なスタンス」が否定され、もっぱら市場原理として教育・学習の商品化・私事化が求められている。

「生涯学習政策」として進められている教育・学習の商品化・私事化は、従来の市民と住民の自由な共同学習の場の解体や共同体の崩壊などの問題を惹起している。つまり、市民や住民の自由な教育・学習活動における公共性が大きく揺らぎ、それに伴う多様な問題が内包された。

では、なぜ「生涯学習政策」への転回がもたらせたのか。そこには国内の情勢からより国際的な動きの脈絡から把握する必要がある。つまり、国際的なパワーから国民国家が否定され、国家は新自由主義の路線へシフトする。この「生涯学習政策」はまさにグローバリゼーションという国際的なイデオロギーとして推進された政策としてとらえなければならない。

Simon Marginson (1999) は「かつて近代化の主力だった国民国家」が今日には「世界経済で活躍する者とパートナーになっている」と指摘している<sup>2</sup>。その「世界経済で活躍する者」とはだ



れなのか。それは、経済を第一とする OECD や世界銀行、WTO、IMF のような巨大な「経済国際機関」である。この OECD や世界銀行などが教育を経済的発展の戦略としてあげているのが「生涯学習」である。

1996 年度に OECD (1996) は「Learning for All」という報告書で「私たち皆は個人の暮らしを豊かにし、経済的成長を成し遂げ社会的統合を維持するのにおいて生涯を通じた学習の重要性を確信している<sup>3</sup>」と述べている。世界銀行 (2003) も、生涯学習の目標を「世界経済で競争できる労働力を養成<sup>4</sup>」することとして示している。

では、何故国民国家は OECD や世界銀行といった「経済国際機関」の政策を受け入れることになったのか。それについて Miriam Henry (2001) は、今日の国々が「世界経済で活躍する者」とパートナーとなっているのは「国民性をしっかりと保ちながら世界資本主義体制と速やかに統合することが国家の最大の利益<sup>5</sup>」に繋がるからであると指摘している。つまり、生涯学習はもっぱら国の経済的発展の戦略としてあげていることになるが、そこには「国々の「平等」を求めるものではなく、「経済的競争」に打ち勝つための教育政策<sup>6</sup>」が求められている。

これに対して UNESCO (1996) は OECD や世界銀行などとは異なる視点として「生涯学習」の理念を推進しようとしている。UNESCO は 1996 年の委員会の報告書である『学習：秘められた宝』で「生活を通じた学習 (Learning throughout life) という概念は 21 世紀の鍵の筆として浮上する<sup>7</sup>」と述べながら、この「生活を通じた学習」は「①知るための学習 (Learning to know)、②するための学習 (Learning to do)、③ともに生きるための学習 (Learning to live)、④あるための学習 (Learning to be)」の 4 つの柱から基盤されているという<sup>8</sup>。

これから分かるように UNESCO では、「生涯学習」は「万人のための教育 (Education for All)」として捉えているが、OECD は「経済発展のための個人の発達」として「生涯学習」をとらえている。

しかし問題は、日本における「生涯学習」は OECD や世界銀行が捉えている「生涯学習」の理念を基盤として推進しているところにある。それによって従来の公共性としての教育施設や社会教育行政の変貌がもたされた。

今日、日本での市民や住民に置かれている教育・学習活動は「生涯学習政策」として行われているが、この生涯学習政策への転回はグローバリゼーションという「政治経済的イデオロギー<sup>9</sup>」として捉えられる。つまり、経済をもっぱら最優先とする国際的なイデオロギーを軸とした政治権力の支配である。

今まで生涯学習政策はグローバリゼーションを主導するイデオロギー「新自由主義」と「市場化」に基づいた政策であり、生涯学習政策への転回は国際的動向の脈絡から把握する必要があることを述べた。では、具体的に「生涯学習政策」への転回によって市民や住民の教育・学習活動はどのように後退されたのか。

生涯学習では、多様な学習の機会をいつでも、どこでも提供するという理念が掲げられているが、その提供主体は行政ではなく、市場に委ねられている。Usher, R. et al (1997) は、多様な学習機会を市場に委ねることにより、教授者と学習者の関係は「生産者と消費者の市場的關係」へ変容し、「知識は消費者のための遂行的な価値 (performative value) に基づいて交換される」と述べながら、今日の教育機関は「知識は商品のように売り、商品をマーケティングする企業として教育機関を再編成し、知識「事業」の部分で競争しながら市場の一部となっている」と生涯学習の市場化を批判している<sup>10</sup>。

日本では、生涯学習政策の導入によって社会教育施設が市場に開放されているが、それをすすめる制度が「指定管理者制度」である。

「指定管理者制度」は、社会教育施設を市場に開放されることによって「質が良い」教育・学習の場の提供が想定されると掲げられているが、実際、国民の権利として保障されていた教育・学習活動の場が教育を提供する主体に民間企業といった営利組織を含め多様な主体が入ることができる構造であることが問題で

あり、社会教育施設の利用者と提供者との関係が市場原理である消費者と販売者の関係として再構築され、そこで行政の役割は学習の情報や相談事業に限定されている<sup>11</sup>。

それによって、金銭的に厳しい人は施設を利用するのに大きな壁ができ、それによりアクセスへの格差が生じる。いわゆる「受益者負担論」である。さらに、グローバリゼーションは「競争」から打ち勝つことが基本原理であるため、教育は個人のキャパシティーを高めるための教育、「私事化」になっていく。つまり、学ぶというのは、個人の「選択」と同時に「仲間との競争」として変質している<sup>12</sup>。つまり、あくまで生涯学習政策が目指すのは、政府と企業の労働市場への期待としての「人的資源」を養成することであり、「生涯学習がそのような期待に応じる<sup>13</sup>」ことにのみ限定されている。

従来、福祉国家の公共性と国民の権利として守られていた社会教育行政は、いまや生涯学習政策のもとで、施設利用へのアクセスの格差や個人のキャパシティーを重視している教育・学習として「私事化」と「競争」を生み出している。つまり、生涯学習政策は、国際的な舞台で打ち勝つための「人的資源」を養成することに目指している。それによって、従来社会教育施設を中心に行われていた市民や住民の自由な教育・学習活動は後退しており、教育活動はいまや個人化し、一層深刻化しつつある。

これまで本研究の問題意識として、従来の公共性として守られた市民や住民の自由な教育・学習活動の崩壊と社会教育行政の変貌を教育政策におけるグローバリゼーションの政治的パワーから整理した。では、このような問題意識に対して、グローバリゼーションという政治経済的なパワーからの教育の個人化を図る生涯学習政策をどのように対抗し乗り越えることが出来るのか。いま考えられる現実性とはなにか。従来の公共性として保障されていた時代に戻れば良いか。

そのような主張はリアリティーな話ではない。今日市民や住民の教育・学習活動における新たな公共性を生み出す活動としてNPOといった市民や住民の自主活動が注目されている。

では、教育・学習活動における新たな公共性を生み出す活動としての今日注目されている市民や住民の自主活動がもつ教育的、学習的意義とは何か。これが本研究の間であり、問題の所在である。

## 註

- 
- <sup>1</sup> 高橋満（2003）『社会教育の現代的実践：学びをつくるコラボレーション』創風社，30頁．
- <sup>2</sup> Simon Marginson（1999）“After globalization: emerging politics of education”，*Journal of Education Policy*, 14:1, 19-31, p. 26.
- <sup>3</sup> Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) (1996), *Lifelong learning for all*, Paris: OECD, p. 21.
- <sup>4</sup> World Bank (2003) *Lifelong learning in the global economy: Challenges for developing countries* Washington, DC: World Bank, p. xviii.
- <sup>5</sup> Miriam Henry (2001) “Globalisation and the Politics of Accountability: Issues and dilemmas for gender equity in education, Gender and Education”, Volume 13, 87-100, p.96.
- <sup>6</sup> 高橋満（2009）『NPOの公共性と生涯学習のガバナンス』東信堂，148頁．
- <sup>7</sup> UNESCO (1996) *Learning: The Treasure Within; Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century*, UNESCO Publishing, p.20.
- <sup>8</sup> Ibid., p. 21.
- <sup>9</sup> Illeris, K (2004). *Adult education and adult learning*. Malabar, FL : Krieger.
- <sup>10</sup> Usher, R., Bryant, I., & Johnston, R. (1997) *Adult education and the postmodern challenge: Learning beyond the limits*. New York: Routledge, p.14.
- <sup>11</sup> 高橋満、前掲註（1）．
- <sup>12</sup> 相場和彦（2016）『現代市民社会と生涯学習論：グローバル化と市場原理への挑戦』明石書店．
- <sup>13</sup> Dale, John A., Glowacki-Dudka, Michelle., and Hyslop-Margison, Emery J. (2005). “Lifelong Learning as Human Ontology: A Freirean Response to Human Capital Education”，Adult Education Research Conference, p.113.

## 第 1 章 研究対象と方法

### 第 1 節 研究の目的と視点

序章では、従来の公共性として守られた市民や住民の自由な教育・学習活動の崩壊を生涯学習政策とグローバル化の政治経済的パワーから整理し、市民や住民の教育・学習活動における新たな公共性を生み出す活動として NPO といった市民や住民の自主活動が注目されていることを述べた。その上で、自主活動がもつ教育的、学習的意義とは何かを本研究の問題所在としてあげた。

したがって、本研究の目的は、教育・学習における新たな公共性を生み出す活動として注目されている自主活動がもつ教育学的意義を明らかにすることを設定する。また、本研究の目的を遂行するための研究の視点としては、行政や政策というマクロな視点ではなく、自主活動の事例に即したメゾあるいはミクロな視点からアプローチする。

### 第 2 節 研究対象の設定

#### 1. 事例選定と背景

本研究では教育・学習における新たな公共性を生み出す活動として自主活動に注目している。では、本研究の目的を遂行する上で、どのような自主活動に注目すべきか。以下では、本研究における自主活動の事例選定とその背景を述べる。

一つ目の事例としては、高齢者の健康づくりにおける高齢者の自主活動に着目する。

二つ目の事例としては、東日本大震災における災害復興地域づくりの住民たちの自主活動に着目する。

一つ目の事例に着目した背景としては、日本は現在、高齢化率が 27.05%（2017 年現在）であり、世界的にみても一番高齢化率が高い国である<sup>1</sup>。通常、総人口の中で、65 歳以上の人口が示す割合（高齢化率）が 7%以上であれば「高齢化社会」、14%以上であれば「高齢社会」、20%以上であれば「超高齢社会」と定められている。

日本の場合、1970 年に高齢化率 7%を超え高齢化社会に入り、1994 年には 14%を超え高齢社会に入った。そして既に 2006 年には 20%を超え超高齢社会に突入した。日本の内閣府の「平成 29 年版 高齢社会白書（全体版）－（2）将来推計人口でみる 50 年後の日本」の報告によれば、「総人口が減少する中で高齢者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、平成 48（2036）年に 33.3%で 3 人に 1 人となる。54（2042）年以降は高齢者人口が減少に転じても高齢化率は上昇傾向にあり、77（2065）年には 38.4%に達して、国民の約 2.6 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されている」と日本の高齢化率は上昇を続けると展望している<sup>2</sup>。

超高齢社会が長く続いている今日、国や各市町村では高齢者の健康や生きがい、社会参加といった様々な施策を展開している。特に、2006 年の介護保険制度の改正により、要介護予防のため、地域支援事業が設定され全国市町村ごとに介護予防事業が実施されている<sup>3</sup>。

このような社会的・国際的背景から日本では高齢者における健康づくりや生きがい、社会参加といった問題が浮上している。そのため、本研究では最初の事例として高齢者の健康と交流、社会参加を図っている介護予防運動に着目したい。しかし、介護予防運動も、行政主導、或いはある団体や専門職主導など、様々な形で地域社会の中で展開されている。

本研究では、行政や民間団体等の主導で行なわれている介護予防運動活動ではなく、地域に在住している高齢者が自主的に運営し参加している介護予防運動の自主活動に着目する。

二つ目の事例の選定の背景として、東日本大震災後 7 年目である今日、復興の地域づくりに住民たちがどのような活動を展開しながら自分たちの生活や存在を守っているのかという問いから住民の自主活動による災害復興地域づくりに着目した。震災から今日に至るまで被災地にはハード面としての支援（資本・資源）やソフト面としての支援（資本・資源）が多く動員されている。ソフト面としての支援にはボランティア活動が主に挙げられる。実際に東日本大震災当時である 2011 年度には、東北 3 県合わせてボランティア活動者の数は、957,830 名であり、2017 年度の活動者の数は 28,125 名でかなり減っているにも関わらず、ボランティア活動は現在に至るまで続いている<sup>4</sup>。しかし、LISMAN(1998)によると、「ボランティア活動は人的・社会的問題に対して私的かつ個別的な問題としてみなされ、それは決して公共的な社会を作るものにはならない<sup>5</sup>」と述べている。つまり、被災地に住むしかない、移住することができない、被災地に残された住民たちがボランティア活動者を含めた多くの資源・資本に対してどのように向き合い、大震災で崩壊された公共的社会をいかに作るのかが課題となる。それは、支援（資源・資本）をただ受けることだけであるのか、それを自分たちの地域をどう活かすことができるのかという主体的な戦略として向き合うべきなのかである。後者の行為を取るなら、どのようにして自分たちの活動を活かすことができるのか、また、いかにして活動を維持・発展することができるのか課題とされる。

## 2. 具体的な事例選定の基準

1) 事例選定と背景では、本研究の目的を遂行するための事例として 1 つ目に「高齢者の健康づくりにおける自主活動」と 2 つ目に「災害復興地域づくりににおける住民の自主活動」を事例として選定した。しかし、自主活動といっても多様な性格を持っている自主活動が存在している。つまり、具体的にどのような性格を持っている自主活動の事例に注目するのか、その基準を定めなけ

ればならない。以下では、どのような性格をもっている自主活動に注目するのか、本研究における具体的な事例選定の基準を定めるため自主活動の類型化を試みた。

その類型の基準軸として、その活動自体が本研究で問題意識として捉えている生涯学習政策に支配されているのか、その反対として自立を志向しているのかである。もう一つの軸としては、その活動が個人に焦点が置かれている活動であるのか、共同に焦点が置かれている活動であるのかである。

この二つの軸を合わせて類型化をすると、以下の図 1 として表す事ができる。

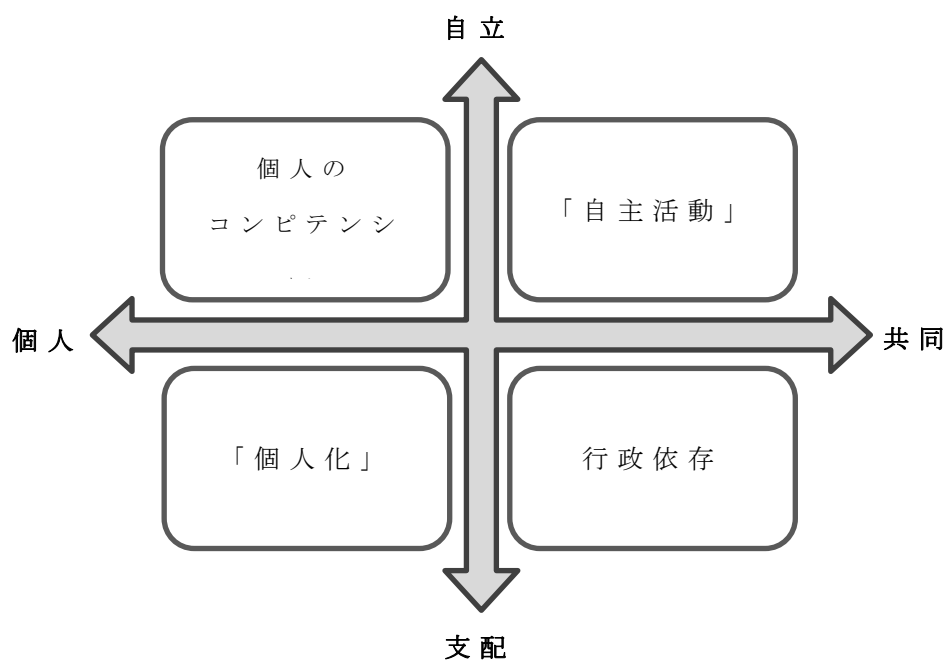


図 1 成人の教育・学習活動における活動性格の類型化

かつて Hansen (1993) は「支配権力は多様な方法で人々を統制し、彼・彼女らへ利益にならない活動に参加させる<sup>6</sup>」と述べた。代表的な社会教育行政における制度的支配は「指定管理者制度」である。「行政依存」に当たる成人の活動は、「指定管理者制度」



の枠組みから活動をしている成人を指す。「指定管理者制度」では、多様な市民や住民の団体を含め、もっぱら利益を目指している民間企業も参入することができる。生涯学習政策のもとで活動をしている成人は、社会教育施設の市場化をさらに推進する役割として位置づけられる。「行政依存」として活動している成人は、政策上有利な位置にいる行政との関係は垂直的であり、一方的な情報や教育サービスにより成人のアクセスは限定されている。

今日のグローバリゼーションが政治経済の支配権力により「人間の中心的な役割を否定<sup>7</sup>」している。つまり、社会教育行政における市民や住民の参画が否定されるという話とつながる。本研究で類型している「自主活動」がこの支配権力から対抗する活動として自立を志向し、共同を目指しているところに「行政依存」と正反対の活動性格を有している。

「自主活動」は、支配を否定し依存に頼らず、自立的に活動を展開している。依存（Dependent）とは反対の性格であるため、本研究では自主活動（Independent activities）として称している。

「行政依存」と正反対として位置づける「自主活動」は、行政との共同の関係を維持しながらも、公共性を指向し、また、自立を志向しているため、運動と対抗の側面を有している自主活動である。しかし、市民運動とは性格が異なる。市民運動は、行政との共同はあくまでも市民運動における資源動員論として利用し、自立志向と運動と対抗の指向が強い。それに反して、本研究で注目したい「自主活動」は、行政との共同と自立志向の性格が強く、必要な場合のみ運動と対抗の性格を志向する活動として位置づける。

「自主活動」は、日本の生涯学習政策の枠組みから支配されている「行政依存」より、活動の中で教育の市場化と個人化を乗り越える様相を内包している。現実的に考えてみると、生涯学習政策により崩壊された市民や住民の共同体を再構築するためには、逆説的に行政の力は不可欠である。つまり、活動における行政とのパワーの関係を逆転させることは現実的に難しい。また、今日、

地域の課題を解決するための市民や住民の教育活動には「資金」や「資源」は不可欠な要素となっている。これが現実である。

したがって、成人の自由な学びとしての活動、共同性を再構築する、社会的価値や社会的使命を生み出す活動としてバランス的な要素が必要ではないか。行政との共同的な関係を維持しながらも、そこに支配されることなく、対抗的で運動的な要素をバランス良くとった活動である。また、行政との水平的な関係を維持するために努力しているが、支配から独立的な活動を展開し、必要であるなら運動と対抗的な活動を展開する。つまり、バランスを調節しながら活動を展開している「自主活動」は、行政との関係で支配的関係ではなく、行政との共同と水平的関係の維持のため努力し、自分たちで活動を展開する独立された類型として位置づく。

そして、自立と共同を志向している「自主活動」はまさに「参画」の可能性を開いている活動としても位置付けられる。この「参画」から、人びとに対する信頼や愛情、地域に対する愛着、ネットワークの拡大、互酬性の規範といったロバート・D・パットナム（1993；2001）がいう「社会関係資本（Social Capital）」を豊かにする活動として期待される。

また、もう一つ「自主活動」に注目したいところは多様なインフォーマルエデュケーションの場面を有しているところにある。上述で指摘したように今日、殆どの社会教育施設は、個人の趣味や経済活動と結ぶ「市場原理」のもとでその性格が変貌されている。その「市場原理のもと」とは、講座がメインで、講座を提供する提供者と講座を受ける消費者としての構造の変貌である。つまり、そこには、たとえば、地域づくりに関する講座があるとしても、そこではノンフォーマルエデュケーションの側面が強い。しかし、「自主活動」では、自由な教育・学習活動が期待されているため、インフォーマルエデュケーションの場が自由に開いている。

インフォーマル学習は、フォーマル学習やノンフォーマル学習を通して得た知識を補完したり強化したり、或いは、否定する側

面を有している<sup>8</sup>。講座などで形式化された学習はインフォーマル学習から脱却し、新たな知として転換する最も大事な要素であるが、今日の殆どの生涯学習政策での学習活動はノンフォーマルエデュケーションの側面に焦点がおいてある。

その他の活動として、自立を志向しているが、個人に焦点を置いた活動がある。この活動は「個人のコンピテンシー」として類型化した。つまり、この活動は、自分のコンピテンシーを高める教育・学習活動である。最後に、「個人化」は、今日生涯学習政策として推進されている「個人化」である。そこには、個人の経済活動や趣味活動として分類される成人の活動であり、教育・学習におけるすべての責任は「自己責任論」とされる。

以上、教育・学習における新たな公共性を生み出す活動としてどのような自主活動に着目すべきかを今日の生涯学習政策として支配されている活動か、それと反対に自立を志向している活動かといった軸と、その活動が共同に向かった活動か、個人に向かった活動かの軸として類型化を試みた。したがって、本研究における具体的な事例選定基準として、「」を付けた「自主活動」の性格を持っている事例を具体的な事例選定基準としてする。

### 第 3 節 研究の方法

本研究では、具体的な事例を通して本研究の目的を遂行するため、まず、研究方法として理論的研究を行う。

今まで自主活動に関する教育学的アプローチとしてどのような研究がなされてきたのか。先行研究の批判的検討を行い、それを踏まえて本研究における理論的立場の確立と課題を抽出したい。

具体的に検討する先行研究としては、本研究での問題関心である「自主活動がもつ教育・学習的意義」について研究した先行研究を主に検討する。

## 第 4 節 本稿の構成

本稿は序章と終章を含め 6 章構成である。

序章では本研究における問題意識と問題の所在をまとめる。第 1 章では、序章の問題所在を踏まえて本研究における目的と研究対象、研究方法を明確にする。続いて第 2 章では、本研究における具体的な課題と理論的立場を確立するため先行研究の批判的検討を行う。そして、第 3 章と第 4 章では具体的な事例を取り上げ、本研究の課題を明らかにする。第 3 章の具体的な事例は高齢者の健康づくりにおける介護予防運動の「自主活動」である「つながりフレッシュ倶楽部」の事例を取り上げる。第 4 章の具体的な事例は災害復興地域づくりにおける住民の「自主活動」である「南三陸町入谷地区の住民の自主活動」を取り上げる。最後の終章では、本研究のまとめと事例研究から得られた新たな知見や本研究における学術的意義を示す。その上で、本研究における限界と残された課題を明らかにする。

## 註

- 
- <sup>1</sup> グローバルノート - 国際統計・国別統計専門サイト (2018 年 7 月 5 日更新データ) <https://www.globalnote.jp/post-3770.html>
  - <sup>2</sup> 内閣府 - (2) 将来推計人口でみる 50 年後の日本  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1\\_1\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_1_1.html)
  - <sup>3</sup> 厚生労働省 - 介護予防マニュアル概要版  
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1a.pdf>
  - <sup>4</sup> 社会福祉法人 全国社会福祉協議会, 東日本大震災ボランティア活動者数の推移 東日本大震災 岩手県・宮城県・福島県のボランティア活動者数 (2018 年 3 月掲載), <https://www.saigaivc.com/>
  - <sup>5</sup> LISMAN, C. D. (1998) *Toward a Civil Society: Civic Literacy and Service Learning*, Praeger, p. 66.
  - <sup>6</sup> Hansen, T. L. (1993) What Is Critical Theory? An Essay for the Uninitiated Organizational Communication Scholar, Paper presented at the Speech Communication Association of America Convention in Miami, p. 2
  - <sup>7</sup> Schied, F. M., Mulenga D., Baptiste, I. (2005) Lifelong Learning in

---

a Global Context: Towards a Reconceptualization of Adult Education, Adult Education Research Conference, p.397.

- <sup>8</sup> Schugurensky (2000) "The Forms of informal learning: Towards a conceptualization of the field". NALL Working Paper #19-2000. quoted in Merriam, S, B. Caffarella, R, S. and Baumgartner, L, M. (2006) *Learning in Adulthood: A Comprehensive Guide*, 3edition. Jossey-Bass, p.37.

## 第2章 先行研究の検討

### 第1節 教育学分野における市民や住民の自主活動

第1節の教育学分野における市民や住民の自主活動では、主に社会教育分野で自主活動の事例に注目し、自主活動がもつ教育・学習の意義を明らかにした先行研究の検討を行う。そのため、まず自主活動がもつ教育・学習の力とはなにかに関する議論を踏まえたうえで、事例研究の先行研究の検討を行う。

#### 1. 市民や住民の自主活動における教育・学習力

今日グローバリゼーションという政治経済的なパワーから教育の個人化が図られ、それは生涯学習政策として推進されている。

社会教育行政の領域において、生涯学習政策の一環として推進されている社会教育施設の「指定管理者制度」は、「受益者負担」として教育・学習活動の「私事化」「商品化」「アクセスへの格差（＝排除）」の問題を惹起しているが、NPOといった自主活動はその問題に対して市民や住民の多様な学習機会を提供しているところで今日注目を浴びている。

では、生涯学習政策では捉えられないNPOがもつ教育・学習の公共性とはなにか。

かつて佐藤一子（2004）は、NPOがもつ教育の意義として今日の生涯学習政策とは異なる「協働学習（collaborative learning）」を目指すところにあると述べている。佐藤がいう「協働学習」では、「共同体が衰退し、個々人が孤立している大衆社会のなかで、共同性を再構築することをめざして価値観や生き方の共有化と集団的な知の創造が問われ」ここでは「ばらばらな個人が社会参加し、集団との関係性を回復し、集団への帰属を取り戻すことをつうじて改めて展望する協働性が課題となっている<sup>1</sup>」と述べながら、NPOは単なる市民組織の自主活動ではなく、「社会的使命を市民と共有し…人びとに働きながら社会を変えていく学びの共同システムの構築」「市民的公共性を創出する教育力」<sup>2</sup>を持っていると述べている。また、NPOにおける学びの意義の具体的な学習形態は、「市民に対する学習機会の提供」、「スタッフの研修」と

して学習を重視し、「社会的な実践という経験をとおした学び」として学習機会をつくっている<sup>3</sup>。

つまり、NPOの自主活動は生涯学習政策ではとらえない市民や住民の「学びの機会」<sup>4</sup>が開かれており、「活動の当事者・参加者において、意識が変容したり新たな価値を発見したりする可能性を内在させている<sup>5</sup>」ところに新たな公共性を生み出す教育・学習力を内包しているといえる。

しかし、教育・学習における新たな公共性を生み出す主体として注目されるNPOは、狭義の意味ではNPO法にもとづいて法人格を取得した団体を意味しているが、広義の意味では、任意団体を含め、社会的矛盾や不満などに対抗しオルタナティブな性格をもつ団体もNPOとして指す場合も多い。さらに、このようなNPOは「国家、市場、家族・地域の原理にハイブリッドな新たな質を加える可能性<sup>6</sup>」を有している「サードセクター<sup>7</sup>」(Pestoff, 1998)に含まれる概念としても捉えられる場合もある。

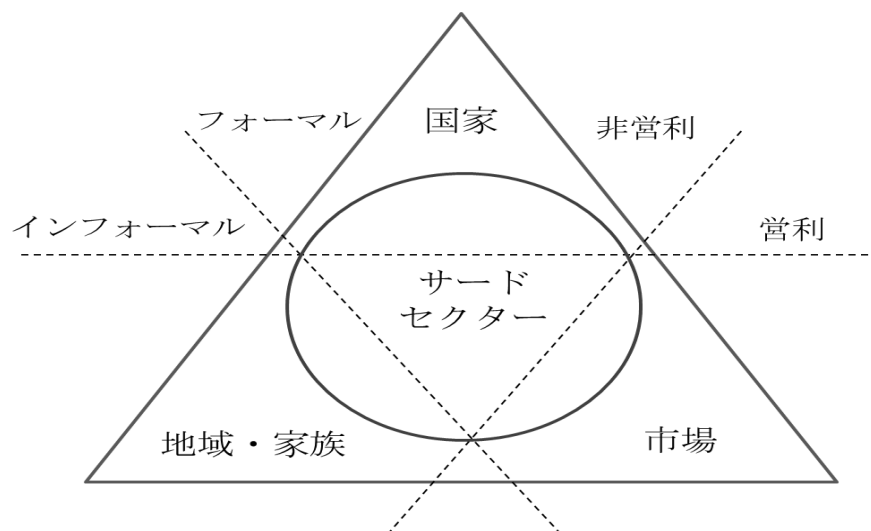


図2 社会的サービスとサードセクターの位置<sup>8</sup>

それ以外にも、住民や市民の多様で自由な団体の自主活動を表す言葉として、協同組合や市民運動団体、NGO、トランジションタウン、社会的企業など今日NPO以外にも市民や住民の団体は多様な言葉として称されている。

このように市民や住民の自由な団体を表す言葉は多数存在する。しかし、問題となるのは、今まで述べた市民や住民の団体を広義な意味

としての NPO と称しても、サードセクターに含まれるととらえても、必ず教育・学習における新たな公共性を生み出す主体として捉えるのは危惧されることである。つまり、NPO といった市民や住民の自由な団体の自主活動が社会的矛盾にオルタナティブな主体として、市民や住民に多様な学習機会を提供し、「社会的使命」や「目的の理念」を目指して活動している自主活動であると掲げていながらも、実際そうではない団体も多数存在していることである。

これに関してかつて高橋満（2003）は、多様な性格を持っている NPO を 4 つに分けて類型化を試みた<sup>9</sup>。

第 1 は、「補完型／官僚主義モデル」である。この類型は、行政活動を補完する機能を果たしており、行政との関係は垂直的で、一方向に情報とサービスが流れる。第 2 は、「依存型／消費者主義モデル」である。この類型は、公的サービスや社会的権利の商品化を媒介する役割を果たす。第 3 は、「協働型／パートナーシップモデル」である。この類型は基本的に市場モデルのなかで活動する事業体の性格をもっているが、行政から独立して、先駆的・批判的・柔軟で、効率的・人間的サービスを市場で提供しながら、かつ、参加や連帯など公的価値を追求する役割を果たしている。第 4 に、「対抗型／運動モデル」である。先の三つの類型が事業体としての性格を持っているとすると、この類型は、環境 NPO など、対抗的価値を追求する運動体としてとらえられる。

高橋が試みた NPO の類型化はどのような NPO に注目すべきかという問いからの類型であり、どのような NPO の事例を取り上げるにかについての基準としても意義をもっている。

以上で NPO の教育・学習力に関する先行研究に検討を行った。ここで分かったことは、NPO は市民や住民の自由な自主活動として、NPO がもつ教育・学習力は生涯学習政策では捉えない新たな公共性を生み出す教育・学習力を持っていることである。しかし、NPO は狭義の意味としては NPO 法にもとづいた団体を指すが、広義の意味では、任意団体を含め、サードセクターや社会的企業など社会的矛盾や不満などに対抗しオルタナティブな性格をもつ団体も NPO として指す場合が多いことである。したがって、本研究では広義の意味として NPO をとらえるが、市民や住民の自主な団体の自主活動を指す言葉が多数存在しているため、NPO という単語は使わず、包括的な言葉として自主活動という単語を使うことにする。しかし、自主活動でもどのような自主活動に



注目するのかが問われる。それは、自主活動に言ってもすべての自主活動が新たな公共性を内包している主体としてとらえるのは危惧であるからである。これに関しては高橋の NPO の類型はどのような NPO に注目すべきという基準として大きな意義をもっている。

以下では、実際に自主活動の事例に着目して自主活動がもつ教育的意義を明らかにした先行研究の検討を行うことにする。

## 2. 市民や住民の自主活動と学びの意義

これまで、自主活動がもつ教育・学習力についての先行研究の検討を行った。以下では、実際の事例調査を通して自主活動がもつ教育的意義を取りあげた先行研究の検討を行う。

まず、高齢者の自主活動に関する先行研究では、主に老人大学・高齢者大学の研究が見られる。

牧野篤（2007）は、「経済の転換が始まった今日、人々が豊かに、満足して生きる社会をいかに作り出すか」という問いから、「高齢者のあり方にその鍵がある」と述べながら老人大学に注目した。牧野は、「高齢者がいかに社会的に新たなアクターとして、社会の経済的な負荷を減らしつつ、満足して幸せに生を全うすることができるか、ということが、社会全体の新たな価値観と人々の新たな生き方を生み出すために必要なことだということである<sup>10</sup>」と主張しつつ、この主張を実証するため高齢者の学び場である老人大学に注目している。この研究では、老人大学の幾つかの事例を取り上げ、老人大学の歴史と実態、そして老人大学が果たしている役割と課題、今後の展望などについて考察を行っている。その結果として、高齢者の学びの場である老人大学が「教育と福祉との間を架橋し、より積極的に高齢者教育を展開し、高齢者の生きがいの増進やアクターとして新たな役割を獲得に、有効な作用する可能性も大である」と述べ、老人大学が「社会的に積極的な役割を課し得ている」と述べた<sup>11</sup>。

さらに、堀薫夫（1993）は、高齢の社会参加と学習との関係を量的な側面から実証的に検証している。この研究では、生涯学習援助への基礎的データを得ることを目的として、2つの視点から分析を行った。1点目は、「老いとしてのエイジングの問題」、2点目は、「生活意識としてのエイジングの問題」である。調査対象地と対象者は、福井県の60歳以上約500名を対象に、役所の職員らによって質問紙を配布し、そ

の中で有効回収数 400 通が回収された。また、大阪府にある大阪府立老人総合センターの老人大学受講生 350 名に質問紙を配布し、その中で有効回収数 276 通が回収された。結果として、1 点目の視点に関しては、「老いの自覚の契機の検討が行われ、全体的に生理的条件に根ざした契機が多いこと、さらに後期高齢期では心理的要因の比重が高まる」こと、2 点目の視点に関しては、「高齢者特有の教育的ニーズがまとまりをもっていること、70 代前半あたりを境に生活意識の構造に変化が見られるのではないかということ」が示されたと述べている<sup>12</sup>。また、2007 年度の研究では、大阪府老人大学の修了者を対象に社会参加活動と生涯学習活動との関連を検討している。この研究では、「高齢者がいかなる社会参加活動と学習活動に関り、また両者はいかなる関係性にあるのかを明らかにする」ことを目的にしている。調査対象者は、1997 年度、2000 年度、2003 年度の老人大学の修了者の中で 1,174 名を抽出し、有効回収数 997 通が回収された。回収されたデータの分析は、数量化Ⅲ類によって分析を行った。その結果として、高齢者の学習・社会参加活動のパターンは、「広域参加・交流型」「地域参加・交流型」「公的参加・学習型」の 3 のタイプとして分類し、「ここで重要な点は、こうしたタイプの学習・社会参加のパターンが、広域的な老人大学などへの受講をとおして育まれたものだという点である」と述べている<sup>13</sup>。

続いて 2015 年度の研究では、大阪府の高齢者大学の受講生を対象にアメリカの老年学者であるロバート・アチュリー (Atchley, R. C.) が提起した継続性 (continuity) の概念を用いて「60 代から 70 代にかけての高齢期における学習・社会活動に対する意識の変化」について量的調査を行った。質問紙は 2,146 通を配布し、その中で有効回収数 1,491 通が回収された。分析は、学習意識として学習ニーズと学習・社会活動面での意識の変化を取り上げた。結果として、学習ニーズについては、「ライフ・レビューに関連した項目は、比率の上昇がうかがわれ、「他の高齢者との交流」へのニーズにも 70 代以降活性化された」こと、学習・社会活動への意識の変化については、「60 代から 70 代にかけて 1 人あるいは少人数での学習や活動を好む傾向がよくなること」が示されたと述べている<sup>14</sup>。

堀の研究は、高齢者の社会参加と学習の場として主に老人大学・高齢者大学に注目し、量的調査を用いて高齢者の社会参加と学習との関係を具体的な視点に即して実証しているところに大きな意義をもって

いる。しかし、堀の研究は量的調査のみ行われており、今後として老人大学・高齢者大学における質的研究も行う必要があると考える。特に、今日の老人大学や高齢者大学は本来追及していた目的や理念とは少しずれがあり、一般の学校のような形として変容している<sup>15</sup>。施設から離れた多様な市民社会の中から高齢者の教育・学習の意義について明らかにすることが求められる。

そして、福井庸子（2007）は NPO 博物館の事例を取りあげ、そこで学びの意義について考察している。具体的な事例としては東京・新宿区 NPO 法人高麗博物館を取り上げ、博物館の管理・運営のプロセスから NPO 博物館にみる「学び」の意義を考察している。

福井は、NPO 博物館に管理・運営に関わるプロセスには「自己を軸として問題をとらえる枠組みの獲得の可能性が見出せるのであり、同時に規格化された見方を受け入れるのではなく自らの見方を形成しようとする学びの姿が見てとれる<sup>16</sup>」と述べながら、「市民は博物館に奉仕する対象ではなく、社会的規範や歴史認識さえも批判や検討の射程におき、博物館活動を介入に、その活動で必要となる人々との間で共有した様々な経験や問題を、課題として共有し認識していく<sup>17</sup>」ところに学びの意義としてあげている。

これまで挙げた自主活動は施設を拠点とした自主活動と学びに関する先行研究であった。それに対して、大高研道（2015）は、施設を拠点としない自主活動の事例であるワーカーズコープの事例を取りあげ、ワーカーズコープの活動プロセスの中での学びの意義について考察している。

大高によると、ワーカーズの働くプロセスの中での学びの意義は「徹底的に話し合い「課程への参加」を重視する協同労働の取り組みを協同的学びへと転換してきた点<sup>18</sup>」であり、特に、そのプロセスでは「地域の生活様式に埋め込まれた価値と文化を継承しつつ展開される協同的・創造的地域学習の固有の意義と新たな地平をも提示<sup>19</sup>」しているところに学びの意義として挙げている。

また、金宝藍（2015）は、韓国のエネルギー自立に取り組んでいるマウル（まち）の事例を取りあげている。具体的に、韓国ソウルにあるソンドゴルマウルの実践の活動の紹介を通して、住民が自ら展開するエネルギー自立マウル運動の実践における学びとその原理的考察を試みている。金によると、エネルギー自立マウルの学びは、「学びと実践の循環と拡張を介して、意識と行動、さらに価値観がかわる住民、

そして地域社会をともにつくっていくソンドゴルマウルの実践から、「地域をつくる学び」から「共に世界をつくる学び」と「変化のための学び (learning to transform oneself and society)」<sup>20</sup>」であると述べている。特に、その活動における学びについての原理的考察として3つ挙げている。つまり、エネルギー自立マウルでの活動の中の学びの原理として「学びと生活が統合される「統合の原理」、運動と学習が循環される「循環の原理」、そしてこれらにより、自分の意識と行動を家族に、地域に、社会に拡張していける「拡張の原理」を発見する。この3つの原理が実践され再構築する基本原理とならなければならない<sup>21</sup>」と主張している。

## まとめ

第1節である教育学分野における市民や住民の自主活動では、「自主活動がもつ教育・学習力とはなにか」の先行研究の検討を踏まえ、実際の自主活動の事例に着目して自主活動がもつ教育的意義について明らかにした先行研究の検討を行った。

以上の先行研究では、自主活動は新たな公共性を生み出す活動として教育・学習力が期待され、実際、自主活動がもつ教育学的意義について明らかにしていた。しかし、先行研究で2つが指摘することができる。第1に、自主活動の事例を通して教育学的意義を明らかにした研究が数少ないことである。第2に、その数少ない研究はそれぞれの自主活動がもつ教育学的意義を明らかにしたことに充分意義をもっているが、自主活動の活動プロセスは分析されず、単なる活動の実態の紹介に留まっていることである。つまり、多様な市民や住民の自主活動がもつ教育学的意義を明らかにするためには、その自主活動のプロセスの中で人々が何を学んだのか、それによってどのような変化が生じたのかといったプロセスの詳細な分析が必要ではないか。

そのため、本研究では、自主活動のプロセスを詳細に分析する視点を確立するため以下には欧米の成人教育学理論の検討を行う。その理由としては、上にあげた先行研究では、自主活動のプロセスは単なる実態の活動紹介のみに解消しているが、成人教育学理論は人間の学習活動を説明しようとするのに、人びとの生涯の学習の営みをすべて説明することは不可能ではあるが、「生涯のある側面や段階でおこる学習の現象を説明」<sup>22</sup>するのに役に立ち、有用な視点を与えるからである。

つまり、成人教育学理論は、筆者が指摘している自主活動のプロセスを詳細に分析することに焦点が置いてある。

## 第2節 成人教育学理論への注目

### 1. 成人教育における経験と学習をみる2つの視点

成人教育は、成人の教育・学習を成人になる前の学校教育との区別のために<sup>23</sup>成人と児童（Children）を区別して、成人学習の固有の理論を探るため1970年代から体系的に研究として始まった<sup>24</sup>。そこでは、学校中心的思考から生まれた「学生は児童である」という固定観念<sup>25</sup>から脱却し、学校での児童の経験と異なる成人の日常の生活世界での経験に着目している。

かつて Dewey (1938) は成人における「全ての教育は経験を通して成り立つ<sup>26</sup>」と主張している。しかし、Dewey は、経験を通して学習が起こるためには、その経験が継続性（continuity）と相互作用

（interaction）という原則（principle）が現れなければならないという<sup>27</sup>。ここで継続性の原則とは、「現在の経験から得られた学習は過去と繋がっており、それは未来へも繋がる」と述べており、相互作用という原則は、「経験はいつもある人とその経験が起こる時、その人に囲まれた環境の間の相互作用から起こる」と述べている<sup>28</sup>。つまり、Dewey の成人における「経験」とは、「継続性と相互作用の二つの原則が常に繋がっており、二つの原則が合わさって経験学習の基礎を提供する<sup>29</sup>」。つまり成人教育は、成人がどのように意識や行動が変わるのかといった成人の固有の学習の様相を説明するために従来の教育領域の関心であった児童の学校での経験とは異なる成人の経験に着目して独自の学問領域として発展してきた。

成人の日常の生活世界での経験は成人教育の学習理論の基礎と前提となっている。しかし、今日の成人教育における学習をみる視点は2つに分かれている。

「経験」は個人の省察という内面的経験を通して意味を見つけるのか、コミュニティに属した他の人びととの協力（実践共同体）の経験を通して意味を見つけるのか<sup>30</sup>という2つの視点である。

1つ目の視点は、「個体 (individual)」の「省察 (reflection)」に焦点が置かれており、2つ目の視点は、実践コミュニティへの参加という「文脈 (context)」に焦点が置かれている。

今日の成人教育における学習をみる視点は、成人の「経験」を基盤として、成人の教育・学習を「個体」の内面的側面としてとらえるのか、実践コミュニティへの参加という「文脈」としてとらえるのかの2つに分かれている。

## 2. 個体主義的学習論と参加としての学習論：成人学習論がもつ意義と課題

人びとはどのように学習していくのか。なにを学習としてみるのか。いつ、どのようなときに学習がおこり、それをどのように説明することが可能なのか。

成人教育領域では、成人が学ぶということを多様な理論から解明し説明しようとしている。その中心的で主流だった理論が「自己主導的学習理論 (self-directed learning theory)」と「変容理論 (transformative learning theory)」、「状況的学習理論 (situated learning theory)」があげられる。

以下では、この3つの理論がもつ意義と課題を確認し、本研究における学習論的立場を確立する。

### 自己主導的学習論 (self-directed learning theory)

成人学習理論における「自己主導的学習論」は、1971年のTough(1971)の研究から本格的に教育分野で注目を受けることになった。「自己主導的学習」とは、学習者が生涯にわたって自己主導的な学習者になることで、そこには自律的特性と独立的な特性が問われている。つまり、学習者自ら学習の目標の設定、学習戦略、学習に必要とされる道具の選択、結果の評価等、学習者が自ら学習を主導的に実践していくことが描かれている。ここから分かるように、自己主導的学習論には、成人学習者の主体性、能動性、独立性に注目し、そこで大事な部分は学習者の主導性と自己管理である<sup>31</sup>。Toughの自己主導的学習論はKnowlesによってさらに具体的に発展し、教育分野全体に知られるようになった。Knowles (1975) は自分の著書『self-directed learning: A

guide for learners and teachers』で、学習者が自ら学習の目標を達成できるよう実践的なガイドを提示している。

自己主導的学習論は、1970年代の成人教育理論の領域で学習者の自律的特性と独立的な側面から他者から独立して、学習を主導的に実践していくという観点から注目を浴びていた。しかし、研究の対象を主に白人に限られていること<sup>32</sup>や自己主導的学習が市場開放により商品性として使われる可能性があること<sup>33</sup>など様々な指摘もされている。内容も具体的にみても、単に自分が学習したいことを自分で選択していくという話に過ぎない。また、自己主導的学習論は、個人が独立性をもって自律的に学習活動を行うことを学習としてみるなら、その学習活動における責任は全てその個人が負うことにもなる。本当に学習とは個人が自律的に選択し、その選択は全て個人の責任であろうか。さらに、Knowles 自身も伝統的学習理論である行動主義的学習理論を批判しながらも、Knowles の自己主導的学習論では行動主義のパラダイムの中で考案されている<sup>34</sup>批判も受けている。つまり、Knowles の自己主導的学習論は伝統的な学習理論の枠組みの中で考案された教授活動であるという批判である。

### 変容理論 (transformative learning theory)

自己主導的学習論が欧米の成人教育領域の歴史を前半の主導し、注目を浴びたということ、変容理論 (transformative learning theory) は、今でもそのインパクトが認められ、変容理論の立場からの研究が今日まで活発に行われている。変容理論は Mezirow から発展した学習理論である。彼は変容理論を「未来の行動方向を決定するために過去の解釈を用いながら自分の経験の意味を新しく或いは修正しながら構築するプロセス<sup>35</sup>」として定義している。Mezirow によると、私たちは人それぞれ世界観や世界を認識する観点を持っているという。それを変容理論では「準拠枠 Frame of reference」というが、変容理論ではある経験などを通して自分が持っていた「準拠枠」を「批判的な省察 (critical reflection)」を通して変容する「準拠枠の再構築のプロセス」を学習としてとらえる。つまり、その「準拠枠」の変容は、ある経験を通してのみではなく、批判的な省察が不可欠となる<sup>36</sup>。ここでの学習とは、従来の学習のように何かの知識や情報を獲得したり拡張したりするというより、「私たちが知っていた何かを変化させること<sup>37</sup>」である。Merriam (2006) は「変容学習を通して私たちは他人

からの目的や価値、信念を無批判的に受容することから自由となる<sup>38</sup>」と述べた。つまり、「効果的な学習」は「効果的な省察」を通して発生する<sup>39</sup>。

成人の学習を「批判的省察」から変容する「準拋枠の再構築のプロセス」として提示した Mezirow の変容理論は今日まで成人教育分野で大きな影響と意義をもっている。

しかし「変容理論」の大きな批判点は、成人の学習を社会的文脈の視点からとらえてないことである。つまり、学習とは学習者が暮らしている世界と緊密に関係を結んでいるが<sup>40</sup>、Mezirow の変容理論では社会的文脈を考慮せず「過度に個人だけに集中している<sup>41</sup>」。

「変容理論」は学習とは個人の内部のどこかでおこる認知的観点から捉える個体主義的学習理論であるといえる。

### 状況的学習論 (situated learning theory)

レイヴとウェンガー (1991; 1993) が提示した「状況的学習論 (situated learning theory)」では、学習とは個人の頭の中でおこる認知的プロセスではなく、社会的活動であり、人びとに置かれているその状況に学習は埋め込まれているという立場である<sup>42</sup>。つまり、状況的学習論は従来の個体主義的学習理論を批判し、学習を社会的文脈の中から位置付けている。そこでの学習のプロセスは「学習は省察による個人の頭の中でおこるものではなく、その人が参加している状況に置かれている<sup>43</sup>」とし、「参加を通じた経験学習の結果はコミュニティが様々な慣行を改善し、新たな慣行を開発したり、或いは有害 (harmful) なことや機能障害 (dysfunctional) なことを処分したりして変化させることである<sup>44</sup>」。つまり、状況的学習論での学びは「人びとは参加、統合、そして他人からの観点を批判的に探究することを通して学び、解釈の新たな可能性は相互作用を通して開かれる<sup>45</sup>」とされる。

ここでの学習のプロセスは学校の教育や教育者が想定している段階や道筋を通り、目標を達成するということではない。ここでの学習のプロセスは、実践を理解し変化していくことであり、自分の「見方」を変化する<sup>46</sup>ことである。その変化によって参加者たちは実践コミュニティへの参加を深めていく。しかし、そのプロセスは単純な状況依存性や単に他者との相互作用として解消することではない。その実践コミュニティへの参加のプロセスは複雑で重層的複合的な社会的相互



関係である。つまり、学習は複雑で重層的複合的な社会的相互関係のプロセスであるが、その複雑なプロセスをみるため用いられている概念が、「正統性 (Legitimacy)」や「周辺性 (Peripherality)」 「参加 (Participation)」といった「正統的周辺参加 (legitimate peripheral participation)」や「道具 (人工物) (artifact)」 「透明性 (Transparency)」 「十全的参加 (Full Participation)」 などという概念装置である。

これらの概念は「実践コミュニティ」を分析するのに大事な概念である。実践コミュニティへの文化やルール、規則、権力という「透明性」や道具、古参者、新参者同士、他のコミュニティとの関係など、彼らに置かれている状況のあらゆるものとの相互作用から学習は起こる。つまり、この立場に立つと、実践コミュニティへの参加が不可欠である。しかし、だれもが実践コミュニティへ参加できるということではない。状況的学習論では、その「参加」について「正統的周辺参加」という概念から説明している。つまり、ある人が実践コミュニティへの参加をとするなら、その人は、その実践コミュニティから「入っても良い」という資格や承認などを得なければならない。それをここでは「正統性」として概念づけており、参加者は「正統的」に認められてはじめて実践コミュニティへ参加する。しかし、正統的に参加したことだけでは学習は起こらない。その人は実践コミュニティの「周辺の」な位置づけから「正統的」に参加が認めただけである。その周辺の位置づけから十全的参加者までのプロセスのなかから多様な相互作用を通して学習は起こる。また、参加者たちが十全的な参加者になるプロセスは、「成員は実践に関与しながら実践の意味を理解し、その理解にしたがって実践を行うことをとおしてアイデンティティを形成し、かつ、実践コミュニティを絶えず再構築していく<sup>47</sup>。つまり、「正統的周辺参加は実践における知性的技能の熟練のアイデンティティの発達と、実践共同体の再生産と変容との両方に関連している<sup>48</sup>」。状況的学習論は正統的周辺参加や十全的参加といった概念を用いて参加者と実践コミュニティの変容のプロセスを説明しようとする概念装置であるが、ここから分かるように、「参加者と実践コミュニティ」は二分法として分けることはできない。正統的周辺参加は「変化する人格と変化する実践共同体の二つを生み出すことに内在する共通のプロセス<sup>49</sup>」であるため、「参加者と実践コミュニティ」はお互いに絡んでおり、それらを引き離すことは出来ず、一つの分析単位としてとらえる。

では、状況的学習論の意義はどこにあるのか。第1に、状況的学習論は個体主義的学習理論の限界を指摘し、社会的文脈の視点から成人学習を実践コミュニティへの参加という成人教育学における新たなパラダイムを提示した点、第2に、その実践コミュニティへの参加のプロセスは単純な相互作用として解消することではなく、具体的な概念装置を挙げた所にある。

しかし、状況的学習論は今まで幾つかの指摘もされている。

第1に、彼らの事例では参加のプロセスが具体的に描かれていない。学習を実践コミュニティへ参加をするという「学習」のパラダイムの転換をもたらし、その実践コミュニティへの参加のプロセスを分析するための具体的な概念装置を挙げたことは彼らの理論の新しい点であると思われる。しかし、彼らが提唱した実践コミュニティへの参加における様々な経験と相互作用を通した十全的参加までの具体的なプロセスが描かれていない。高木光太郎（1999）は、状況的学習論について「社会的実践の現場を公的に反映する優位な実践共同体が用意する「期待される成員像」に学習者が順序に向かっていく過程（とその失敗）であるかのように叙述されてしまう<sup>50</sup>」とその恐れを指摘している。構成主義の立場に立つ状況的学習論は高木が指摘したようにその恐れを避けるためには実践コミュニティへの参加における具体的な学びのプロセスを描くことが求められる。

第2に、権力関係・パワー（Power）の問題である。権力関係の問題は成人教育の中でも重大な課題として議論されてきた。例えば、Mezirow が提唱した「変容理論」でも「批判的省察」における権力の問題が指摘されている。特に McDonald ら（1999）は、批判的省察を通した完全菜食主義者たち（Vegans）の研究において、彼らは Vegan として転換しても、社会文化的に周りの人びととの関係で Vegan としての生き方の厳しさを訴えていることを指摘し、批判的省察論の中でのパワーの問題を事例を通して明らかにしている。しかし、状況的学習論では権力関係（power relation）に対する議論があまりされていない<sup>51</sup>。彼らの理論ではパワーと権力の問題についてアクセスや透明性といった分析概念を提示したが<sup>52</sup>実際にはそれに対する議論は十分されてきていない<sup>53</sup>。

日本ではこのパワーと権力の問題において、ソーヤーりえこ（2010）の工学部の留学生の機械へのアクセスにおけるパワーの問題と高橋満（2012）の看護師の力量形成における権力関係の問題についての研究

は注目すべきである。二人の研究は実践コミュニティにおけるパワー・権力の問題をインフォーマル側面からパワーの様相と構造を具体的に明らかにしている。

まず、ソーヤーは、「実践のコミュニティはいつも新参者の実践へのアクセスを保障するとは限らない<sup>54</sup>」と述べながら、これをパワーの問題として理工系研究室の留学生の事例を挙げ、理工系研究室において留学生がどのように研究室に必要な装置にアクセスできたのか、または、できなかったのかを「文化的意味の理解」からその差を明らかにしている。装置へアクセスできなかった留学生は、言語的な問題による研究室の先輩（装置の管理する先輩・古参者）とのパワーの関係からアクセスできなかったこともあるが、さらに「装置にアクセスできなかったのは、彼の装置に対する文化的意味の理解の仕方による<sup>55</sup>」と指摘している。それに対して、装置へのアクセスができたもう一人の留学生は日本人同級性とのインタラクションを持つことにより装置にアクセスすることができたという<sup>56</sup>。つまり、研究室の装置へのアクセスにおけるパワーの関係は、研究室の文化的意味を理解するのにかしないのかによることであり、それにかかわるインフォーマル関係がいかに大事であるのかがソーヤーの研究から分かる。

高橋の研究では、看護師の力量形成のプロセスの研究のなかから看護師と医師との権力関係について言及している。高橋によると職場でのパワーの不均等は避けられないという。看護師と医師との関係は法制度上の権力関係である。この権力関係から看護師たちはどのように自分の力量を形成していくのか。高橋によると、看護師たちは＜問いかけ＞をすることで、「そのパワーを＜中和する＞という戦略

(techniques of neutralization)をとれるということ自体が、看護師の一つの力量としてとらえられる<sup>57</sup>」と述べ、医師との権力関係における看護師の力量形成を明らかにした。

具体的にその＜問いかけ＞とは、医師への「＜問いかけ＞による確認」と看護師の経験が浅いときには、先輩看護師や師長をとおして＜問いかけ＞をする技法をとっている<sup>58</sup>。また高橋はここから「知の創造」との関係で「知の創造としての学びをつくる上で、看護師同士、そして医師やコメディカルとの相互の信頼関係が大切であり、多様な契機をとおした相互支援の関係を築くことが重要である」と指摘しており、「それにはパワーを＜中和する＞社会的な力がある<sup>59</sup>」と述べ

た。労働の場での看護師の力量形成における権力関係の問題を具体的に分析した高橋の研究は注目するのに値する。

今まで検討をしたように状況的学習論では、実践コミュニティにおける学習をみる際、「状況的学習論の枠組みから事例をみる」とか「実践コミュニティをこの理論に合せる」ことや、「この事例は状況的学習論であった」ということではない。複雑で重層的複合的な社会的相互関係の学習のプロセスを論述する際に考案した分析視角であり、概念装置である。そこでは「学ぶというのとは何かという本質論と、いかに学ぶのかという過程論<sup>60</sup>」が問われている。

したがって、本研究では「自主活動」の学習のプロセスをみる際の成人学習論的立場として状況的学習論の立場に立つ。その理由としては、①状況的学習論は人びとの学びのプロセスを相互作用と実践コミュニティへの参加という社会的文脈から解消している。筆者も学習とは個人の頭の中でおこる認知的プロセスではなく、人びとや物といった相互作用から生じると考えている。さらに、②その学びのプロセスを説明し分析するため具体的な概念装置を挙げている。自主活動の学びのプロセスを明らかにするのに有用な分析視角を与えている。

しかし、状況的学習論の立場をそのまま受け入れることではない。

では、状況的学習論におけるまだ不明なところはなにか。以下では、状況的学習論における分析単位と分析視野について議論したい。

### 3. 状況的学習論の分析単位と分析視野

#### 1) 一つの分析単位としての「特定の実践コミュニティ」

かつて Lemke (1997) は、実践コミュニティへの参加者において、「参加者」が複数のコミュニティへ参加していることとの関係をどうとらえるのかを指摘している。実践コミュニティへ参加している参加者は一つの実践コミュニティではなく、複数の実践コミュニティへ参加しているが、レイヴとウェンガーはそれを視野にいれてないという指摘である<sup>61</sup>。

確かにレイヴとウェンガーは Lemke が指摘しているように参加者が複数の実践コミュニティへ参加していることを視野にいれていない。しかし、参加者が他のコミュニティへも参加していることをみなければならないということは分析単位をその個人に置くということになる。

状況的学習論で注目しているのは「個体」ではなく、「特定の実践コミュニティ」である。

「特定の実践コミュニティ」を分析単位として着目することにより、参加における「参加者の意識・行動の変革」のプロセスを分析視野に入れることを含め「実践コミュニティの変化」と実践コミュニティにおける「状況」がどのように変わったのかも分析視野として捉えられることが可能となる。つまり、状況的学習論は社会的文脈と緊密に関係していることとすると、その「特定の実践コミュニティ」がどのような環境、どのような理由、どのような社会的文脈といった「状況」に置かれていて、参加者たちが参加を深めることによりその「状況」と「参加者の意識・行動の変革」「実践コミュニティの変革」がどのように影響し合い（絡んでおり）、変わっていくのかを分析視野としなければならない。

かつて Clancey (1997) は「人間の全ての考えや行動は環境に合わせて変化する、いわゆる、状況的である<sup>62</sup>」と述べている。つまり、人間は状況の影響を強く受けるという議論であるが、その状況は逆に人間が自分たちの置かれている状況を変えることもできる。つまり、成人が実践コミュニティへの参加を通して学習を深めることにより参加者たちに置かれていた「状況」も変わるはずである。参加者たちが実践コミュニティへの参加を深めることにより、参加者に置かれていた「状況」に変容が生じたことを参加者の学習の意義の中の一つとして理解することができるのではないか。それは実践コミュニティの質を問う<sup>63</sup>ことにも繋がる。では、具体的に状況的学習論における分析視野をどのようにとらえることが出来るのか。

## 2) 「特定の実践コミュニティ」における分析視野

「特定の実践コミュニティ」を分析単位として着目するなら、その分析視野を再設定する必要もある。今までの数少ない状況的学習論の立場からの事例研究での分析視野は「参加者の意識や行動の変革」のみ分析視野として焦点化されていた。しかし、状況的学習論が社会的文脈から学習を捉え、従来の個体主義的学習論を越える学習論であるなら、「特定の実践コミュニティ」に「参加者」「実践コミュニティ」「状況」を分析視野として入れなければならないのが私の主張である。つまり、状況的学習論は社会的文脈の視点から捉えると、「参加者」と「実

実践コミュニティ」「状況」はお互いに絡んでおり、お互いに影響し合いながら変革していく。

上述したように、状況的学習論の研究では、主に参加者の意識や行動の変革が描かれている。しかし、実践コミュニティへ参加している参加者たちの意識や行動の変革により、実践コミュニティも変革をし、さらに、参加者たちが置かれていた「状況」にも変革が生じる。つまり、状況的学習論における分析対象として「特定の実践コミュニティ」に焦点を置くことができるが、「参加者の意識・行動の変革」、「実践コミュニティの変革」、「状況の変革」は順番通りに変革することではなく、これらの3つの分析単位は社会的文脈として相互に絡んでおり、お互いに影響し合いながら変革が生じるため分離して分析することはできない。

以上、社会的文脈における「特定の実践コミュニティ」の分析単位を図として表すと以下の図3として示すことができる。

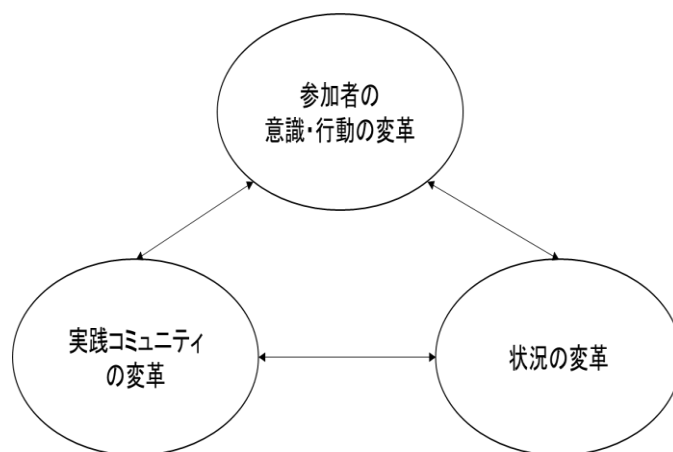


図3 状況的学習論の分析単位と分析視野1 -  
「特定の実践コミュニティ」への着目

この「特定の実践コミュニティ」へ着目した代表的な事例研究としてはレイヴとウェンガーの徒弟制の研究である。しかし、彼らの研究は上述したように、その具体的な変革のプロセスが描かれていない。

「特定の実践コミュニティ」を分析単位として着目するなら、「参加者の意識・行動の変革」「実践コミュニティの変革」「状況」はお互いに絡んでいるため、一つの分析単位として視野に入れ、参加のプロセス

のなかでそれらがお互いにどのように影響しあいながら変革していくのかの具体的なプロセスを明らかにすることが求められる。

また、状況的学習論の分析単位は「特定の実践コミュニティ」の中で「特定の参加者」に焦点を置いて着目することもできる。これは、実践コミュニティへ参加する参加者のなかでも、特定の参加者に焦点を置いて、彼ら・彼女らの参加のプロセスを分析する。また、この分析単位に着目することは一人に焦点をあてて、「特定の実践コミュニティ」への参加におけるライフコースアプローチも可能である。

「特定の参加者」を分析単位として着目することは個体主義ではないかという批判があるかもしれない。しかし、「特定の実践コミュニティ」へ参加をすることの前提として「特定の参加者」に着目することであり、その分析の視点は個体主義的アプローチではなく、参加者が置かれている文脈から位置づける。つまり、「特定の参加者」は「特定の実践コミュニティ」のなかでどのように学習していくのかに焦点が絞られているため、実践コミュニティのルールや文化、状況、他参加者からの相互影響から「特定の参加者」を位置づけていく。

この分析単位を図として表すと図4として示すことができる。

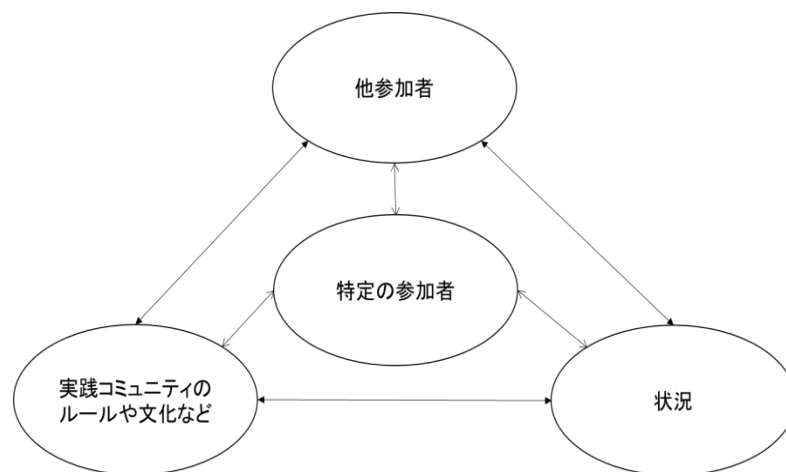


図4 状況的学習論の分析単位と分析視野2 -

「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者」への着目

この分析視点からの代表的な研究は、高橋の10年以上の経歴をもつ看護師の研究（高橋満, 2011, 2012）とソーヤーの工学部に所属している留学生の機械へのアクセスの問題（ソーヤーりえこ, 2010）の研究が挙げられる。

しかし、2人の研究は実践コミュニティにおける特定の参加者には焦点を置いているものの、本稿でいう分析単位と分析視野については意識していない。

以上、状況的学習論の分析単位と分析視野について検討を行った。状況的学習論の立場から実践コミュニティを分析するならば、その分析単位を「特定の実践コミュニティ」へ着目することと「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者」へ着目し、その分析視野として「参加者」「実践コミュニティ」「状況」を入れなければならないことの検討を行う必要性を確認した。

したがって本研究では、本研究で主張している分析視野に基づいて、「参加者の意識・行動の変革」「実践コミュニティのルールや方向性といったアイデンティティの変革」「状況の変革」を学習のプロセスとして捉える。

## まとめ

以上「2. 成人教育学習理論への注目」では、成人の自主活動における具体的な学びのプロセスをどのように分析するのか、成人の自主活動における成人学習理論的立場を確立するため、成人教育理論の検討を行い、以下のことについて述べた。

第1に、今日の成人教育での学習を見る視点は、成人の「経験」を基盤として、成人の教育・学習を「個体」の「省察」としてとらえるのか、実践コミュニティへの「参加」という「文脈」としてとらえるのかの2つに分かれている。

第2に、成人教育学理論のなかで主に3つの理論の検討を行った。その中で、自己主導的学習論と変容理論は、成人の学習を個体主義的学習理論の立場としてアプローチしているのに対して、状況的学習論は、個体主義的学習理論の限界を指摘し、社会的文脈の視点から成人学習を実践コミュニティへの参加という成人教育学における新たなパラダイムを提示した。さらに、その実践コミュニティへの参加のプロセスは単純な相互作用として解消することではなく、具体的な概念装置を挙げたことに意義を持っている。

第3に、状況的学習論の残された課題として、①具体的な参加のプロセスが描かれていないこと、②透明性という概念を用いながら権力・



パワーの問題について言及しているものの、そのプロセスの中ではその問題が解消されてないことがこれまで指摘されていた。

第4に、本研究での学習論的立場として状況的学習論の立場に立つが、まだ状況的学習論で不明な所である「状況的学習論における分析単位と分析視野」について述べた。ここでは、状況的学習論の立場から実践コミュニティを分析するならば、その分析単位を「特定の実践コミュニティ」へ着目することと「特定の実践コミュニティ」の中の「特定の参加者」へ着目することを述べた。また、今まで状況的学習論では「参加者の意識及び行動」の変革のみが分析視野であったが、社会的文脈の立場に立つなら、その分析視野として「参加者の意識及び行動の変革」を含め、「実践コミュニティの変革」「状況の変革」も分析視野として入れなければならないことを主張した。そのため、本研究では「参加者の意識・行動の変革」「実践コミュニティのルールや方向性といったアイデンティティの変革」「状況の変革」を学習のプロセスとして捉える。

学習を実践コミュニティへの参加として捉え、そこでの具体的な学びのプロセスと学習の意義を社会的文脈からの社会的相互作用の関係からアプローチしようとする状況的学習論は成人の「自主活動」への参加における学習のプロセスと意義を分析し説明するのに有用な概念装置である。

### 第3節 本研究の課題と方法の再設定

#### 1. 先行研究の指摘と本研究の課題

先行研究では①教育分野における市民や住民の自主活動に関する研究と②成人教育学理論に関する研究の検討を行った。

以上の先行研究の検討から幾つかの指摘を行い、本研究の課題を設定する。

第1に、日本の社会教育分野では、本研究で注目している自主活動がもつ教育・学習力に期待が寄せられているものの、実際には自主活動の事例に着目して自主活動がもつ教育学的意義を明らかにした研究は少ない。

第2に、さらにその自主活動の事例研究では、各自主活動の事例がもつ教育学的意義を明らかにしていることには大きな意義をもってい

るが、その自主活動のプロセスは単なる活動実態の紹介に留まっている。自主活動のプロセスを学術的な視点から詳細に分析することが求められる。

第3に、そのため本研究では自主活動の活動プロセスを分析する際、有用な学術的視点を与えてくれる理論として欧米の成人教育学理論の状況的学習論の立場に立つが、状況的学習論ではまだ捉えていないところを議論し指摘した。

1つ目は、状況的学習論の分析単位である。状況的学習論の批判の中で1つは、状況的学習論では参加者が複数の実践コミュニティへ参加していることを視野にいていないという批判がある。しかし、参加者が他のコミュニティへも参加していることをみなければならないということは分析単位をその個人に置くということになる。状況的学習論で注目しているのは「個体」ではなく、「特定の実践コミュニティ」であり、「特定の実践コミュニティ」のなかでの「特定の参加者」であることを議論した。

2つ目は、状況的学習論における分析視野である。今までの数少ない状況的学習論の立場からの事例研究での分析視野は「参加者の意識や行動の変革」のみを分析視野として焦点化されていた。しかし、状況的学習論が社会的文脈から学習を捉え、従来の個体主義的学習論を乗り越える学習論であるなら、その分析視野を「参加者の意識や行動の変革」「実践コミュニティの変革」「状況の変革」を分析視野として入れなければならないことを主張した。

つまり、状況的学習論の立場から実践コミュニティを分析するならば、その分析単位を「特定の実践コミュニティ」へ着目することと「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者」へ着目し、その分析視野として「参加者の意識や行動の変革」「実践コミュニティの変革」「状況の変革」を分析視野として入れなければならないことの検討を行う必要性を確認した。

以上の先行研究の批判点を踏まえて本研究の課題を設定する。

本研究の課題は「本研究で確立した理論的立場と分析視野から「自主活動」の具体的な学びのプロセスを明らかにする」ことである。

理論的立場は成人教育理論である「状況的学習論」であり、事例を分析する分析視野は「自主活動」に参加している「参加者たちの意識や行動の変革」「実践コミュニティのルールや方向性といった実践コミュニティのアイデンティティの変革」「参加者に置かれている或いは囲

まれている状況の変革」であり、その変革のプロセスを本研究では学びのプロセスとしてとらえる。

## 2. 研究の方法

課題を明らかにするための研究方法としては具体的な「自主活動」を取り上げ、事例研究を行う。事例研究の調査法として質的調査法を取る。本研究での事例は、高齢者の健康づくりの「自主活動」と災害復興地域づくりの「自主活動」である。具体的な事例としては、高齢者の健康づくりの「自主活動」は仙台市宮城野区介護予防運動の自主活動である「つるがやりフレッシュ倶楽部」を取り上げる。災害復興地域づくりの自主活動は、「南三陸町入谷地区の住民の自主活動」を取り上げる。この2つの事例とも本研究で捉えている「自主活動」の概念に適切であると判断したため具体的な事例として着目する。

## 3. 分析手法

質的調査から得られたデータの分析は、記録化されたデータを質的データ分析ツールである MAXQDA で1次分析を行い、その後、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて分析手順にそって2次分析を行う。

1次分析として MAXQDA ソフトを用いる理由は、録音データから文字に起こした質的データを全体的に確認しながら、質的データをコードとして分類・整理することができるためである。その後、さらに参加のプロセスにおける「相互関係性」を分析するため、2次分析として M-GTA を用いる。M-GTA は、インタビューの流れを全体的に把握することができ、ワークシートを用いながら概念を生成し、参加のプロセスにおける「相互関係性」を分析するのに適切であると判断したためである。しかし、最終的には、M-GTA の分析手法を用いながらも理論的構築を試みることでより現象記述的・説明的分析として行う<sup>64</sup>。

## 註

---

<sup>1</sup> 佐藤一子 編集 (2004)『NP0 の教育力—生涯学習と市民的公共性』東京大学出版会, 6-7 頁.

- 
- <sup>2</sup> 同上, ii 頁.
- <sup>3</sup> 高橋満 (2009)『NPO の公共性と生涯学習のガバナンス』東信堂. 10 頁.
- <sup>4</sup> 日本社会教育学会編 (2007)『NPO と社会教育』東洋館出版社. 19 頁.
- <sup>5</sup> 同上.
- <sup>6</sup> 高橋満 (2003)『社会教育の現代的実践 : 学びをつくるコラボレーション』創風社. 33 頁.
- <sup>7</sup> サードセクターは NPO 以外にも協同組合も含む概念として捉えられている。
- <sup>8</sup> 図 2 は、高橋満, 前掲註 (3), 32 頁から再引用.
- <sup>9</sup> 高橋 満, 前掲註 (6), 101-103 頁.
- <sup>10</sup> 牧野篤 (2007)「高齢者教育の課題と老人大学のあり方に関する一考察ー福祉と教育のはざままでー」生涯学習・キャリア教育研究, 3, 20 頁.
- <sup>11</sup> 同上, 36 頁.
- <sup>12</sup> 堀薫夫 (1993)「高齢者のエイジングへの意識に関する調査研究」大阪教育大学紀要 第IV部門: 教育科学, 42・1, 1-10 頁.
- <sup>13</sup> 堀 薫夫, 福嶋 順 (2007)「高齢者の社会参加活動と生涯学習活動の関連に関する一考察ー大阪府老人大学修了者を事例としてー」大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, 56・1, 109 頁.
- <sup>14</sup> 堀 薫夫 (2015)「継続性の視点からみた高齢期における学習意識の変化に関する調査研究」大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, 63・2, 97-98 頁.
- <sup>15</sup> 堀 薫夫 (2009)「人口の高齢化は学習をどう変えるか」関口礼子著『新しい時代の生涯学習』有斐閣アルマ, 182 頁.
- <sup>16</sup> 福井 庸子 (2007)「NPO 博物館の活動にみる「学び」の意義ーNPO 法人高麗博物館の取り組みを中心にーp. 162., 日本社会教育学会編『NPO と社会教育』東洋館出版社.
- <sup>17</sup> 同上, p. 163.
- <sup>18</sup> 大高研道 (2015)「社会的企業から地域の協同へ」p. 148., 佐藤一子編『地域学習の創造ー地域再生への学びを拓くー』東京大学出版会.
- <sup>19</sup> 同上, p. 149.
- <sup>20</sup> 金宝藍 (2015)「韓国における「エネルギー自立マウル」運動とその学習活動ー「持続可能な社会」の創造に向かう自己教育実践を手がかりにー」pp.108-109., 日本社会教育学会年報編集委員会『社会教育としての ESDー持続可能な地域をつくる』東洋館出版社.
- <sup>21</sup> 同上, pp. 107-108.
- <sup>22</sup> Kang, D. J. (2015). *Life and learning of Korean artists and craftsmen: Rhizoactivity*. Abingdon, UK and New York: Routledge.
- Kang, D, J. Kim, U, T. Park, J, S. Choi, S, J. and Choi, I, S. (2017) “Learner Positions, Learning Management Apparatus and Contextual Knowledge:

- 
- Exploring Core Concepts for Building a Lifelong Learning Theory”. *Journal of Lifelong Education*. 2017, Vol. 23, No. 4 pp. 27-53. (原文 : 강대중, 김의태, 박지숙, 최선주, 최일선(2017) 학습자자세, 학습관리장치, 맥락지식 - 평생학습이론 구축을 위한 중심 개념 탐색-, 평생교육학연구, Vol. 23, No. 4 pp. 27-53 ).
- <sup>2 3</sup> Merriam, S. B. Caffarella, R. S. and Baumgartner, L. M. (2006) *Learning in Adulthood: A Comprehensive Guide, 3 edition*. Jossey-Bass, p. 84.
- <sup>2 4</sup> Ibid., p. 103.
- <sup>2 5</sup> Jung, M. S. (2010) *Understanding of adult learning*, EPISTEME, p. 6 (原文 : 정민승(2010)성인학습의 이해. 에스테메스).
- <sup>2 6</sup> Dewey (1938) *EXPERIENCE AND EDUCATION*. New York : Macmillan, p. 13.
- <sup>2 7</sup> Ibid., p. 27.
- <sup>2 8</sup> Ibid., p. 41.
- <sup>2 9</sup> Merriam, S. B. Caffarella, R. S. and Baumgartner, L. M., op.cit., p. 142.
- <sup>3 0</sup> Fenwick, T. (2003) *Learning through experience: Troubling assumptions and intersecting questions*. FL: Krieger.
- <sup>3 1</sup> Yang, H. K. (2017) *Introduction to Lifelong Education*. Seoul: SinJung. (原文 : 양홍권 (2017) 평생교육론, 서울: 신정) .
- <sup>3 2</sup> Ibid.
- <sup>3 3</sup> Jung, M. S., op.cit.
- <sup>3 4</sup> Bouchard, P. (1994) Self-directed professionals and autodidactic choice: a framework for analysis. ERIC ED 377298, Elias., J. L. & Merriam, S. (1980) Philosophical foundations of adult education, Krieger Pub. quoted in Jung, M. S. (2010) *Understanding of adult learning*, EPISTEME, p. 103.
- <sup>3 5</sup> Mezirow, J. & Associates (2000) *Learning as transformation: Critical perspectives on a theory in progress*, San Francisco: Jossey-Bass. p. 5.
- <sup>3 6</sup> Brookfield, S. (1991) *Developing critical thinkers: Challenging adults to explore alternative ways of thinking and acting*. San Francisco: Jossey-Bass. p. 7.
- <sup>3 7</sup> Kegan, R (2000) What “form” transforms? A constructive-developmental perspective on transformational learning. In J. Mezirow & Associates, *Learning as transformation: Critical perspectives on a theory in progress* (pp. 35-70). San Francisco: Jossey-Bass, p. 49.
- <sup>3 8</sup> Merriam, S. B. Caffarella, R. S. and Baumgartner, L. M., op.cit., p. 133.
- <sup>3 9</sup> Criticos, C. (1993) “Experiential learning and social transformation for a post-apartheid learning future” . In D. Boud, R. Cohen, D. Walker (Eds.). *Experience for Learning*. pp. 157-168. London: Open University Press.
- <sup>4 0</sup> Jarvis, P (1987) *Adult learning in the social context*. London: Groom Helm, p. 11.
- <sup>4 1</sup> Merriam, S. B. Caffarella, R. S. and Baumgartner, L. M., op.cit., p. 153.
- <sup>4 2</sup> Lave. J, Wenger. E (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral*

---

*Participation*, Cambridge University Press (レイヴ. J & ウェンガー. E, 佐伯 胖 訳 (1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書).

<sup>4 3</sup> Fenwick, T, op.cit., p.25.

<sup>4 4</sup> Ibid. p.27.

<sup>4 5</sup> Gergen, K, J (1995) “Social construction and the educational process” . In L. P. Steffe & J. Gale (Eds.), *Constructivism in education* (pp. 17-39). Hillsdale, NJ: Erlbaum, p. 34.

<sup>4 6</sup> 岡本純也 (2000)「実践教育における正統的周辺参加」研究年報 2000 巻 82-87 頁 一橋大学紀要, 84 頁.

<sup>4 7</sup> 高橋満, 前掲註 (3), 82 頁.

<sup>4 8</sup> レイヴ. J & ウェンガー. E, 佐伯 胖 訳 (1993), 前掲註 (4 2), 32 頁.

<sup>4 9</sup> 同上, 33 頁.

<sup>5 0</sup> 高木光太郎 (1999)「正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張 : 実践共同体間移動を視野に入れた学習論のために」東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要 10, 1-14, 5 頁.

<sup>5 1</sup> Contu, A. & Willmott, H. (2003) “Re-Embedding Situatedness: The Importance of Power Relations in Learning Theory” , *Organization Science*, 14(3), pp. 283-296.

<sup>5 2</sup> 高橋満, 前掲註 (3), 89 頁.

<sup>5 3</sup> 松本大 (2006)「状況的学習と成人教育」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55 (1), 219-232, 227 頁.

<sup>5 4</sup> ソーヤー りえこ (2010)「理工系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化, pp.93-126. 上野直樹, ソーヤー りえこ編著 (2010)『文化と状況的学習-実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社. 94 頁.

<sup>5 5</sup> 同上, p. 108.

<sup>5 6</sup> 同上, pp. 113-114.

<sup>5 7</sup> 高橋満 (2012)「看護の力をどのように育むのか (2) —労働の場における学びの方法と構造—」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60 (2), p. 119.

<sup>5 8</sup> 同上, p. 106.

<sup>5 9</sup> 同上, p. 119.

<sup>6 0</sup> 高橋満, 前掲註 (3), 69 頁.

<sup>6 1</sup> Lemke(1997) “Cognition, context, and learning: A social semiotic perspective” . In Kirshner D., & Whison, J.A (eds.), *Situated Cognition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, p.42.

<sup>6 2</sup> Clancey, W, J. (1997) *Situated cognition: on human knowledge and computer representations*. New York: Cambridge University Press, pp.1-2.

<sup>6 3</sup> 松本大, 前掲註 (5 3) .

<sup>6 4</sup> 高橋 (2011) は、看護師の力量形成に関する研究で M-GTA の分析手順にそって

---

分析をしたが、最終的には『現象記述的研究ないしは探索的研究』として位置付けている。その理由として、『成人教育の領域における研究状況からみて、この手法の意味で理論化を図るよりも、看護師の労働と学習がどのように関係しているのかを明らかにすること、どのような学びの方法が、いかに構造化されているのかを明らかということを、まずは丁寧に記述することが重要だと判断したゆえである』と述べている。本研究も成人教育の領域として位置づくため、事例の分析を現象記述的・説明的分析として行う。

### 第 3 章 高齢者の「自主活動」と健康づくり

#### はじめに

第 3 章からは具体的な事例をとおして本研究の課題を明らかにする。事例 1 は高齢者の健康づくりの「自主活動」である「つるがやりフレッシュ倶楽部」である。

第 1 節では、高齢者の健康づくりに関する先行研究の整理を行う。主に、福祉や医学分野での先行研究の整理を行う。その理由としては、高齢者の健康づくりに関する研究は教育分野より福祉や医療の分野での研究が多くされており、高齢者の健康づくりに関する議論を広く理解するためである。

それらを踏まえて第 2 節では、第 3 章の事例である「つるがやりフレッシュ倶楽部」の調査の概要をまとめる。

第 3 節では、「つるがやりフレッシュ倶楽部」の事例を通して、高齢者の健康の「自主活動」の学びのプロセスを明らかにする。第 3 節は、本研究の理論的検討で確立した「特定の実践コミュニティ」へ着目し、「意識・行動の変革」「コミュニティの変革」「状況の変革」の分析視野から「特定の実践コミュニティ」である高齢者の「自主活動」の学びのプロセスを明らかにする。そして、第 3 節の「3. 「自主活動」に運営者として参加することの意味」と「4. 高齢者の「自主活動」と「包摂」のプロセス」は、「特定の実践コミュニティ」のなかでの「特定の参加者」へ着目する。第 3 節の 3. では、高齢者の健康づくりの「自主活動」を運営する高齢者に着目して、運営者としての参加の意味について分析する。第 3 節の 4. では、「自主活動」に参加したがある理由で参加を辞め、その後再参加した 3 人に着目して、「閉じこもりであった高齢者の状況と再参加のプロセス」について明らかにする。ここでいう「再参加のプロセス」を「学習のプロセスと包摂のプロセス」としても捉える。具体的に、彼女らがどのような状況で



あって、どのようなキッカケで参加し包摂されたのか、そのプロセスを明らかにする。

第3節の「1. 健康に対する意識及び行動の変革」と「2. 人間関係の広がり的重要性」で高齢者の健康づくりの自主活動の学びのプロセスを詳細に分析し、「3. 「自主活動」に運営者として参加することの意味」と「4. 高齢者の「自主活動」と「包摂」のプロセス」を通して高齢者の「自主活動」がもつ意義を明らかにする。

## 第1節 先行研究の整理

### 1. 高齢者の社会参加に関する先行研究の整理

#### 高齢者の社会参加とその関連要因

福祉領域の中で高齢者の社会参加に関する研究の中で、高齢者の社会参加とその関連要因に焦点が当てられた研究が多くみられる。

まず、松岡（1992）は、高齢者の社会参加に影響を及ぼす要因について、長野県全域の60歳の男女1,500人を対象に量的調査を実施した。その結果として、「活動能力の障害が少ないこと」、「活用できる技術・知識・資格を持っていること」、「親しい友人・隣人が多いこと」が社会参加に強く影響されていると述べている。

さらに西山ら（2000）は、高齢者の社会参加の関連要因を含め、非参加の人の関連要因も明らかにしている。調査対象と調査の方法については、北海道旭川市新旭川・永山地区全域の65歳以上男女1,000人を対象にアンケート調査を行い、2次調査としてアンケート調査の対象者の中で49人を抽出し、戸別訪問面接調査を行った。参加の要因としては、「活動参加目的（仲間づくり、健康などの目的）」、「継続要因（自己を高めること、交流の楽しさなど）」、「活動参加場所・移動手段（身近な所）」、「活動参加のキッカケ・情報（身近かな人からの情報、町内会などの呼びかけなど）」という4つに分けてそれぞれの要因を説明している。非

参加の要因としては、「①身体の問題、②参加したくない、③呼びかけや情報が少ない、④活動内容と活動の形態に参加しにくい要因がある」ことを挙げた。

それに対して矢庭さゆりら（2011）は、高齢者の社会参加を幾つかのカテゴリーに分け、そのカテゴリーへの参加要因を明らかにしようとしている。社会参加のカテゴリーは、「地域の総代」「老人クラブの役職」「趣味の会の世話役」「民生委員等公的役割」「社会福祉協議会の活動」「神社・寺総代」「シルバー人材センター登録」「ボランティア活動」として8つに分けている。その後、特定の市の高齢者505人を対象に量的調査を実施し、社会参加の現状とその関連要因を明らかにした。結果として、社会参加の状況は、「神社・寺総代」、「地域の総代」をしている者は男性が多く、「ボランティア活動」は女性が多いこと、「地域の総代」、「民生委員等の公的役割」、「社会福祉協議会の活動」、「ボランティア活動」は前期高齢者の方が多く、「老人クラブの役職」は後期高齢者が多いことを指摘している。それぞれのカテゴリーへの参加要因としては、地域活動の全般的に男性および前期高齢者が関連しており、「ボランティア活動」への参加には、女性、年齢に加えて近隣ネットワークが10人以上の者に有意な関連があると指摘した。

一方、季東輝（2012）は、女性高齢者に着目して、男性高齢者と比較しながら女性高齢者の社会参加とその関連要因について量的調査を行った。対象者は、北九州市の市民センターと高齢者学習センターなどの施設を利用している60歳以上の高齢者である。李は、量的調査の結果、女性高齢者の社会参加に影響を与える要因として4点挙げている。まず1つ目は、「再就職環境と年金制度などの社会的・経済的な要因の影響」、2つ目は、「公民館などの高齢者の健康促進などの地域活動の有無の影響」、3つ目は、「女性高齢者によって多く家事を担っている家庭内要因の影響」、4つ目は、「健康状態と学歴などの個人的要因の影響」を挙げている。つまり、1つ目の要素については、年金制度の普及で様々な社会活動に参加できるという保障に繋がっていると述べ

ており、2つ目の要素については、公民館などの施設が高齢者の学習や健康促進の支援を行っているため、社会参加を促進する重要な要素であると述べている。3つ目の要素の場合は、家事を夫婦が分担すれば、女性はもっと時間的余裕ができ、社会参加に活躍できると述べ、最後の4つ目については、学歴が高い人と健康な人が社会参加をする傾向がみられると述べている。

また、高齢者の社会参加とその関連要因の中で社会参加の促進と阻害要因に焦点を当てた研究もある。

まず、宇良千秋（2003）は、高齢者の社会参加を促進するためにどのような条件が必要であるのかを明らかにするため、A市を調査対象地として選定し、A市の中でも社会参加をすすめても応じない一人暮らしの111人を対象に訪問アンケート調査を実施し、社会参加を阻害する要因を抽出した。その結果、「対人的ストレス」「身体的不調」「多忙のため」「地域からの孤立・孤独感」「必要性感じない」「コミュニケーションの障害」「性格的な問題」「経済的問題」「喪失体験」「サービス内容への不満」という10のカテゴリーを抽出した。また、社会参加を促進するためには、A市が実践したように、社会参加の少ない高齢者を戸別に訪問し、地域の情報やニーズの把握、訪問者との信頼関係を構築することにより、徐々に社会参加することが可能であると唱えている。

一方、岡本秀明（2008）は、社会参加の促進・阻害要因を独居・要介護・在日韓国人高齢者に着目して質的調査を行った。まず、促進要因として、「他者との結びつき」「活動情報へのアクセス」「活動に結びつく後押し」を挙げ、阻害要因としては、「新たな場への参加を好まない」「新たな活動をすることなどに対する関心が低い」「新たな活動をするところではない」ことを挙げた。

## 高齢者の社会参加と市民・住民組織

次に、高齢者の社会参加における市民・住民組織への活動に焦点を当てた研究がみられる。

まず、大塚旭（2007）は、高齢者の社会参加の場の一つであるNPOに着目して、高齢者によるNPO活動が継続させていくために

はどのような要因が必要かを「資金」「情報」「場所」「人と組織」「目的と計画」という5つの視点から、10年以上活動しているNPOを事例として取り上げ、質的調査によりその継続性と発展性の要因を明らかにしている。具体的にまず、「資金」に関しては、「主体的な活動を展開し自信で資金を生み出そうとしている」こと、そして「目的」に関しては、「活動者がそれぞれの活動に対する明確な目的を持ちながらも、お客さんに喜んでいただくことを第1の共通の目的として持っている」こと、また「情報」に関しては、活動者が地域社会のあらゆる手段を使って情報を頻繁に発信している」こと、「人と組織」に関しては、「組織活動だからといって「みんなが同じように行動しよう」ということではなく、その人のありのままを受け入れ、個性・能力・経験を伸ばしていくことを重視している」ことの4つが活動意欲を引き出している要因であると述べ、最後に「場所」に関しては、活動の拠点が活動を継続するための前提であると述べている。

## 高齢者の社会参加と健康

高齢者の社会参加と健康に焦点を当てた研究もある。

例えば、倉林しのぶら（2002）は、高齢者の社会参加と心身の健康状態との関連で、群馬県A村の65歳以上の高齢者を対象にした量的調査から、社会参加の程度が低い高齢者は高い高齢者よりうつ self の自覚症状を訴えることが多いと述べている。

そして、江川緑（2013）は、社会参加をしている元気な高齢者に着目して、社会参加をしている元気な高齢者の特徴について明らかにしている。調査方法としては、地域で生き活きと暮らす元気な高齢者が社会参加として地域の伝統的工芸品産業の技法を観光客相手に実演・紹介している7名の女性を対象に質的調査を行った。その結果として、社会参加している元気な高齢者の特徴を①良好な健康状態、②複数の社会参加、③規則正しいリズムのある生活、④学び続ける前向きな姿勢を挙げた。しかし、ここでいう生き活きと暮らす元気な高齢者の基準が何かが曖昧である。

## 高齢者の社会参加の推移

小林江里花(2015)は、実際高齢者の社会参加は増加したのか、あるいは、減少したのかという高齢者の社会参加の推移に焦点を当てた。具体的に、1980年代後半以降の社会参加に関するデータをもとに、社会参加を「私的な交流(友人近所の付き合い)」、「グループへの参加」「ボランティア活動」「趣味・学習を含む自主的活動」の4種類に区分し、社会参加を高頻度で参加する「高参加者」の割合の増加と全く参加しない「非参加者」の割合の減少の視点から高齢者の社会参加の推移を明らかにした。その結果として、「私的な交流(友人近所の付き合い)」と「グループへの参加の変化」は70代の男性のみ高参加層の縮小と非参加層の拡大をみせ、「ボランティア活動」については、活動者内での参加頻度が増加したことを明らかにした。最後に、「趣味・学習を含む自主的活動」は、唯一高参加者の増加と非参加者の減少がみられると指摘し、1980年代以降の高齢者の社会参加を4つの視点からその推移を明らかにした。

## 社会参加をする高齢者の特徴

最後に、高齢者の社会参加における社会参加をする高齢者はどのような高齢者であろうか、高齢者の中で誰が社会参加をしているのか、という社会参加をしている高齢者の特徴に焦点を当てた研究が幾つかみられる。

まず、藤村正之(2001)は、東京都23区内に居住している高齢者(65歳以上)の中で男性500名、女性500名を無作為に抽出した量的調査の結果として、社会参加は、収入が多いほど、学歴が高いほど、50歳時点の所属階層が高いほど、社会参加する活動領域の数が増えており、活動範囲が広がっていると述べている。

そして、金子勇(2011)は、社会参加をする高齢者は、自立志向が強い高齢者であると述べている。ここでいう「自立志向が強い高齢者」とは、時間もち、人脈もち、金もち、知識もちという特徴を兼ね備えており、さらに、その特徴のそれぞれが自立志向の7要素(「家族との良好な関係」「働くこと」「外出すること」

「得意をもつ」「運動散歩」「仲間の存在」)と独自に結びつけていると述べている。

それに対して稲葉陽二(2013)は、日本の高齢者の社会参加は、配偶者・パートナーなどの同居している家族が中心であり、配偶者・パートナーを失った高齢者は、社会参加の機会を大きく失っていると述べている。すなわち、日本の高齢者の社会参加は、個人の背景(財産や学歴等)や社会構造より、パートナーの有無によるものだと述べている。

## 2. 高齢者の介護予防運動への参加に関する先行研究の整理

ここでは本研究で注目している高齢者の介護予防運動に関する先行研究の整理を行う。

高齢者の介護予防運動に関する研究は、おもに行政や専門職、或いは民間などからの介護予防運動に関する研究が多くみられる。しかし、行政や専門職等の主導で行う介護予防運動は、短期間のプログラムとして行う場合が多いためその「時」だけ効果がある。つまり、「教室終了後に介護予防活動の継続が困難なため、介護予防効果が減少もしくは消失する<sup>1)</sup>」。

逢坂伸子ら(2009)は、大東市の事例を通して専門職主体の教室(拠点型)と地域住民主体の介護予防活動(地域型)の参加率と出席率、運動機能評価を比較して次のことを明らかにした。地域型と拠点型の運動機能はほぼ同率であり、さらに参加率と出席率は地域型が大きく上回っている。つまり、「専門職の関わりがなくても、地域住民の自主的な介護予防活動で十分に効果があると考えられる<sup>2)</sup>」と述べている。つまりそこでは、介護予防運動の効果を長期的にもたらしするためには、高齢者が介護予防運動を自主的に参加し、運営・活動することが求められる。

したがって、ここでは、行政や民間などの主導で行なう介護予防運動の活動ではなく、筆者の関心でもある高齢者の介護予防運動の自主活動に焦点を当てた先行研究の整理を行う。

まず、福島篤ら（2014）の高齢者の介護予防自主グループの設立過程における意識変革に着目した研究がある。福島篤らは、介護予防活動の自主グループを設立した高齢者を対象に、自主グループ設立に至るまでの対象者の過程およびそれらに関連する要因について明らかにしている。研究の方法と視点としては、介護予防リーダー養成講座の受講をした東京都 A 市在住の高齢者 10 人（62 歳から 76 歳まで）を対象に自主グループ設立に至るまで①対象者の気持ちや認識の変化のプロセス、②それらに関連する要因を明らかにするため質的調査を行った。その結果として、設立に至るまでのプロセスは「地域コミュニティ参加に至らせる気持ち・経験がある」「地域コミュニティ・講座を通して課題の認識が深まる」「設立準備を通して活動意欲・ノウハウが向上する」という大きく 3 つの段階から構成されているとし、さらにそのプロセスは「経験」「支援」「感情」といった関連要因が影響していると明らかにした。

それに対して、堀川俊一（2015）は、高齢者が住民主体の介護予防運動へ参加してからの効果に着目している。方法と視点としては、高知市で行われている住民主体の介護予防運動・いきいき百歳体操に参加している高齢者 2,598 人を対象に参加してからどのような効果があったのかを「運動機能の面」と「社会面や精神面」に分けて量的調査を行なった。その結果として、まず「運動機能の面」では、「体力がついた（35%）」、「階段の上り下りが楽にできるようになった（20%）」、「腰痛や膝の痛みが楽になった（19%）」、「歩くときに杖やシルバーカーがいなくなった（5%）」という効果があり、「社会面や精神面」では、「友人知人ができた（42%）」、「気持ちが明るくなった（30%）」、「おしゃべりが楽しくなった（23%）」などの効果があると明らかにした。

以上のように、「高齢者の介護予防運動」に関する研究の殆どは、行政や専門職等による介護予防運動の事業展開やプログラムを通じた効果等、その「活動」に焦点を当てた研究が多くあり、「高齢者当事者」による介護予防運動の自主グループの「活動」と「参加」に焦点を当てた研究は極めて少ない。

## まとめ

本研究では、事例研究の1つとして高齢者の健康づくりの「自主活動」に着目しており、そのため、高齢者の健康づくりに関する先行研究を幅広く検討し整理を行った。

以上の先行研究の整理から幾つかの指摘ができる。

1つ目に、殆どの研究が量的調査で行われている。高齢者の「社会参加」の研究も「介護予防運動」の研究も量的調査の方が蓄積されているが、質的調査からの研究は殆どいない。高齢者の社会参加の問題について深く理解し学習との関係性を具体的に構造化するためには質的調査からも行う必要がある。

2つ目に、高齢者の介護予防運動に関する研究は2005年以前にはあまり注目されていないものの、2006年の介護保険制度の改正と要介護予防の施策として出された介護予防事業の実施以前である2005年から本格的に「介護予防運動」に関する研究が始まり、しかも上で指摘したように、多くの研究が行政や専門職等による介護予防運動の事業展開やプログラムの開発等に着眼した研究が多い。また、地域住民が自主的に介護予防運動の活動を展開したり運営したりするのが行政や専門職が運営するより効果があることを明らかにした研究はあるにも関わらず<sup>3</sup>高齢者の自主活動からの介護予防運動に着目して介護予防運動への参加の意義を検討した研究は最近である<sup>4</sup>。つまり、高齢者の自主活動に注目すべきである議論はなされてはいるが、その研究の蓄積は極めて少なく、それも量的調査からのアプローチの研究である。これは、要介護予防の施策が出てからあまり経っていないからであると理解される。高齢者の自主活動に着目した質的研究が求められる。

3つ目に、高齢者の中で誰が社会参加をするのか、という問題に関する研究では、ある程度「余裕」のある高齢者が社会参加しやすいことが既に明らかになっている<sup>5</sup>が、社会参加しにくい高齢者の状況や事情などに目を向け、そのような状況に陥っていた高



高齢者が「包摂（inclusion）」されるプロセスについて検討した研究はあまり見られない。

以上の先行研究の整理と指摘を踏まえ、以下では高齢者の健康づくりの自主活動である「つるがやりフレッシュ倶楽部」の事例を質的調査を通して本研究における課題を明らかにする。

## 第 2 節 調査の概要

### 1. 仙台市宮城野区鶴ケ谷地区の「つるがやりフレッシュ倶楽部」の活動概要

調査対象グループである「つるがやりフレッシュ倶楽部」が活動している鶴ケ谷地区は、もともとは雑木の丘陵地だったところを仙台市が 1967 年から 70 年代に主体になって開拓し造成した開発面積 180ha の住宅団地である。当時は「あこがれのニュータウンで夢の住まいを」という宣伝文句もあり、脚光を浴びていた。70 年代後半は約 22,000 人の住民が住んでいたが、現在の人口は 12,499 人まで減少し、高齢化が急速に進み、高齢化率 38.1%（2018 年 10 月現在）である<sup>6</sup>。

鶴ケ谷地区が造成されてから、現在まで急速に地区の高齢化が進み、他所からのマイナス的イメージを含め、住民の交流の場がないことや、老夫婦や一人暮らしの高齢者が増えていること等、町が衰退しつつある課題を抱えていた。

このように仙台市の中でも高齢化率が高い鶴ケ谷地区は、2004 年度に宮城野区保健福祉センターで実施した「鶴ケ谷高齢者介護予防地域ケア事業」を契機として、地域で介護予防運動グループを担う推進員を募集し、6 回の研修を通じて 2005 年 1 月から「つるがやりフレッシュ倶楽部」がスタートした。すなわち、「つるがやりフレッシュ倶楽部」は、最初は区の研修からスタートしたが、現在は地域の高齢者が自主的に運営し、地域の高齢者が自主的に参加する「高齢者の介護予防運動の自主活動」である。「つるがやりフレッシュ倶楽部」は、高齢者が寝たきりにならないこ

とを目的として筋トレやロコモ体操等の転倒予防体操を中心に活動をしている。現在は、推進員 30 人と会員約 170 人の総 200 人が鶴ヶ谷地区の 5 か所に分かれて活動をしている。活動開催日は、5 か所とも月 2 回で開催しており、第 1 週目と第 3 週目にするところや第 2 週目と第 4 週目にするところ等、活動するところによって開催日が異なる。このように活動開催日が異なるのは、高齢者たちの意向によることが多いため、また、町内会の柵を乗り越える構造を取っているからである。「つるがやりフレッシュ倶楽部」は、5 か所全体を統率する会長がおり、各活動場所には、リーダーとサブリーダー、会計、推進員がいて、役員の会議は、3 ヶ月 1 回開催している。会費は、3 ヶ月 600 円で、その 600 円は、会場を借りる費用、情報チラシ等の事務費、会員の保険等の運営費として当てられている。

回の調査では、「つるがやりフレッシュ倶楽部」の会長が活動している「むつみ集会所」を中心に調査を行った。「むつみ集会所」は、鶴ヶ谷 5 丁目にあるが、前述したように参加している高齢者たちは 5 丁目以外の人も多い。開催日は、第 2 週目と 4 週目の水曜日であり、約 30 人から 35 人の高齢者が参加している。

## 2. 調査の方法と分析概要

調査の対象者は、「むつみ集会所」で活動している高齢者である。本格的な調査に入る前、2015 年 8 月に「つるがやりフレッシュ倶楽部」の会長との事前調査を 1 回行い、9 月から 11 月まで推進員と会員を対象に調査を行った。調査は「つるがやりフレッシュ倶楽部」の開催日（月 2 回・第 2 と 4 週目の水曜日）に訪問して半構造面接法により質的調査を行った。今回の調査協力者は総 7 名である。インタビューの時間は、参加者の介護予防運動に支障がない範囲で、介護予防運動が始まる前の 30 分から 40 分の間と終わった後の 40 分から 50 分間を調査に当てることができた。インタビューを進行する際には、各人に許可を得た上で I C レコーダを用いてインタビューの内容を録音した。

「つるがやりフレッシュ倶楽部」での分析データは、さらに妥当性を高めるため、2010 年度に同じ「つるがやりフレッシュ倶楽部」を調査した 11 名と今回の 7 名の総 18 名のデータを用いて分析を行った。

表 1 2015 年度「つるがやりフレッシュ倶楽部」のインタビュー調査協力者の概要

	年 齢	性 別	同 居 人	参 加 形 態
A	74 歳	男 性	妻	会 長
B	75 歳	女 性	夫	推 進 員
C	85 歳	女 性	な し	会 員
D	72 歳	男 性	妻	推 進 員
E	71 歳	女 性	夫	推 進 員
F	71 歳	女 性	な し	推 進 員
G	78 歳	女 性	息 子	会 員

表 2 2010 年度「つるがやりフレッシュ倶楽部」のインタビュー調査協力者の概要

	年 齢	性 別	同 居 人	参 加 形 態
H	78 歳	男 性	妻	会 員
I	75 歳	女 性	夫	会 員
J	不 明 *	女 性	不 明 *	会 員
K	79 歳	女 性	な し	会 員
L	74 歳	女 性	息 子 の 家 族	会 員
M	78 歳	女 性	夫	会 員
N	68 歳	男 性	妻	会 員
O	不 明 *	女 性	夫	会 員
P	不 明 *	女 性	夫	会 員
Q	不 明 *	女 性	不 明 *	会 員

R	不明*	女性	不明*	会員
---	-----	----	-----	----

\* 2010年度の調査データから把握できない。

以下は、本研究における分析の結果である。

まず、表3は、M-GTA分析手法の手順であるワークシートから得られた概念を本研究の理論的立場の分析視野である「意識・行動」「実践コミュニティ」「状況」の関係性を確認するため作成した分類表である。

表3 「つるがやりフレッシュ倶楽部」における学びのプロセス  
ー「意識・行動」「実践コミュニティ」「状況」の分類表

<b>【状況】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係が広がる</li> <li>・精神的に支えてくれる</li> <li>・ソーシャルキャピタルが増える</li> </ul>	<b>【コミュニティ】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・健康に関する情報</li> <li>・病院に関する情報</li> <li>・詐欺に関する情報</li> <li>・それ以外の様々な情報</li> </ul>
<b>【意識】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運動の必要さが分かる</li> </ul>	<b>【行動・コミュニティ】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報を交換</li> </ul>
<b>【意識・状況】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・町内会の生活が楽しくなる</li> <li>・地域の中で交流の大切さが分かる</li> <li>・他の交流の場へ参加</li> </ul>	<b>【意識・行動】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・健康維持</li> <li>・健康のため、食材に気にする</li> <li>・積極的な性格になる</li> <li>・運動に関する知識が増える</li> <li>・顔見知りが増える</li> </ul>
<b>【行動】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶する人が増える</li> <li>・皆と笑ったり喋ったりすることが元気になる</li> <li>・体の調子が良くなる</li> <li>・新聞等から健康に関する情報を切り抜く</li> <li>・健康に関する情報に目が向く</li> </ul>	

<ul style="list-style-type: none"> <li>・家で運動する</li> <li>・意識的に体を動かす</li> <li>・外に出て運動する</li> <li>・友達に運動を教える</li> <li>・母と一緒に運動する</li> <li>・他の人に体の調子を聞く</li> </ul>
<p>【行動・状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・町内活動に対して積極的になる</li> </ul>

この分類表から基づいて、以下、「つるがやりフレッシュ倶楽部」の学びのプロセスにおける相互関係性の結果を図5として作成することができた。

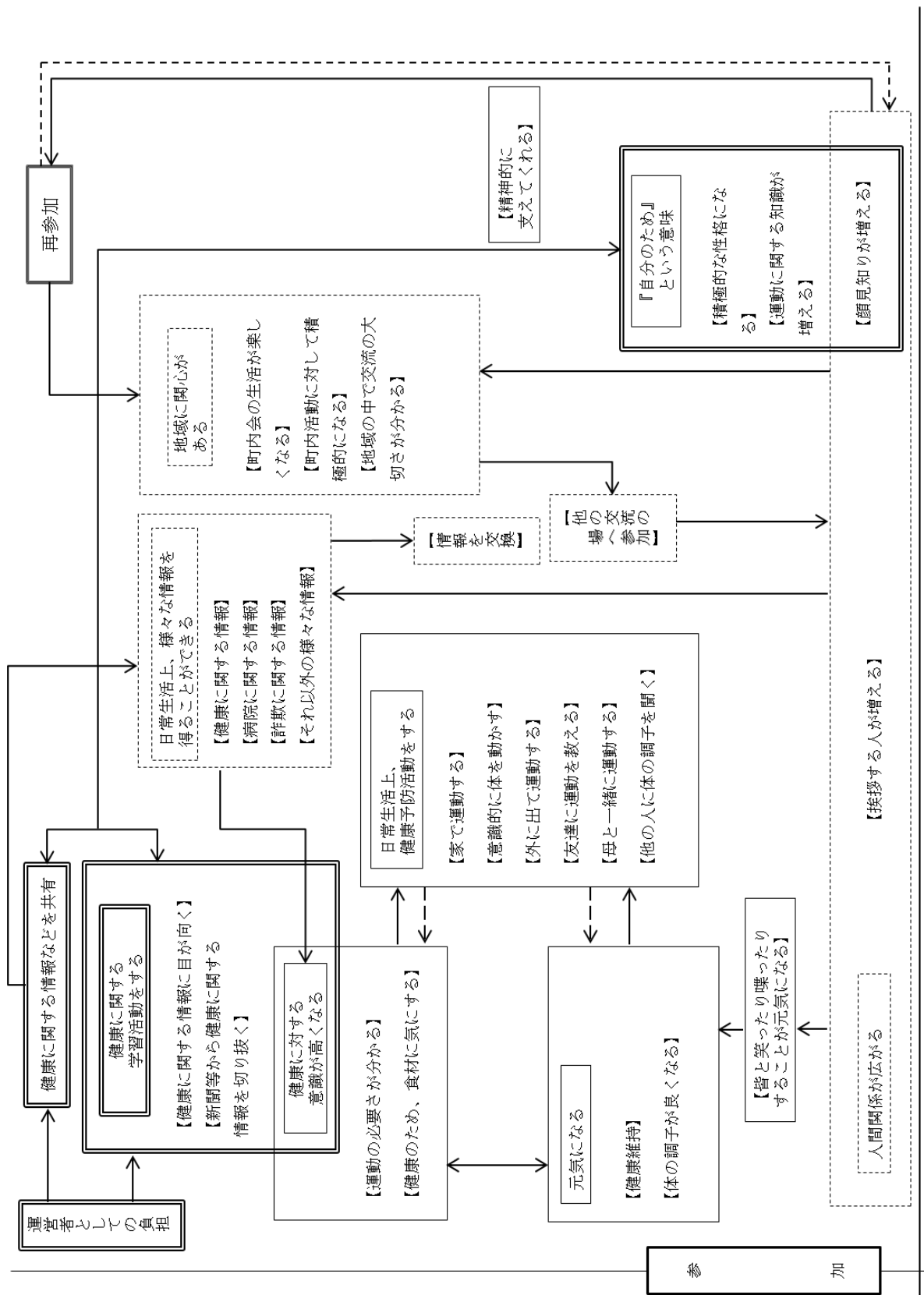


図5 「つるがやリフレッシュ倶楽部」の健康づくりにおける  
学びのプロセス

### 3. 参加前の状況と参加のキッカケ

「つるがやりフレッシュ倶楽部（以下、「自主活動」）」は最初、区の事業から始まり、その後、地域に住んでいる高齢者が推進員になって自主的に活動・運営をしている。具体的な分析に入る前に、ここでは、推進員の高齢者と会員の高齢者が参加する前の状況とどのようなキッカケから参加したのかについて確認する。

町内会の役員や民生委員などの活動をしていた。

「自主活動」へ参加する前の状況として、まず町内会の役員や民生委員等、何らかの形として地域との関わり持っている人がいた。

イン：町内会との関りはあったんですか？

A：あの、町内会の副会長をやっていました。

イン：最初に地域の活動は何でしたか？

D：町内会の役員とか民生委員ですね。

町内会の役員をしていたが、順番制のため自分の意志ではなくて役員に担ったと語る人もいる。

イン：専業主婦をしていてこの地域に昔から興味関心がありましたか？

G：関心というか、役員をやると自然にそうなりますよね。関心とは言わないかもしれないけれど、みんな順番に役員をしますからね。興味はないですけど、はっきり言うとか関心の方かな。そうしないとやっていけないので。

イン：（役員の仕事は）自分の意志ではなく順番にやらなくちゃいけないからですか？

G：それを言うと怒られちゃうけど、意志じゃないですね。

## 地域と関わりがあった住民の参加のキッカケ―区役所からの声掛け

このように地域に何らかの形として関わりをもっていた人々は、最初区役所からの声掛けで「自主活動」に参加するようになる。

D:これ、仙台市が、仙台市っていうより、区役所が健康に興味をもって、このような活動をやらなければダメだと考えたみたいですよ。その時、民生委員やっていたから、それで、協力してくださいね、という話をされたんで、ま、しょうがないかなと思って、区役所だって最初からばってやっても集まるかどうか分からないから、少しやれそうな人たちに声をかけったんですね。協力してくださいね。って、その時にいやいやながら、ま、しょうがないかっていうか、それで始めましたね。

H: えー私、町内会長をしとったころ、区役所のほうから、まあ地域の活性化といいますかこういう制度を作るというか、こういう運動をしたい、したがって推進委員の方から何度か推進してくれと、今のこの何人の方々を個人的に今度こういう自主活動がスタートするんで、推進という形になってくれという何年か前にし始めまして、お願いに回ったわけですよ。それでまあ引き受けていただいて、スタートしたわけですね。

イン: この活動を知ったキッカケはなんだったんですかね。

I: えーこれはね、まず最初に私は、ここの管理人やってるんですよ。

イン: ここの集会所のですか。

I: はい、それで区役所の方から実はこういうことを始めるので、下見をしたいということで実際に来たときに聞



いたんですよ。区役所の健康課っていうかなんとか。

### 地域に関心が全くなかった

しかし、現在「自主活動」へ参加している推進員の高齢者も会員の高齢者も地域に全く関心がない状況であった人もいた。この人たちは、仕事や子育てで忙しく、地域の行事も参加しなかったし、地域に知り合いもあまりいなかったと語る。

B：勤めているときは、共働きだったので保育所から家の親に面倒を見てもらっていて、そちらの学区に無理やり頼んで子供たちを小学校に通わせていました。家にはほとんど寝に来るようなもので、その時は地域に関心が全くなくて、行事があってもほとんど参加しないし、地域の人も知らない状態でした。(…略)何年か後に講習を受けてみないかと言われて受講したのが始まりでした。それまでは、本当に地域の事は何もわからなかったです。

イン：リフレッシュ自主活動の活動をする前に地域の活動をしたことはありますか？

E：一切ありません。

イン：じゃあこれが始めて？

E：そうです。働くのに必死で、子ども育てるのに一生懸命で。60歳になってから会社定年になったんですね。

その中では、夫が他界され、自分が稼がなければならない状況になったため、地域に関心がなかったという人もいた。

イン：以前から地域のことに関わりとかはありましたか。

C：全くなかった。(…略)一人で住んでいます。夫はね、36年前に死んだの。それでね、夫が死ぬ前までは夫と一緒に店を経営したけど、夫が死んだ後には、私が店の代

表になったし、子供もいるしね。それで、店の経営と家のことで精一杯だったよ。

そして、仕事はしていなかったが、いずれ引っ越しするからと思って最初から地域と関わりをもたなかった人もいる。

イン：専業主婦として生活される中で地域に関心がありましたか？

F：何もないです。帰りたい一心でずっと東京を向いて生活していました。

**地域に無関心だった住民の参加のキッカケー「自主活動」の会長や推進員、会員（知人）からの声掛け**

地域に全く関心がなかったという人々の参加のキッカケは声掛けである。主に、「自主活動」の会長や推進員からの誘いであった。

E：60歳になってから会社を定年になったんですね。工場に勤めていたんですけど、家にいたら当時の町内会長から声が掛かって、今のリフレッシュ倶楽部の会長さんに話がいったんです。代表と奥さんがいらして、寄ろうよと誘ってくれて、講習に出てみたら？ていう話になって。じゃあ受けてみるか！ていって始まったんです。

イン：地域に全く興味がなかったのに「つるがやリフレッシュ倶楽部」にはどのようなキッカケで入会したんですか？

F：会長ご夫妻が家の主人を誘ったのをキッカケに推進委員をするようになったんですが、主人は「教えるのであれば本格的なものを教えたい」といって私だけ活動するようになりました。主人は講師をやっていたので、自分に合ったところを見つけるんだと言っていましたね。

イン：入会のキッカケは何でしたか？

G：紹介されたので、その頃は元気だったし面白そうだったから参加しようと思いました。遊びのような内容ですからね。

イン：どなたから誘われましたか？

G：2回目に誘われたのは推進委員の方からです。10年前に誘われた時の記憶はないですが恐らく推進委員の方にお声を掛けていただいたんじゃないかと思います。

子育てや仕事で地域に関心がなかったが、定年後、町内会長からの勧誘で福祉委員になってから今の「自主活動」の会長に声掛けられて参加を決めた人もいます。

B：町内会長さんが直接来て、「お父さんの介護をした経験があるんだったら、福祉委員やってみませんか？」と言われたんです。最初は私にできるかなと思ったんですが、時間もあるしいいかなと引き受けたんです。（…略）それまでは、本当に地域の事は何も分からなかったです。

（…略）会長さんから、「講習を受けたら、気が向いたときにでもリフレッシュ倶楽部に参加してみたらどうか」と言われていて、一番近いところでもあったので顔を出したら、ここで正式に活動をしたらどうかと言われ、現在リフレッシュ倶楽部で活動しています。

また、会長や推進員ではなく、もう既に参加している会員（知人）からの誘いで参加した人もいた。

O：ここ始まって半年くらいに、お隣の奥さんが行ってみましょうか、ということになって一緒に入ったんです。

イン：では、どのようなキッカケで「つるがやリフレッ

シュ倶楽部」に入ったんですか？

C：隣の家に住んでいる人からの紹介で。

会員からの誘いで参加を決めた人の中では、もう既に回覧板を見て「自主活動」の存在は知っていたが、見たときは入らず知人の誘いで入った人もいた。

イン：この活動に参加しようと思ったキッカケとかを教えてくださいたいんですが。

P：回覧板回ってきましたで、それで一番最初分かったんですけどね、それで友達に誘われて…

#### 回覧板を見てから参加

最後に、誰かの誘いのキッカケで参加したのではなく、町内会の回覧板を見て興味をもち、自ら参加を決めた人もいた。

イン：この活動っていうのを知ったキッカケはあるんですか。

L：回覧板回ってきたんですね。6年前町内から。回覧板回ってきて、リフレッシュ倶楽部にはいりませんかかっていう。私にピッタリだと思いました。そのとき70歳くらいだったんですけど運動しなきゃと思ってたんですね。すぐ参加を申し込みました。

イン：どうやってこの倶楽部を知ったんですか？

K：回覧でそういうのが回ったんで、家にいても少しでも体動かした方がいいかなと思って来ました。

イン：この活動を始めるっていうのは、何で知ったんですか。

J：うーん。あれはな回覧板だったかな。見たんですよ。それでどんなことやるのかなこの倶楽部はと思って来た

んですよ。

以上のように、「自主活動」に参加する前の状況は、町内会の役員とか民生委員等の何らかの形で地域との関わりをもっている人々もあり、地域に全く興味がなかった人々もいた。

このような状況の中で参加のキッカケとしては、地域との関わりをもっていた人々の方は、区役所からの声掛けであった。そして、地域に無関心だった人々の方は、「自主活動」の会長や推進員、会員（知人）からの声掛けで参加を決めた。また、誰かの声掛けではなく、回覧板を見たことをキッカケとして興味をもち、自ら「自主活動」への参加を決めた人々もいた。

### 第3節 高齢者の「自主活動」と健康づくりにおける学びのプロセス

#### 1. 健康に対する意識及び行動の変革

「自主活動」は、「運動を通して要介護になることを予防する」ことを目的としている。では、「自主活動」へ参加をすることは、参加者たちの健康に対する学びとはなにか。健康に対する学びはどのような関係性をもっているのか。ここでは、高齢者の「自主活動」へ参加における健康に対する意識及び行動の変革プロセスについて詳細に分析する。

##### 1) 健康に対する意識が高くなる

高齢者は参加する前は健康に対する意識がそれほど高くなかった。しかし、参加を深めることにより、健康のために運動することが大事であるという考えが芽生え、ますます「健康に対する意識が高くなる」ことが分かった。

以下では、参加のプロセスの中でどのような特徴が健康に対する意識を高めたのかについて詳しく検討する。

### 【運動の必要さが分かる】

インタビューの分析の結果、最初の特徴として【運動の必要さがわかる】ことが挙げられる。つまり、参加する前は、それほど運動の必要性について考えなかったと参加者は語る。しかし、参加を深めることにより、運動の必要性が分かるようになったと言う。例えば、体を動かして衰えることに歯止めをかけなくてはならないと考えるようになったり、短い時間でも持続的に運動するようになったりすることが大事であると考えようになった、等である。

E:前は健康に関して特別細かいところまで興味はなかったですね。若かったし。運動は好きでしたけどね。でもこうやっていると、筋肉というのはこういう作用があるんだ、だから筋肉があるといいんだというようにね。

H:やっぱり元気で日々送れるという、人生にとって健康は大きい財産なんだなあと、やっぱりこの財産は大事にしていかなきゃいかんと、それにはやはりある程度、うーん、体の機能を動かして、衰え行くこれをなんとか歯止めをしなくてはいかんと、それにやっぱりそれぞれの運動も必要だなあと。

I:これは私が感じたことなんだけど、短い時間の体操でも何でもいいから、長く続けることがいいと思いました。ただ一日に3時間ぐらいしてまた止めてじゃなくて、いいんですよ3分でも5分でも。それを長く毎日続けることが、効き目があるというか、私もそれだと思うのね、肩とか腕とか良くなったの。

イン:そういった家でも運動しようというは、やっぱり「つるがや」の活動に参加して芽生えた気持ちですよ。

I:そうです、はいはい。その前は、何にも考えなかったです。具合悪くもなかったし、疲れもなかったし。結局

ここに入ってから、そういう運動を自分なりに考えてやるようになったっていうか。

### 【健康のため、食材に気にする】

次に、【健康のため、食材に気にする】ことを特徴として挙げるができる。つまり、健康のための情報を得ることにより、自分の健康のため意識的に体に良い食材にも気にするようになる。それによって、自分の健康に対して、どのような食材が良いのかを悩んで今まで出てきたことのない料理を作ってみたり、使ったことない食材を作ってみたりする行動をする。

E: 情報がいっぱい入ってくるから少しでも近づけようと食事を気を付けたり気にしてみたり、取り入れてみようとする気持ちが出来てきますから。ただ食材を買ってくるのにも、あんまり好きじゃないものにも体にいいからと意識して買ってきてみるということもありますし。(…略) 本を読んだり、自分の健康の悩みにはどういう食材が良いんだろうとみたりしますね。だから今まで出てきたことのない料理を作ってみたり、使ったことないような食材を使ってみたりしますね。

以上の【運動の必要さが分かる】ことと【健康のため、食材に気にする】という特徴から「健康に対する意識が高くなる」なることが分かる。

## 2) 元気になる

高齢者の介護予防運動の「自主活動」を通して皆元気になったと語る。では、具体的にどのような特徴から元気になったのかについて検討する。

【皆と笑ったり喋ったりすることができる】

最初の特徴として【皆と笑ったり喋ったりすることができる】ことが挙げられる。つまり、普段家にいても笑ったり、誰とか話したりすることがあまりないが、「自主活動」へ参加をすることで、皆と笑ったり喋ったりすることができ、それが元気になることに結びつく。

E: 家ではそんなに笑うこともないので、ここに来て笑ったり喋ったりしていれば、自分も元気でいられるかなって思います。

【健康維持】

次の特徴として【健康維持】が挙げられる。つまり、「自主活動」をしてから何年も経ち、加齢していくにも関わらず、体力的に日常生活を暮らすのが以前とあまり変化がなく、むしろこの活動への参加が衰えを防いで【健康維持】することに効果があることである。

イン: 活動に参加されて、健康になったとか、歩くのが。

H: えええええ。おかげでね、歩くのがあの一今日、スタートして、5、6年経ってるんですが、これといった大きい病気もございませんし人の世話にもならず色々、仕事なり買い物なり色々やっておりますしね。(…略) こうした体がある程度年齢に応じた無理のない体で動かして、衰えを何とか防いでいくという効果があるだろうと思っています。

【体の調子が良くなる】

また、【体の調子が良くなった】ということが特徴として挙げることができる。つまり、「自主活動」を行うことが【健康維持】にも効果があるが、最も多い参加者は実際に参加して運動をすることにより体力が付き「体の調子が良くなった」と言う。



イン：月2回の活動にどれくらい参加されていますか。

N：ほとんど参加。

イン：体調崩して休んだりしたとかは？

N：体調はなかったんですけど、用があって一回くらい休んだね。

イン：あ、用があって。

N：むしろ体調良くなるから、よほどのことでない限り今のところ参加してますね。

イン：やっぱり動きとかもよくなってきたなって？

K：はい、思いますよ。

イン：どういうときにそういうのを実感したりするんですか。

K：私ね、庭の花が好きで、庭中いっぱい花を植えてるんですけど、やっぱり力ないとできないでしょ。だからそういう花作りなんかもできることも運動のおかげかなと思ってますよ。

イン：リフレッシュ倶楽部に入って、自分の体力が高まったなって思う瞬間ってありますか？

L：あります。背筋伸ばすじゃない、この倶楽部で。家に行くときは疲れないの、伸ばすから。それだから、今日やっぱり行って良かったなって思います。

そして、月2回、1時間半の運動で体の調子が良くなるのかと疑った人もいた。しかし、持続的に参加することにより、再発した五十肩が治り、立って靴下を履ける等、「体の調子が良くなった」と言う。

I：生活習慣ってことは、え一月2回ですからね。体調は良くなりました。最初疑ったんです。それで1時間半の中

で、ほんの一分もするかな、バランスとか体操とか、一つのものをやるんじゃなくて色々なものをやるから、こんなことで聞くのかなあとか自分なりにね、で私ね、五十肩っていうんですか2回再発してやってるんですよ。  
イン：肩こりですか。

I：肩こりじゃなくてね、五十肩といって後ろに回らなかったり、で再発というか、自分では一生懸命あげてるんだよ。挙がんなかったんだよ。それでみんなにどうしたの腕痛いのって、それで見ると曲がっているの。それが1、2年以上かかったかな。挙がるようになったのまっすぐに。こういうこともあるし、立ってて、靴下を履いたりね。そういうこともできるようになりました。

逆に、1時間半の運動が最初は結構疲れたと言う人もいた。しかし、その人も継続に活動をすることによって疲れを感じなくなり、むしろ年の割に様々なことができるぐらい体力が付き、丈夫になったと言う。

M：最初はね、ここにきて結構疲れました。一時間半の体操なんですけどリフレッシュ倶楽部。でも会を重ねるごとにあんまり疲れなくなりました。

イン：それでは自分自身で身体がよくなるっていうのは感じられましたか。

M：いやあんまり疲れなくなったから、いくらか丈夫になったのかなと思いました。体力ついたのかなと思いますけどね。

イン：普段の生活でも何か、体力ついたなと覚えることはありますか。

M：うーんそうですね。年の割にはいろんなことができるのかなあと思います。

以上、【皆と笑ったり喋ったりすることができる】ことや【健康維持】、【体の調子が良くなる】という特徴から「健康になる」という側面を抽出することができる。

### 3) 日常生活上、健康予防活動をする

自主活動によって参加を深めることは健康とどのような関係をもっているのか。上で確認したように、健康意識及び行動の変化は、「健康に対する意識が高くなる」とことと「元気なる」という2つの側面からみることができた。しかし、このような2つの側面は、「日常生活上、健康予防活動をする」という側面に繋がっていくことが分かった。具体的な特徴としては、以下詳しく検討する。

#### 【家で運動する】

まず、【家で運動する】ようになったことが挙げられる。どこか痛いと感じたら家で運動したり、お風呂に入ってイメージトレーニングをしたりして脳の活性化させる等、「自主活動」に参加をすることによって家でも運動をするようになったと言う。

E: 今は自分でも腰が重く感じたときには腹筋運動が足りなくなってきたなと思って寝ながら運動したりしますね。

G: お風呂に入ってやってみたりしています。出来ないと悔しいじゃないですか。推進委員の方は出来ない方が良いというんですけどね。その方が頭を使うからといって。できちゃったらもう終わりという感じなんですけど、出来ないと悔しいから家でもやってみたりします。

I: ここでは月2回なんだけども、いろんなパンフレットいただいていますから、暇な時家で、体動かしたり、片足で立ってみたり、あれもお風呂に入ったときにやったり、

でもね、手を見ててはだめなんです。イメージトレーニングっていうか、ああいうことをするとやっぱり頭に入るんですよ。

### 【意識的に体を動かす】

次に、【意識的に体を動かす】ことが挙げられる。つまり、家でも外でも関係なく日常生活上、意識的に体を動かすようになったことである。例えば、暇なときにわざと体を動かしたり、買い物に行くときにも自転車ではなくわざと歩いていたり、バスを待っている時に「自主活動」で習った筋トレをしたりすることである。

このように日常生活で意識的に体を動かすことは、参加してから健康に対する意識が高くなり、元気になった結果であるといえる。

イン：活動に参加して生活習慣とか変わりましたか。

H：特にあの一、暇があれば、体を動かそうと、衰え行く体を何とか歯止めをかけていこうという気持ちは芽生えてきましたね。ですから、何もしなければ、本を読んだり、テレビ見るばかりじゃなしに、2, 30 分歩いてこようとか、ウォーキングしようとか、あるいは芝刈りをしたり、ゴミ出しをやったりっていう、あるいは、庭木の手入れをやったり、何とか体を動かしてこうという気持ちは芽生えてきましたですね、それは確かでございますね。後、家内にこちらから自発的にこちらから呼びかけて、えー、乗り物じゃなしに、とにかく歩いて、買出しにいつてこようというふうな気持ちにありますね、ですから、自転車もなるべく使わずに、歩いて、往復 3, 40 分かかりますけども、歩いて用を足そうという気持ちが非常に強いですね。

O：ここへ来て教えていただくとあーそうだったって思っ

て。お風呂に入ったときも手を動かしてみたり、バスに乗る前も筋トレ・・・待ち時間があるとやっています。

### 【外に出て運動する】

そして、【外に出て運動する】という特徴も挙げられる。つまり、家で運動するだけではなく、参加してからは、意識して外に出て運動するキッカケを作った人もいた。

Q：私は今年の一月からノルディック？？あのスキーのストック持つやつ。あれを持って散歩するようになったの。

イン：リフレッシュ倶楽部に入ってから、そのように散歩するキッカケを作ったんですか。

Q：そうです。

「日常生活上、健康予防活動をする」という側面は、自分のみで日常生活上運動することではなく、他人まで影響を及ぼしていた。具体的な特徴は以下のとおりである。

### 【友達に運動を教える】

まず、【友達に運動を教える】という特徴である。腰が痛いという友達に「自主活動」に参加して身に着けた運動の知識や方法で腰に良い運動を教える人がいた。

E：腰痛いと言っている友達にも簡単な運動を教えてあげたりしますよ。実行するかは別としてね。

### 【母と一緒に運動する】

また、【母と一緒に運動する】という特徴である。つまり、「自主活動」へ参加することから身に付けたことを自分の母にも教える人がいた。「自主活動」は介護予防運動グループであるので、高齢者である自分にとっても母にとっても一緒に運動することは、体の面でも精神的な面でも良い効果をもたらした。その結果、

母と一緒に運動するようになったと言う Bさんは、母が「喜んでやる」とか「こういった場で見たり聞いたりしたことを母に伝えることができてよかった」とか「自分のためにも母のためにもいい」と言うところから、「自主活動」への参加とここで身に付けた知識や運動を媒介して自分と母の体と精神的な健康に効果をもたらしたと窺える。

B：母が98歳で健在なんですが、母にそこで習った簡単な体操をやらせているんです。喜んでやるんですが、やっぱり歳を取ると出来ないんですよね。だから、こういった場で見たり聞いたりしたことを母に伝えることができてよかったと思います。自分のためにも母のためにもいいのかなと思います。歳を取ると一人ではできないんですよね。

#### 【他の人に体の調子を聞く】

最後に、【他の人に体の調子を聞く】ことである。このように【他の人に体の調子を聞く】という行為は、自分の健康の意識が高くなり、元気になったことから初めて他人の身体の調子まで聞くようになったといえる。

E：今日も元気である人が来たねと言って、会話できるのが良いですね。特に年上の先輩たちとね。体調を聞いたりすることも出来るようになりました。自分の親兄弟を思うのか、言葉がけが出来るようになりました。

高齢者の介護予防運動の「自主活動」への参加における健康に対する学びは、まず、『健康に対する意識及び行動の変革』であった。そのプロセスは、まず、「健康に対する意識が高くなる」ことと、それと同時に「元気になる」ことであった。また、「自主活動」へ参加を深めることによって、「日常生活上、健康予防活動をする」ことへの変革が生じたことが分かった。

「１．健康に対する意識及び行動の変革」では、「自主活動」で参加をすることによっての健康に対する学びのプロセスについて分析した。しかし、インタビューの分析の結果、高齢者の健康づくりの「自主活動」へ参加することは『健康に対する意識及び行動の変革』の側面だけの学びが生じることではないことである。それは、高齢者の健康づくりの「自主活動」における『人間関係の広がり』の学びである。

つまり、高齢者の健康づくりの「自主活動」は、介護予防運動を通して健康な体を維持・あるいは増進することが目的である。しかし、今回の分析から分かったことは、高齢者の健康づくりの「自主活動」での学びは『人間関係の広がり』も学びとして生じていた。

以下では、『人間関係の広がり』の学びはどのような学びであるのかを具体的に分析する。

## ２．人間関係の広がり』の大事さ

２．「人間関係の広がり』の大事さ」では、具体的にどのような学びがあるのか、それはどのような学びのプロセスとして構成されているのかを分析する。

### １）人間関係が広がる

まず、「自主活動」に参加することによって、自分の人間関係が広がる。交流の場があるということは、その交流を通じて新たな人との繋がりができるということである。

以下では、参加のプロセスの中でどのような特徴から人間関係が広がったのかについて詳しく検討する。

#### 【挨拶する人が増える】

インタビューの分析の結果、【挨拶する人が増える】という特徴を挙げることができる。

つまり、以前だったらただすれ違うだけだったのが、参加をしてからはお互いに挨拶する人が増え、さらにコミュニケーションまで繋がっていく。

イン：今はこの活動をしてみてどのように感じていますか？

E：どこに行っても知り合いに会いますね。この辺にいれば誰か知り合いがいるという感じです。

イン：地域に出れば挨拶する人が増えているんですね。

E：そうですね、絶対に増えていますね。

イン：この活動を通じて、仲間とか、知り合いが増えたりもしましたか？

D：仲間っていうかどうかは別にしても、知り合いですよ。

イン：つまり、どこか出かけたとき挨拶したり・・・・

D：そうそう、コミュニケーションができますね。そのような相手が増えましたね。それを仲間っていうか友達っていうか別にしても、挨拶する人が増えましたね。

イン：つるがやりフレッシュ倶楽部に入る前は、地域の人と繋がりがありましたか？

G：町内会の役員同士だったとか、そのくらいですね。子供の保護者同士で関りはありましたが、別にお茶をするとかもなかったです。当時は新興住宅という感じで周囲との関りが多くはなかったです。ここに参加するから他の町内の方にお会いできますが、普段は顔を見られませんね。道で会えば挨拶できますが、以前は同じ団地に住んでても知らないから挨拶もしませんでしたね。

また「自主活動」は、町内単位で活動しているのではなく、地域全体を視野に入れて活動を展開しているため、買い物など、外



出しても他の町内会の人とも挨拶することができ、コミュニケーションをする人も増える。

イン：どうですかこの活動に参加して友達の輪は増えましたか。

Q：増えましたよ。4丁目の人たちだけでなく、5丁目の人たちともお買い物に行ったら、声掛けて挨拶できますし。

I：隣の町内の方、後ろの町内の方そういう方と知り合いになるっていうのがね。道路歩いていても、普通だったら、すれ違って、ただすれ違うだけなのに声をかけていただいたり、そういうコミュニケーションていうのをできたってことは、やっぱり良かったですよ。

以上で検討したように、「自主活動」への参加をすることは、【挨拶する人が増える】ことを通して「人間関係が広がる」。また、ここでの『人間関係の広がり的大事』は、「自主活動」のコミュニティの性格にも変革が生じた。それは、本来では、介護予防運動を自主的にする介護予防運動の場であったが、それに加え、「日常生活上、様々な情報を得ることができる」場としての変革である。

## 2) 日常生活上、様々な情報を得ることができる

インタビューの分析の結果、「人間関係が広がる」という側面は「日常生活上、様々な情報を得ることができる」という側面に繋がっていくことが分かった。

以下では、どのような特徴から「日常生活上、様々な情報を得ることができる」場として変革したのかについて詳しく検討する。

## 【健康に関する情報】

まず、【健康に関する情報】という特徴を挙げることができる。これは、参加する中で、推進員が指導しながら運動の効果などの情報を流すことから、健康に関する情報を得ることができるということである。

イン：リフレッシュ倶楽部の活動のことなんですけど、具体的にどういうところがいいところだと思いますか？

K：推進の方もいろいろな情報を持ってきて、こういうところがありましたとかね、こういう運動するといいですよとかお話聞けるしね。

「自主活動」は、月 1 回チラシを配っている。そのチラシでは、日程のお知らせ以外にも健康などの情報を書いて配っているが、そのチラシのおかげで健康に関する情報を得ることができ、実際にそのチラシに書いてある情報を日常生活に活用していたり意識したりして生活していると言う人もいた。

M：チラシいただいてそれに書いてあったんですけども、笑う門には福来るっていう諺がありますね？あれなんかで書いてあったんですけど。身体とか心に必要だそうなんです。それで笑うことは腹筋とか横隔膜とか肋間筋とか色々な筋肉を使った運動と同じで、血液中に酸素が十分に取り入れられます。それで笑いがあると運動効果があり、笑うと脳が活性化するんだそうです。それで笑顔は安全、安心の象徴だそうなんですって。おおいにここに来て笑ったり話したりするのがいいんじゃないかなと思っています。

イン：そのような考え方は活動する前は考えたことが無かったんですか？

M：そうですね。やっぱりあの一ヶ月一回のリフレッシュ倶楽部の通信をいただいて、それを見てて、ああそう

だたと熱中症のときは無理をしないで、日向にあんまり長くいないとかね。あと長い時間草取りとかしないで、短時間でやるとか、あと帽子を被るとか、そういうのが書いてあるんですよ。それで熱中症になったときは、年寄りには熱いからといって水を一気に飲むと身体にそれを納めておく容量がすくなくなっているから少しずつ水を飲むようにとかね。そういうことが書いてあるんですよ。だからね、やっぱり見せてもらおうと、ためになりますね。だからそういう一ヶ月に一回のリフレッシュ倶楽部の通信なんかも楽しみに見えます。

#### 【病院に関する情報】

次に【病院に関する情報】という特徴を挙げることができる。高齢者になることは若い頃より病院に行く頻度が高い。そのため、一人ではあまり得ることができない病院に関する情報を得ることは大きな力となる。

G：情報が入ってきますね。あそこの病院が良いとか悪いとか。一人でいたらそういう情報は入ってきませんからね。

#### 【詐欺に関する情報】

また、【詐欺に関する情報】が特徴として挙げられる。高齢者を対象にして社会的にも問題になった「詐欺」に騙されないよう、それに関する情報を得ることができて良かったと言う人も何人かいる。実際にこのような情報を得ることで被害を受けなかったと語る人もいた。

L：振り込め詐欺の話とか。ああなるほどな今日もこんな話聞けてよかったなと思って帰ります。

O：詐欺とかね。その前にもうちにはがきが来てね。最初

に来たときは飛び上がるほどびっくりしましたが、携帯番号が書いてあって、びっしり裁判がどうだとか書いてあるんですね。で、びっくりして、あら一何借金したのかしらとか余計な心配しちゃって。若い人にそこには絶対電話しちゃダメだよって言われて初めてそこで分かったんですけど、その話が後に毎回出て、あの時のなああだったんだと分かりましたよ。そういう振り込め詐欺がまだたまに来ますよ。

イン：そういうお話があれば分かりますもんね。

### 【それ以外の様々な情報】

最後に【それ以外の様々な情報】という特徴を挙げることができる。これは、介護予防運動の休憩時間に、ゴミだしや世間の話などをして様々な話から情報を得ることである。

L：ここに来ると休憩時間とかありますでしょ。そのとき世間のこととかお話ししたりゴミだしがどうとうかね。そういう話をするとああと勉強になったなと思うんですね。

### 【情報を交換する】

さらに、インタビューの分析の結果、以上の4つの特徴は【情報を交換する】するという特徴へ広がっていくことが分かった。

I：本当に推進さんの方が、本当にいろんなものを教えてくださいですね。リーダーの方がね。振り込め詐欺とかいろんなことを教えてくれたり、いろんな実験もとりにいれてくれたり。あと、こうして今度はこうしますよと、やっぱり楽しみはいっぱいありますね。

イン：なるほど。

I：そして、意見交換があるんですよ。振り込め詐欺っていうときにね。私にはこう来たとか。家にも来ましたけどね。

イン：参加してよかったことは、交流の輪が広がったこと以外に、何かありましたか。

Q：それが広がって、花や野菜やそれをみんなに教えてくれたりとか、情報を聞きにきてくださるし、じゃあ私もこの花を持って行って植えて、って言って交換したり。

以上で検討したように、「自主活動」への参加のプロセスの中で、【健康に関する情報】、【病院に関する情報】、【詐欺に関する情報】、【それ以外の様々な情報】、【情報を交換】といった特徴から「日常生活上、様々な情報を得ることができる」場としてコミュニティの本来の目的に加えて変革したことが分かる。

### 3) 地域に関心がある

「自主活動」への参加における『人間関係の広がり』の大事さ』での学びは、「人間関係の広がり」と「日常生活上、様々な情報を得ることができる」ことであった。また、「自主活動」への参加をふかめることによって『人間関係の広がり』の大事さ』での学びは「地域に関心がある」と繋がることが分かった。

「地域に関心がある」ということは、今まで関心もなかった地域に関心をもつようになったことである。例えば、地域に対する環境美化の意識が高くなることとか、地域の人々との交流を通して地域の活動へ参加できるようになる、参加の意識が高くなることとかである。

イン：この活動を10年程続けてきて、地域に興味関心が出てきましたか？

E：特別なかったけど、活動をしていると出てくるものですね。みんなの話を聞いたり、自分も歳を取ってくると必要性を感じて、関心が出てきますね。

イン：例えばどういったことですか？

E：地域が汚れていたら、きれいにしなきゃと思います。朝ラジオ体操に行くんですが、公園に行く途中にゴミが落ちていたり草が生えていたりすると、今度きれいにしなきゃなと思いますね。歳をとって手入れが出来なくなっている所をみると、うちの町内だし環境美化を意識するようになりました。

イン：以前はそういう気持ちはなかったんですか？

E：全くなかったんです。

H：会場で顔を見合して、世間話をして、一緒になって笑って体操して、そうすると、町内の一体感というのが芽生えてきますので、お互いにその交流の機会がありますから、リフレッシュ倶楽部の活動以外でも老人会とかあるいは公園清掃とかいろいろな報酬活動があります。そういう町内の活動にも出席率がある程度影響してるんだろうと思います。

以下では、参加のプロセスの中でどのような特徴から「地域に関心がある」ようになったのかについて詳しく検討する。

#### 【町内会の生活が楽しくなる】

まず、【町内会の生活が楽しくなる】という特徴が挙げられる。つまり、「人間関係が広がる」ことによって、【町内会の生活が楽しくなった】ということである。

B：町内での生活が楽しくなったかもしれませんね。お互いに声をかけられるようになりました。

#### 【町内活動に対して積極的になる】

次に、「人間関係が広がる」ことによって【町内活動に対して積極的になる】という特徴を挙げることができる。

イン：ご自分に変化はありましたか？

F：町内に対して積極的になりましたね。え、それは、これを通して皆さんと知り合いになるので挨拶をするようになるから輪が広がるというのがありますね。20軒先に住んでる人とそんなに話す機会もないですが、ここへ来れば長話も出来ますから、そういうことを通して人間関係が出来たと思います。

### 【地域の中で交流の大切さが分かる】

最後に、【地域の中で交流の大切さが分かる】ようになったことが特徴として挙げることができる。これは、参加を通して人間関係が広くなり、その人間関係の中でお互いに何かあったら励まし合い、支え合って生きていく「一体感」から芽生えてくるものである。その一体感を分かることが【地域の中で交流の大切さが分かる】ことであると特徴づけることができる。

H：それともうひとつやっぱりあの一、お互いにやっぱり年取った高齢社会ですから、支えあって、励ましあって暮らしていくと、それにはやっぱり地域の交流が大切だと思うんですね。こういう日常に関して、あんな年配の方も動いてると、ああいう方も参加してるという、その、お互いに私もがんばろうと、励ましあう、支え合う、心が芽生えてくると思うんですよ。そういう意味で大きな意味があると思うんですよ。（…略）一体感が芽生えてくるんだと思います。

以上、「地域に関心がある」という学びの特徴は、【町内会の生活が楽しくなる】ことや【町内活動に対して積極的になる】こと、そして、【地域の中で交流の大切さが分かる】という特徴から構成されていた。

### 【他の交流の場へ参加】

また、この「地域に関心がある」ことは、参加を深めることによって、【他の交流の場へ参加】するようになったことが分かった。

E：動くのも大好きだから、グランドゴルフにも参加したり、交流の場へ参加ができるようになりました。家にばかりいたら外出しない方だから。どちらかというとな家でじっとしている方が楽だし、好きだから。出不精なんです。身の回りの事だけやっていたらいいかなという感覚しかなかったから。

イン：リフレッシュ倶楽部ができる前は、そういう活動に参加したことはありますか？

H：あっても老人会ぐらいですね。あとは町内会の公園清掃などもございました。

イン：やはり、この倶楽部ができてからいろいろ参加するようになったのですか？

H：そうですね。

そして、この一連のプロセスがまた「人間関係が広がる」ことに循環として繋がっていくことが分かる。

H：よく団地住まいの方々から聞くんだけど、隣の人はどんなところに住んでるのだろうとか、交流する機会がほとんどないというのを聞いてるんだけど、ここは割合、町内のいろいろな行事の出席率が、よその町内に比べて非常に多いという点で、このような行事を通じて、町内の一体感が芽生えてくるんだろうと思ってます。

今まで高齢者の健康づくりの「自主活動」への参加を通じた学びのプロセスを「特定の実践コミュニティ」の分析視野から分析



を行った。以下では、「特定の実践コミュニティ」のなかでの「特定の参加者」に分析単位を着目して分析を行う。「3.「自主活動」に運営者として参加することの意味」では、「自主活動」に運営者として参加している「特定の参加者」に着目する。「4. 高齢者の「自主活動」と「包摂」のプロセス」では、「自主活動」に再参加した「特定の参加者」に着目する。「3.」と「4.」で「特定の参加者」に着目して「自主活動」への参加のプロセスを明らかにすることによって、「自主活動」における学びの意義を明らかにする。

### 3.「自主活動」に運営者として参加することの意味

ここでは、高齢者の健康づくりにおける「自主活動」に参加している運営者に着目して「自主活動」の「運営者」として参加することはどのような学びであり、どのような意味を持っているのかを分析する。

#### 1) 運営者としての負担

推進員になるためにはまず区役所からの講習を受けなければならない。しかし、その講習で基礎知識や体操などを学んでも、実際に推進員として人の前に立って話しながら指導することはなかなか難しいことであった。

B: リフレッシュクラブが出来て4年くらいたってからだ  
と思います。私も段々歳を取って来たしリーダー的なもの  
をやるというのは考えないで、体を動かすとかそういう  
教室に行けたらいいかなと思って入ったんです。講習  
は受けたものの、みんなの前に出て喋るのはなかなか難  
しいです。

E: 最初は冷や汗もんですよ。みんなの前にお話す

るなんてそんなこととても考えてなかったです。

このような難しさはストレスとして溜まり、推進員として参加したくないとか辞めたいという気持ちをもたせるぐらい非常に負担になったと語る。

イン：3年くらいはあまりスムーズにできなかったとおっしゃいましたが、その当時それが悩みで辞めたいと思いましたか？

E：思いなと思ったんです。今日行くの嫌だなって。やり方でもあると思うんだけど、朝交代で挨拶活動しようってなったんですが、慣れていないから大変な負担なんですよ。

イン：推進員として負担は感じますか？

F：もう、それは凄く感じます。少し変化を付けたものをやろうと思っていますから前日は悶々としています。慣れてくるとずるくなってきた、ネットや本で調べた内容をやるにしても大体やることは決まってくるんですね。それをちょっとアレンジだけしてやっていました。ここ半年くらいは落ち着いていたんですか、それでも前日になるとストレスが溜まってきます。

2) 意図的に健康に関する学習活動をする（健康に対する意識が高くなる）

「自主活動」に参加を深めることによって、「健康に対する意識が高くなる」という変革のプロセスは、一般の参加者と推進員としての参加とは若干異なる。それは、「自主活動」の運営に関わることにより、意図的に健康に関する学習活動をし、それによって「健康に対する意識が高くなる」ことである。

以下、「健康に関する学習活動をする（健康に対する意識が高くなる）」行動とは、どのようなことであるかについて具体的に検討する。

### 【健康に関する情報に目が向く】

インタビューの分析の結果、まず、【健康に関する情報に目が向く】ことが特徴として挙げられる。つまり、推進員として参加をし、活動をすることによって新聞やテレビ等を見ても健康に関する情報に目が向くようになることである。

D：活動を始めてからは、ニュースとか見たり、本見たりした時には、それに結びつくような記事だと興味をもつようになりましたね。

イン：このような活動が更にそのような情報などに関心を寄せるように、影響を与えたということですか？

D：そうです。

また、このような推進員として参加しなかったら健康に対する情報には関心をもたなかったかもしれないと語る。

D：このような活動をやっていると、そっちに目が向いて、あの、ニュースとかも含めて、あの、自分の、自分で覚えて人に教えようとすれば、勉強にはなるんだね。知識も増えるし、その知識が増えるということは、結果的に人に教えるっていうのもあるかもしれないけど、ま、このような活動をやってなければ、そのようなニュースにも関心をもたないで、あるいは、テレビの番組もそんなのは見ないで、違うの見てるかもしれないでしょう。

### 【新聞等から健康に関する情報を切り抜く】

次に、【新聞等から健康に関する情報を切り抜く】ことを特徴として挙げることができる。つまり、健康に関する情報に目が向

いて、勉強することだけに留まらず、それに関連する情報まで切り抜く。

イン：通常の会員ではなく推進委員としての魅力はどういった点ですか？

E：特別良かった点はないけれど、自分も勉強しなきゃと思わせてくれる点ですね。ただ知らないではいけないなと思います。新聞一つ見ても健康のことが書いてあれば詳しく読んでみたり、切り抜きしたり

イン：活動をして生活の変化はありましたか？例えば健康の情報は意識的に見たりとか。

B：新聞などに運動の事が書いてあると切り抜いています。そういうのに目がいきますね。

### 3) 健康に関する情報などを共有

推進員になって運営に関わることは最初大きな負担として作用した。しかし、意図的に学習して健康に関する情報を会員に流したり、推進員同士で情報を共有したりすることを通して、推進員は運営する負担感を減らすことができる。

D：たまに、あそこに立って、いらないこと言うじゃないですか。こんなのはこうだよ、という知識っていうのは、そんなこと学ばないとできないですね。新聞とかも見たり、本とかも見たりしながら、興味もってやるようになりましたね。やっぱりこうゆうことすると、脳が活性化するんだよ、みたいな話をしてもらって、しているから、結果的にその繋がりが分かりますね。

D：ま、最初はノーハウとかないから、試行錯誤でやっているのは事実。

イン：試行錯誤を繰り返しながら、情報とかをみんなに流しながら、

D：うん、皆で一緒に共有しながら、あの、上げて行ったと思いますね。

イン：他の会員の方へも伝えたり？

E：そうですね。推進委員同士で話をしたりしますね。勉強をしますね。勉強というより興味があってみるという感じですが。お互いに情報を交換しますね。

#### 4)「自分のため」という意味

以上に見てきたように、推進員として運営に関わるプロセスは、最初は「運営者として負担」を感じるが、参加を深めることによって自主的に「健康に関する学習活動」をしたり、「健康に関する情報などを共有」したりしながら活動を展開し、運営者としての負担感を減らしていた。さらに、インタビューの分析に結果、このようなプロセスは「自分のため」ということに結びついていくことが分かった。では、この「自分のため」ということは、どのような意味であろうか、その特徴を挙げながら詳細に検討する。

#### 【積極的な性格になる】

まず、【積極的な性格になる】ことが挙げられる。参加する前は消極的な性格であったが、推進員として参加を深めることによって積極的な性格になったという。具体的には、まず、誰にでも声を掛けるようになったことである。

イン：今までの活動で学んだことや考え方が変わった点などありますか？

E：消極的ではなく、積極的に人に関りたくなっているかもしれませんね。(…略)以前であれば、すれ違う時は黙って通り過ぎたかもしれませんね。今は知らない人

でも出来るだけ声をかけるように心がけるようにしていますね。

また、前の人生を振り返ってみて人の前で話をしたことがなかったが、みんなの前でスムーズにできるようになったことに考えられなかったと語る人もいた。

イン：これをする前の人生を振り返ってみたら、人前で話をすることはなかったんですか？

E：ほとんどありませんでした。

イン：みんなの前でスムーズにできるようになって自分にとってよかったですか？

E：自分で考えられなかったことですね。ずっとやってきたのが事務職だったから。50代まで。ある時から私も事務職疲れちゃったから現場行こうと思って工場で働いたんです。これは毎日きちんとさえすればいいなって。事務職はずっと続くじゃないですか。家に帰っても頭の中に数字がああだこうだって。みんなの前で喋ったっていうのはないですね。

E：いつから自分がそうなったかっていうのは分からないけど回数やることで緊張感がなくなっていったんだと思います。

人に積極に関わるようになったことや人の前でスムーズに喋ることになったことは【積極的な性格になった】という特徴として挙げるができる。

### 【運動に関する知識が増える】

次に、【運動に関する知識が増える】という特徴である。これは、健康に関する知識が増えると、人に教えることもできるし、それが結果的に「自分のため」になるということである。

D:結果的に人の為になるけど、自分の為にやっていますね。

イン:自分のためっていうのは、体力面ですか？ではなくて楽しみとかも全部含めてですか？

D:先言ったように、このような活動をやっていると、そっちに目が向いて、あの、ニュースとかも含めて、あの、自分の、自分で覚えて人に教えようとすれば、勉強にはなるんだね。知識も増えるし、その知識が増えるということは、結果的に人に教えるっていうのもあるかもしれないけど、ま、このような活動をやってなければ、そのようなニュースにも関心を持たないで、あるいは、テレビの番組もそんなのは見ないで、違うの見てるかもしれないでしょう。つまり、こんなことやってるために、ま、こうやって運動とか栄養とか含めた番組とかみて、あ、今度これをみんなに伝えればいいねとか。ま、それっていうのは、結局的に自分のためですね。

### 【顔見知りが増える】

最後に、【顔見知りが増える】という特徴が挙げられる。これは、「2. 人間関係の広がり的大事さ」で検討した「人間関係が広がる」こととも結びついているが、推進員として運営に関わることより、【顔見知りが増える】ことが自分のためであるということである。つまり、推進員として参加し、同じ地域に住んでいても今まで分からなかった人の存在が一般の会員より分かるようになったことは、自分にとっては大きな財産にもなり、それによって【顔見知りが増える】ことが「自分のため」であるということである。

イン:推進員をして、自分の生活などに対してよかったと感じる点はどんな点ですか？

B:人を知ることができたという点でしょうかね。知り合いというよりは、同じ町内にいてもほとんど知らない状

態だったのが、顔を見ると誰だかわかるようになったというのが今の私の財産になっているかもしれません。お互いに声を掛け合えるというのが良いですね。昔は泊まるだけだったのでね。町内の人も私の事を知らなかったんですよね。顔を知られていないということでみんなと随分距離があったと思います。ここに入ってから顔見知りがかかなり増えました。それが自分の為になっているところですね。

以上で見てきたように、最初運営者として関わることは、それがストレスになるぐらい負担を感じることであった。しかし、運営者として意図的に学習をしたり、健康に関する情報を共有したりすることを通して、運営者としての負担感を減らすことができた。さらに、運営に関わるプロセスは「自分のため」という意味に結びついていくことがインタビューの分析の結果明らかになった。

#### 4. 高齢者の「自主活動」と「包摂」のプロセス

「つるがやりフレッシュ倶楽部」では、一回参加をしたが、ある理由で参加を辞め、とじこもりがちであったが、再参加した参加者が3人いた。「自主活動」への参加を辞め、とじこもりがちであったが、再参加したプロセスを「包摂」として捉えるなら、その「包摂」のプロセスはどのようなプロセスであるのか。以下では、その「包摂」のプロセスを学びのプロセスとしてとらえ、そこにはどのような学びがあったのかを分析する。

##### 1) 一人暮らしで、地域に知り合いが一人しかいなかったCさんの事例



### 参加前の状況 - ① 18 歳から家業を手伝う

Cさんの家は昔から仙台で自営業をしていた。そのような環境で育った彼女は18歳から家の家業を本格的に手伝う。主な仕事の内容は、トラックで物を運ぶ仕事であったと言う。

C: 私は生まれ育ちが仙台です。昔から実家が仙台で自営業をしていたので

イン: どんな自営業ですか?

C: ○○○○屋（店の名前）です。

イン: では、若いときから実家の仕事を手伝ったんですか?

C: そうです。私は18歳からずっと家の仕事をしました。

イン: 主にどのような仕事をしましたか。

C: トラックの運転をしました。

イン: トラック?

C: はい。○○屋さんだったから、トラックで運ばなければならないので、その当時トラックを持っている家も車を持っている家もなかったの、私は他の人よりも運転を早くしました。

### 参加前の状況 - ② 結婚してから夫と家業を継ぐ

Cさんは結婚した後には、家の家業を継いで夫と経営していた。

イン: 結婚してもずっと自営業の仕事をしましたか。

C: (…略) 夫と一緒に店を経営した。

### 参加前の状況 - ③ 夫が亡くなり、引退する前まで精一杯の人生を過ごす。

Cさんは、夫に他界され、自分一人で家業を営まなければならない状況になる。さらに、子どものことも面倒みなければならなかったため、家業から引退する前まで精一杯だったと語る。

C：夫はね、36 年前に死んだの。それでね、夫が死ぬ前までは夫と一緒に店を経営したけど、夫が死んだ後には、私が店の代表になったし、子供もいるしね。それで、店の経営と家のことで精一杯だったよ。

#### 参加前の状況 - ④地域に全く関心がなかった

このように、家業の経営、夫の死亡、子育てなどで精一杯だった Cさんは、地域のことには全く関心がなかった。仕事関係上で出会った人は多かったが、地域には知り合いがあまりいなかったと言う。

イン：以前から地域のことに関わりとかはありましたか。

C：全くなかった。

イン：全く？

C：そう。先も行ったように私は 18 歳から家の店の仕事をして結婚してからは旦那と一緒に店の経営をしたね。でも、旦那がなくなって、店の経営や家の仕事などで精一杯だったんですよ。なので、地域に関心もなく、地域の人々もあまり知らなかったです。むしろ、地域の人より仕事関係上出会った人が多いです。

#### 参加のキッカケ - 地域で唯一知り合いであった友達からの誘い

前述したように Cさんは、仕事関係上での知り合いは多かったが、地域での知り合いは隣の家に住んでいた友達が唯一であった。店を息子に継いだ後には、地域で唯一知り合いであったその友達を良く家に招待して食事を一緒にしたり、喋ったりする仲良しの関係を維持していた。「自主活動」への参加は、その友達からの誘いで参加をした。

イン：では、どのようなキッカケでつるがやりフレッシュ倶楽部に入ったんですか？

C：私はほら、地域に隣に家に住んでいた〇〇さんだけ知

り合いだったんですよ。店を息子が経営することになってから、地域で唯一知っていた隣の〇〇さんと良く喋ったり家に招待して食事を一緒にとったり。その後〇〇さんからリフレッシュ倶楽部というのがあるけど、来て見ない？と誘われて。

### 唯一の知り合いが亡くなる

地域で唯一知り合いであった隣の家に住んでいる友達からの誘いで「自主活動」へ参加したが、Cさんが参加してからその友達が他界した。「自主活動」でいつも隣に座っていたが、来るたびに寂しさを感じたCさんは席を移してもらう。

イン：その方も現在、つるがやリフレッシュ倶楽部に出ていますか？

C：亡くなりました。いつも一緒につるがやリフレッシュ倶楽部と一緒に行って、隣の席に座っていました。でも、すぐ亡くなって。それでつるがやリフレッシュ倶楽部に行くとき隣にいないから寂しくて席を移して欲しいと推進員にいいましたね。

### 息子が亡くなる

Cさんは、自分を「自主活動」へ誘ってくれた友達が亡くなったことについて席を移すぐらい寂しかったと語ったが、去年、彼女の長男も他界した。自分の息子が亡くなった時には、地域の人には誰も来てくれないだろうと思ったと語る。その理由としては、参加前の状況で見てきたように、地域に知り合いがあまりいなかったし、「自主活動」に参加して知り合いになった人たちは長い付き合いではなかったからである。

C：実は、〇〇さんが亡くなって、去年には、長男も亡くなったんですよ。息子が亡くなった時、地域の人には誰も来ないかと思いました。

## 「自主活動」の人々から励ましてもらう

しかし、Cさんの予想とは違って、「自主活動」で付き合い合った新しい友達がお葬式に来てくれて、励ましてくれたことが非常にありがたかったと語る。

C：しかし、「リフレッシュ倶楽部」で出会った新しい友達が来てくれて、励ましてくれたことが非常にありがたかったです。

以上で検討したように、Cさんは、若くして家業を手伝い、結婚してからは、夫と家業を継いだ。しかし、夫が亡くなって、一人で家業の経営、子育てなどで精一杯の人生を過ごした。そのため、引退する前には地域との関わりが全くない状況であった。年を取ってから家業のことを息子に継ぎ、引退した時、地域の中では隣の家に住んでいる一人しか知り合いがいなかった。彼女が「自主活動」に参加したキッカケも地域で唯一知り合いであったその友達からの「声掛け」であった。

「自主活動」へ参加した後、その知り合いが他界し、寂しく感じて席まで移して参加を続けたが、自分の長男も他界した。このような状況になったCさんは、「自主活動」へ参加しなくなり、閉じこもる生活をする可能性が高かった。なぜならば、Cさん自身も「自主活動」に参加して知り合いになった人たちは長い付き合いではなかったため、地域の人には誰も来てくれないだろうと思ったからである。

しかし、自分の長男のお葬式に「自主活動」へ参加をしてから出会った新しい友達が来てくれて、励ましてくれたことに非常にありがたさを感じ、今では地域での知り合いも増え、楽しく暮らしている。

また、Cさんの場合は一戸建てに一人で住んでいる。彼女は他界した長男以外にも息子と孫がいるがCさんとは別なところに住んでいる。つまり、彼女の暮らしを支えているのは家族の存在で

はなく、「自主活動」で出会った地域の住民の支えで元気で暮らしていることが分かる。

イン：今も仕事上で出会った人たちと会っていますか？

C：もう亡くなった人もいるし、仕事関係だったのであまりいないですね。むしろ今は地域の中で友だちができて昔の知り合いより地域の人々と話す機会が多いです。

イン：ここに参加したのが C さんにとって大きい意味を持っていますね。

C：そうです。今は大きい家に一人で住んでいるし、昔は海外旅行とか外にも良く出たけど、今 85 歳だから、海外とか遠いところはあまり行けないし。孫とひ孫が来たら楽しいけどいつも来るわけではないから、広い家に一人でいるよりここに来て、人々の話を聴いたり、体動かして運動したりするから楽しいです。

## 2) 夫が亡くなって閉じこもっていた F さんの事例

### 参加前の状況 - 地域に関心が全くなかった

F さんは、「自主活動」に参加する前は地域に関心が全くなかった。その理由は、いずれ引っ越しするからわざと地域との関わりをもたなかったと言う。

イン：専業主婦として生活される中で地域に関心がありましたか？

F：何もないです。帰りたい一心でずっと東京を向いて生活していました。いずれ東京に帰るんだという気持ちでいたので、地域とはほどほどに関わっていました。

## 参加のキッカケ - 会長夫婦の声掛け

Fさんの参加のキッカケは「自主活動」の会長夫婦の声掛けである。会長夫婦は最初Fさんのご主人に声を掛けたが、ご主人は、「教えるのであれば本格的なものを教えたい」と言ってFさんのみ活動するようになった。

イン：地域に全く興味がなかったのに、つるがやりフレッシュ倶楽部にはどのようなキッカケで入会したんですか？

F：会長ご夫妻がうちの主人を誘ったのをキッカケに推進委員をするようになったんですが、主人は「教えるのであれば本格的なものを教えたい」といって私だけ活動するようになりました。主人は講師をやっていたので、自分に合ったところを見つけるんだと言っていましたね。

## 夫が倒れて、亡くなる

Fさんは、ただ「自主活動」の会長夫婦を助けたいという気持ちから始まったが、推進員として皆の前で指導するとは全く考えなかったと言う。そのような状況から推進員として活動を始めて1ヶ月もしない頃、Fさんの夫が倒れ、他界した。その後約10ヶ月「自主活動」の活動を休む。

イン：地域に関心がなかったのに、誘われて「やろう」と決めたのはなぜですか？

F：特に何も考えず、会長ご夫妻を助けてあげられるならいいかなと思ったんです。人前でやるなんてことは全く考えもしなかったのです。研修で市役所に行ってた時もそういった話はなかったので、まさかと思いました。実際ここでやり始めた時に、私には向いてないなと思いました。そんなことを思っているうちに主人が倒れてしまったんです。活動し始めて1ヶ月もしないうちに主人が倒れて、それで半年か10ヶ月くらい休みました。

## 家から出たくない

夫が他界した後、Fさんは閉じこもり生活をしていた。Fさんの場合、いずれ引っ越しするからという気持ちで地域との関りもあまりもたなかった人である。知り合いもあまりいなかったFさんは、「自主活動」の会長の奥さんから何度も誘われたが家から出たくなかったと言う。

F：活動し始めて1ヶ月もしないうちに主人が倒れて、それで半年か10ヶ月くらい休みました。その間も会長の奥さんが何度も活動に誘ってくれていました。けれども、出たくなかったですね。

## 皆に参加を促されるが葛藤する

Fさんは、会長の奥さん以外の知り合い何人かにも参加を促されるが、家から出たくない気持ちが強かったため、そう簡単には参加しない。しかし、皆から参加を促されることにより葛藤する気持ちをもつ。

F：会長の奥さんが何度も活動に誘ってくれていました。けれども、出たくなかったですね。言われなければ出てくるつもりはなかったし、知ってる人はすぐに私の気持ちを察し励ましてくれるんですが、そう簡単には気持ちの整理がつかなくて葛藤していました。

## 夢遊病のように「自主活動」へ戻る

家から出たくないという気持ちで約10ヶ月間の閉じこもり生活をしていたFさんは、「自主活動」に再び参加する。その再参加をFさんは「夢遊病のようにここへ来たような気がする」と語っている。

F：生前、主人にも気持ちの整理をして早く立ち直るようにと言われていたんですけどね。何を考えても主人は戻

ってこないし、もう何も考えられなくて夢遊病のようにここへ来たような気がします。

## 元気になる

夢遊病のように「自主活動」へ来たと語った F さんは、それから推進員として参加が続き、皆から「元の姿に戻って来たね」と言われる。つまり、持続的に参加することにより、家から出たくない気持ちを切り替えたのである。

F：それから 2 年くらい経ったとき、「元の姿に戻って来たね」と言われてそれから切り替わりました。

## 知り合いが増え、町内会に積極的に参加する

いずれ引っ越しするからという気持ちで地域との関りをあまりもたなかった F さんは、ここに再参加することで、知り合いが増え、町内会に積極的に参加することになった。

イン：推進員をする以前と現在を比較して、ご自分に変化がありましたか？

F：町内に対して積極的になったし、これを通して皆さんと知り合いになるので挨拶をするようになるから輪が広がるというのはありますね。20 軒先に住んでる人とそんなに話す機会もないですが、ここへ来れば長話も出来ますから、そういうことを通して人間関係が出来たと思います。

以上で検討したように、F さんは「自主活動」の会長夫婦の声掛けから推進員として参加することになった。しかし、夫が亡くなった後、閉じこもり生活をした。夫が他界した後、約 10 ヶ月間も家から出たくないという気持ちで、閉じこもり生活をしていた F さんは「自主活動」の会長の奥さんを含め何人かの参加を促す「声掛け」で葛藤する姿も見せる。F さんは参加を促す「声掛



け」で参加するかしないかと葛藤はするが、すぐ参加する行動はしない。しかし、「葛藤」する気持ちが「自主活動」という「居場所の存在」へ向き、自ら「夢遊病」のように「自主活動」へ戻る。

現在一人暮らしをしている Fさんは、「自主活動」でできた人間関係の輪が広がることによって、町内会にも積極的に参加できるようになり、元気な姿へ切り替えることができた。つまり、彼女の暮らしを支えているのは、「自主活動」の存在とその中でできた「人間関係の広がり」である。

### 3) 夫が亡くなって家でずっと一人で過ごしていた Gさんの事例

#### 参加前の状況 - 順番に来る町内会の役員

Gさんは、「自主活動」が出来る前に、地域の役員を務めた。しかし、その役員は、自分の意志で務めたわけではなかったと語る。つまり、町内会の役員が順番性であるため、仕方なく町内会の役員を務めたと言う。

イン：専業主婦をしていてこの地域に昔から興味関心がありましたか？

G：関心というか、役員をやると自然にそうなりますよね。関心とは言わないかもしれないけれど、みんな順番に役員をしますからね。興味はないですけど、はっきり言うとか関心の方かな。そうしないとやっていけないので。

イン：（役員の仕事は）自分の意志ではなく順番にやらなくちゃいけないからですか？

G：それを言うと怒られちゃうけど、意志じゃないですね。最近はどうもないという気持ちでやるのが多いけど昔は流れで来てましたね。

## 参加のキッカケ - 推進員からの誘い

Gさんの参加のキッカケは推進員からの誘いである。参加を誘われた頃は、元気で面白そうだったので、すぐに参加を決めたと言う。

イン：入会のキッカケは何でしたか？

G：紹介されたので、その頃は元気だったし面白そうだったから参加しようと思いました。遊びのような内容ですからね。

イン：どなたから誘われましたか？

G：(…略) 10年前に誘われた時の記憶はないですが恐らく推進委員の方にお声を掛けていただいたんじゃないかと思います。

## 入会したが夫が倒れ参加をやめる、その後、夫が亡くなる。

しかし、参加をしてまもなく夫が倒れ、面倒を見なければならぬ状態だったので「自主活動」への参加を辞める。その後、夫が他界する。

G：初期のころですか 10年近く前でしょうか。入ったんですか、その後主人が入退院を繰り返すようになりまして。

イン：10年前に参加し始めてどのくらいして参加できなくなったんですか？

G：参加し始めて間もなくです。体操に使う道具を作ったりしたんですが、あっという間に主人が入院したものですから、それどころじゃなくなってしまったので辞めることにしました。

イン：ご主人が他界されたのは何年前か伺ってもいいですか？

G：平成22年（2010年）です。

## 再び声掛けられ参加する

夫が他界してから、いつも家に一人で過ごしていたと言う G さん。その際、推進員から再び参加の声を掛けられる。しかし、10 年前に参加した頃と違って、体の調子が悪くなったので、参加をするかしないかということで悩むが、推進員から「こういうところの雰囲気だけでもいいでしょ」と言われ再参加を決める。

イン：再開したのはいつですか？

G：一昨年ぐらいです。いつも一人で家にいるので声を掛けていただきました。ただ腰を痛めていまして、圧迫骨折をしたことがあるので無理はできないのですが、「こういうところの雰囲気だけでもいいでしょ」と推進委員の方にいわれてまた戻ってきました。

## 憩いの場－気持ちが明るくなる

G さんは、参加を辞めて 10 年後に、再び推進員からの声かけで再参加をした。再参加をすることにより、G さんにとって「自主活動」は「憩いの場」になる。また、このような「憩いの場」への参加が、家に一人で寂しく感じることも忘れることができるし、気持ちが明るくなり、自分にとっては二重丸であると語る。

イン：一昨年から再び参加し始めて何が一番良いですか？

G：皆さんの顔を見て話しするってことでしょうかね。普段、近場に住んでても意外と会えないですもの。そんなに表を出歩かないので会わないんですよ。憩いの場という感じです。家にいたら体を動かしたくないし、ここに来ればわずかでも自分なりに動いて活動しますからね。

G：気持ちが明るくなりますね。家にいたら主人が亡くなったことをくよくよ考えてばかりいるので、こういう場に来ると気持ちが違いますね。一人でいるのが好きだっ

たんですが、主人がいなくなったことで寂しさを感じますね。(…略) ここに参加することだけで私にとっては二重丸だと思っています。

Gさんの場合は、夫が他界する前に「自主活動」に参加していた。しかし、夫が他界した後にはずっと家に一人で過ごし、閉じこもりがちの状態に落ち込む可能性が高かった。しかし、推進員からの声掛けで、10年ぶりに再び参加をし、今は、「自主活動」という居場所が、Gさんにとって「憩いの場」になっている。つまり、家に一人でいたら夫が亡くなったことで寂しくなるが、こういう「憩いの場」への参加をすることにより気持ちが明るくなる。

また、Gさんの場合は息子と一緒に住んでいるが、息子は朝早く出て夜遅く帰るためGさんとのコミュニケーションがあまりない。つまり、GさんもCさんのように、彼女の暮らしを支えているのは家族の存在ではなく、「自主活動」で出会った地域の住民の支えで地域の中で明るく暮らしていることが分かる。

イン：現在はご家族とお住まいですか？

G：主人はなくなりましたので、息子と二人で暮らしています。

イン：体の健康面以外に、精神的にもいい影響を与えている点について具体的に教えてください。

G：気持ちが明るくなりますね。家にいたら主人が亡くなったことをくよくよ考えてばかりいるので、こういう場に来ると気持ちが違いますね。一人でいるのが好きだったんですが、主人がいなくなったことで寂しさを感じますね。息子は日中は仕事ですからね。

## おわりに：高齢者の健康づくりの「自主活動」における学びのプロセス

第3章では、本研究の課題を明らかにするために高齢者の健康づくりの「自主活動」の事例を取り上げ本研究で確立した理論的立場と分析視野から高齢者の「自主活動」の健康づくりにおける学びのプロセスの分析を行った。

本研究での理論的立場としては状況的立場に立つが、状況的学習論の立場からその分析単位を「特定の実践コミュニティ」と「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者に」その分析単位として着目することと、分析視野としては「意識・行動の変革」「コミュニティの変革」「状況の変革」を分析視野としてとらえ、その「変革」を「学び」として捉えることを本研究に理論的立場として確立した。

以下ではその学びのプロセスの分析をまとめる。

まず、高齢者の健康づくりの「自主活動」は介護予防運動をすることによって健康維持や促進を目的として活動をしているため、参加を通して「健康に対する意識及び行動」の変革が生じた。

具体的に、【運動の必要さが分かる】という意識の変革や【健康のため、食材に気にする】という意識・行動の変革である「健康に対する意識が高くなる」というプロセスがあった。それと同時に、【健康維持】という意識と【体の調子よくなる】という行動の変革である「健康になる」プロセスも生じた。また、参加者たちは参加を深めることによって「日常生活上、健康予防活動をする」ことになる。そこでの学び（変革）とは、【家で運動する】、【意識的に体を動かす】、【外に出て運動する】、【友達に運動を教える】、【母と一緒に運動する】、【他の人に体の調子を聞く】という行動の変革が生じた。つまり、ここで大事なのは、「健康に対する意識と行動の変革」は「自主活動」をする「時」から参加を深めることによって「日常生活上、健康予防活動をする」ことまでの「行動」の変革が生じたことである。

高齢者の健康づくりの「自主活動」は、健康の維持と促進する

ため活動をしている「自主活動」である。そのため、上で確認したように「自主活動」に参加することによって「健康に対する意識・行動の変革」が生じた。しかし、高齢者の健康づくりの「自主活動」へ参加を通じた学びは「健康に対する意識及び行動の変革」のみ生じることではないことが分かった。それは、高齢者の健康づくりの「自主活動」に参加することによって「人間関係の広がり的大事さ」という変革（学び）も生じたことが分かった。

具体的に、地域の中で【挨拶する人が増える】という行動の変革から「人間関係が広がる」ことが分かった。また、高齢者の健康づくりの「自主活動」は「日常生活上、様々な情報を得ることができる」というコミュニティの変革も生じた。そこでの様々な情報というのは、【健康に関する情報】、【病院に関する情報】【詐欺に関する情報】、【それ以外の様々な情報】である。つまり、高齢者の健康づくりの「自主活動」が介護予防運動のみする「自主活動」から「情報の場」としてコミュニティの変革が生じたことである。このコミュニティの変革は参加を深めることによって【情報を交換する】という「行動・コミュニティ」の変革も生じた。

最後に、高齢者の健康づくりの「自主活動」に参加することによって大きな変革として「地域に関心がある」ことであった。それは、「自主活動」に参加をすることによって【町内会の生活が楽しくなる】という意識・行動の変革と【町内活動に対して積極的になる】ことの行動・状況の変革であった。また、【地域の中で交流の大切さが分かる】という意識・行動の変革も生じ、ここでの変革を通して【他の交流の場への参加】をするという意識や状況の変革が生じ、それがまた「人間関係が広がる」ことに繋がることが分かった。この変革における循環のプロセスからソーシャルキャピタルが豊かになる。また、「地域に関心がある」という変革（学び）のプロセスは、自分の状況の変革が生じることも分かるが、さらに地域の変革も生じたことが分かった。

このように高齢者の健康づくりの「自主活動」での変革のプロセス（学びのプロセス）は、参加をすることによって単に「健康

に対する意識や行動の変革」のみ生じる「自主活動」ではなく、参加を深めることによって「人間関係の広がり的大事さ」という変革も生じたことが明らかになった。

これまでの高齢者の健康づくりの「自主活動」の学びのプロセスは、本研究でいう「特定の実践コミュニティ」に着目しての分析であった。今回の調査では、「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者」にも着目して分析を行うことができた。ここでの「特定の参加者」は、①高齢者の健康づくりの「自主活動」に運営者として参加した「特定の参加者」であり、②「自主活動」に再参加した「特定の参加者」であった。この「特定の参加者」がどのようなプロセスとして参加をしているのか、また、再参加をしたのかを明らかにすることによって高齢者の健康づくりの「自主活動」での学びの意義を明確することができた。

まず、高齢者の健康づくりの「自主活動」に運営者として参加することは、当初区役所からの介護予防運動に関する研修をうけるものの、その後は自分たちで運営しなければならないことについて「非常にストレスとして溜まり、推進員として参加したくないとか辞めたいという気持ち」をもたせるぐらい「運営者としての負担」を感じた。しかし、この「運営者としての負担」は「健康に関する学習活動をする」ことや参加者や運営者同士で「健康に関する情報などを共有」することで「運営者としての負担」を乗り越えた。特に、運営者の「健康に関する学習活動をする」ことは、【健康に関する情報に目が向く】、【新聞などから健康に関する情報を切り抜く】という行動変革として一般の参加者とは異なる「意図的に健康に関する学習活動をする」ことであった。このように「運営者としての負担」を「健康に関する情報などを共有」することや「健康に関する学習活動を意図的にする」ことを通して運営者たちは「自主活動」に参加することの意味を「自分のため」であると意味付けていた。ここで「自分のため」という意味は【積極的な性格になる】、【運動に関する知識が増える】ことの意識・行動の変革から「自分のため」として位置づけていたが、最も大事なところは、運営者としての参加をすることによっ

て【顔見知りが増える】という意識・行動の変革が「人間関係が広がる」ところと繋がっているところであった。

最後に「高齢者の再参加のプロセス」では、「自主活動」に参加している人の中で、閉じこもりがちであった3人の個人事例を取り上げた。1人目は、一人暮らしで、地域に知り合いが一人しかいなかったCさんの事例、2人目は、夫が亡くなって閉じこもっていたFさんの事例、3人目は、夫が亡くなって家でずっと一人で過ごしていたGさんの事例であった。彼女らの個人事例を取り上げることにより、「閉じこもりであった高齢者の状況と再参加のプロセス」について詳細に分析した。

分析の結果、まず、閉じこもって孤立しがちである高齢者を「包摂」するプロセスの中で一番大事なのは「声掛け」であるが、その「声掛け」は同じ地域に住んでいて、信頼性がある顔見知りからの「声掛け」であることが大事であると指摘できる。稲葉陽二（2013）が指摘したように<sup>7</sup>、FさんとGさんは夫に他界されて「自主活動」への参加を辞め、閉じこもり生活をしていた。しかし彼女らは、同じ地域に住んでいて、顔見知りであった自主活動の運営者の声掛けで再び参加をし、今は楽しく元気で暮らしている。

また、彼女らが地域での暮らしを支えているのは家族の存在ではなく、「自主活動」で出会った地域の住民であったことが指摘できる。彼女らには子供が存在しており、Cさんの場合は、同じ市に息子家族と孫が住んでいて、Gさんの場合は息子と住んでいるにもかかわらず、家で閉じこもる生活をしていて、孤立しがちであった。つまり、彼女らが家から出て社会参加をするようになったのは「自主活動」で出会った地域の住民の支えであった。

最後に、3人の参加のプロセスの分析から分かったことは、「自主活動」でできた「人間関係の広がり」が彼女らを「精神的に支えてくれる」ことである。3人とも夫に他界され、特にCさんの場合は長男にも他界されたため、閉じこもり生活をする可能性が高かったし、精神的にも辛かったと語る。しかし、「自主活動」へ参加してから広がった人間関係によって、現在は精神的にも元気になり、地域の中で明るく暮らしている。また、「自主活動」



へ再参加（包摂）した 3 人は「自主活動」に再参加することによって「地域に関心がある」ことの変革も生じており、それは「自主活動」における「人間関係の広がり」から支えられていた。

以上、第 3 章「高齢者の「自主活動」と健康づくり」では、本研究での分析単位と分析視野から分析した結果、高齢者の健康づくりの「自主活動」における学びのプロセスは、単に自分の健康だけの意識や行動のみ変革するプロセスではなかった。そこでの学びは、コミュニティの変革と自分や地域の変革も生じた。特に、「人間関係の広がり」の学びを通してソーシャルキャピタルが豊かになることと、運営者として参加することの意味、高齢者の「包摂」のプロセスから高齢者の健康づくりの「自主活動」は「包摂的な地域社会（inclusive community）」を構築する学びの力を内包していることに高齢者の健康づくりの「自主活動」がもつ教育学的意義として考察することができる。

## 註

- <sup>1</sup> 逢坂伸子，中川文子，塩見恭子，落合都（2012）「長期間の介護予防活動がもたらす効果と活動継続要因についての分析」理学療法学 2011(0)，Ec0379-Ec0379 頁．
- <sup>2</sup> 逢坂伸子，高橋慶子，足立安正，他 10（2009）「大東市における介護予防事業の取り組み：一専門職主体の教室と住民主体の活動の介護予防効果の比較一」日本理学療法学会大会，E3P1185 頁．
- <sup>3</sup> 逢坂伸子他、前掲註（1）．，逢坂伸子他、前掲註（2）．
- <sup>4</sup> 堀川俊一（2015）「住民主体の介護予防活動：いきいき百歳体操の経験から（特集 地域包括ケアシステムとリハビリテーション）」総合リハビリテーション，43・9，825-829 頁．
- <sup>5</sup> 藤村正之（2001）「社会参加，社会的ネットワークと情報アクセス」，pp. 29－50，平岡公一『高齢期と社会的な不平等』東京大出版会．
- <sup>6</sup> 仙台市統計情報 - 町名別年齢（各歳）別住民基本台帳人口データを参考して筆者作成．  
（<https://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/jinko/chomebet su.html>）．
- <sup>7</sup> 稲葉陽二（2013）によると、日本の高齢者の社会参加は、配偶者・パートナーなどの同居している家族が中心であり、配偶者・パートナーを失

---

った高齢者は、社会参加の機会を大きく失っている。すなわち、日本の高齢者の社会参加は、個人の背景（財産や学歴等）や社会構造より、パートナーの有無によるものだという指摘している。

## 第4章 住民の「自主活動」と災害復興地域づくり

### はじめに

第4章では2つ目の事例である災害復興地域づくりにおける「南三陸町入谷地区の住民の自主活動」を取り上げる。

第1節では、今日、災害復興地域づくりにおけるレジリエンスの概念が注目されていることから、災害レジリエンスの概念の検討を行う。

それらを踏まえて第2節では、具体的な事例である「南三陸町入谷地区」での住民の「自主活動」をとりあげ、災害復興地域づくりに取り組んでいる住民たちの「自主活動」の学びのプロセスを明らかにする。第4章の第2節では、本研究の理論的検討で確立した「特定の実践コミュニティ」へ着目し、「意識・行動の変革」「コミュニティの変革」「状況の変革」の分析視野から「特定の実践コミュニティ」である住民たちの「自主活動」の学びのプロセスを明らかにする。

### 第1節 災害復興地域づくりにおけるレジリエンス概念への注目

日本は今まで防災対策に力を入れたにもかかわらず2011年3月11日に発生した東日本大震災では未曾有な被害を受けた。東日本大震災では約2万人以上の死者・行方不明者が発生したという。なぜこのような大きな被害となったのか。

これについて、田中重好（2013）は戦後日本が積み上げてきた防災対策のその根底にある基本的な考え方に問題があると指摘している。彼は、その基本的な考え方を「防災パラダイム」とし、その「防災パラダイム」の転換が必要であると主張している。田中がいう「防災パラダイム」とは以下の4つのことを示している。1つ目は「科学主義」であり、2つ目は「想定外力の向上」である。3つ目は「行政中心の防災対策」で、4つ目は「中央集権的

な防災対策」である。1つ目と2つ目は科学と関連しており、3つ目と4つ目は社会と関連している。具体的に彼は以下のことについて防災パラダイムを説明している。1つ目の「科学主義」は、「地震予知ができれば犠牲者は大幅に減らせる」という「科学主義の知見に基づいて、防災のためのハード整備をすること」となり、それが2つ目の「想定外力の向上」を高めたという。これの担い手として行政が中心となって取り組むようになり（3つ目の「行政中心の防災対策」）、「日本の行政システムのなかでは、行政中心の防災対策は政府が主導する中央集権的なかたちで進められてきた」（4つ目の「中央集権的な防災対策」）と述べている<sup>1</sup>。彼は今回の東日本大震災の未曾有な被災からこれまで日本が進めてきたこの「防災パラダイム」の転回の見直しと転換が必要であると指摘している。

片田敏孝（2012）も東日本大震災の問題について「防災行政に過剰に依存した」ことを指摘している。具体的な現状として、「災害対策基本法のもとで遇進してきた防災行政の中で、住民には「防災は行政がやるもの」との認識が根付いており、そのような認識のもとで、住民は災害に対する安全性を行政に過剰なまでに依存し、そして自らの命までも委ねてしまっている状態にある<sup>2</sup>」と述べながら、その結果、「住民たちについては、防潮堤などのハード施設整備が進むにつれ想定外力までの小規模な津波は施設が防御するようになり、被災頻度は著しく低下した。その結果、災いをやり過ごす知恵が忘れ去れる、「あの防潮堤があれば大丈夫」といった、ハード施設への依存意識が高まっていた<sup>3</sup>」と「防災行政に過剰な依存」を問題として指摘している。

このように従来の防災対策の見直しから、政策においても今日災害における「レジリエンス（Resilience）」の概念が注目されるようになった。しかし、この「レジリエンス」は論者によってその捉え方が少しずつ異なっている<sup>4</sup>。

以下では、この「レジリエンス」が論者によってどのように異なっているのか、また、何が共通しているのかを検討する。その上で、本研究における「レジリエンス」の捉え方を定める。それ

らを踏まえて、具体的な事例を取り上げる博士論文の課題3を明らかにする。

まず、前田昌弘（2016）は、「平時の個人や組織の活動が損なわれ、地域一体に被害をもたらすような出来事」を災害と定義し、「あるシステムが外からの変化や危機に対処し、望ましくない状況を脱して活動の安定状態を取り戻す、あるいは別の安定状態に移行する能力<sup>5</sup>」をレジリエンスとして捉えている。前田は、レジリエンスとは「安定状態に取り戻す、移行する」という「復元・回復」に焦点を置いてある。多くの論者は前田が焦点をおいている「復元・回復」をレジリエンスとして捉えている。

それについて浦野正樹（2007）は、レジリエンスを「復元＝回復力（Resilience）」として捉えてはいるが、「復元＝回復していく原動力」を「地域に埋め込まれ育まれていった文化のなか<sup>6</sup>」からみようとしている。つまり、前田は「地域を安定状態に取り戻す、移行する」こととしてレジリエンスを「復元・回復」として捉えているが、浦野は、その「復元・回復」というのは、「地域に埋め込まれ育まれていった文化のなか」から「復元＝回復していく原動力」があるとしている。

このようにレジリエンスは「復元＝回復」として捉える場合がある。これに対して、アルドリッチ（2012；2015）は、レジリエンスを「個人ではなく、共同社会レベルでのネットワーク化」「地域が保有している能力」に焦点をおいて、それは「連携と協力」と通して可能であると従来のレジリエンスとは少し異なる視点でレジリエンスを定義している。

アルドリッチは、まず、災害を「平時の活動が損なわれ、コミュニティ帯に被害をもたらす恐れがあるような、あるいは大きな被害の原因となるような出来事」として定義しながら、「この許容範囲の広い災害の定義には、交通渋滞や航空機の遅れ、自動車の小さな衝突事故などは含まれないが、地震や津波、原子力発電所のメルトダウン、竜巻、火災、洪水などは含まれる」とし、「これらの出来事は人の命を奪い、住居や職場を破壊し、財やサービスの日常的な流れを寸断して、通常業務は停止し、生活に不

可欠であるインフラに障害を引き起こす」と述べている<sup>7</sup>。その上で、レジリエンスとは「連携した働きかけと協力し合って行う活動を通じて、災害などの危機を切り抜く、効果的で効率的な復興に取り組むための地域が持つ潜在能力<sup>8</sup>」であると定義している。つまり、アルドリッチは、レジリエンスは「連携と協力」が不可欠であることを指摘しながら、レジリエンスにおけるソーシャルキャピタルに注目している。

また、レジリエンスを「しなやか」という用語を用いて定義する論者もいる。例えば、京大・NTTレジリエンス共同研究グループ（2009）は、「防災と減災の両側面を持ち合わせたものを「総合的な防災力」<sup>9</sup>」としてレジリエンスを捉えており、そのレジリエンスを高めた社会を「しなやかな社会」として呼んでいる。ここで「しなやか」は、「強い風にも重い雪にも、ぽきっと折れることなく、しなまってまた元に姿に戻るように、何があってもしなやかに立ち直れる力<sup>10</sup>」として捉えている。

このように、レジリエンスをどこに着目するのか、どのように捉えるのか、は論者によって少しずつ異なっている。しかし、共通点としてはレジリエンスを高める主体として従来の防災政策では捉えてない「地域」に注目されていることである。

本研究におけるレジリエンスの概念は、アルドリッチが捉えている概念のようにレジリエンスを捉えたい。彼が注目しているレジリエンスにおける「連携と協力」を通じた「地域の潜在能力」は、本研究で捉えている「自主活動」との性格とも一致する部分がある。それは、「自主活動」は、自分たちだけの活動ではなく、行政を含めた外部との共同といった連携を大事としている部分である。したがって、本研究ではアルドリッチが捉えているレジリエンスを高めるためには住民や市民の「自主活動」へ着目する必要があると思う。ここから教育学的アプローチが可能であると考えられる。つまり、レジリエンスはどのように、いかに高めることが出来るのか、教育学的視点から災害復興地域づくりに取り組んでいる地域住民の「自主活動」への参加のプロセスを明らかにすることである。ここで明らかにしたい災害復興地域づくりに

おける地域住民の「自主活動」への参加のプロセスを成人の学びのプロセスとして捉える。

## 第 2 節 調査の概要

### 1. 南三陸町入谷地区の住民の活動概要

現代の農村地区は少子高齢化や学校の統廃合など、人口流出といった人口減少が大きな問題として挙げられている。南三陸町入谷地区も同じような状況で、統廃合により地区には小学校が 1 つしかないことや少子高齢化で過疎化傾向の地域である。入谷地区は海より里山の方面に位置しているが、ほとんどは農業従事者より給与所得者で、自営の人は少ない地域でもある。東日本大震災の当時は、南三陸町の 4 つの地区の中で 3 つの地区は沿岸部であったため津波により壊滅的な被害を受けたが、入谷地区は沿岸部ではない里山の方面であったため津波の被害は受けなかったという。そのため、3・11 の当時は多くのボランティアや団体の受け入れの窓口となっていた。その後、入谷地区の住民たちは災害復興における地域づくりに取り組むため「雇用の場の創出」や「交流人口の増大」などを通じた災害復興の地域づくりに取り組んでいる。活動を通して入谷地区には多くの人びとが訪れるようになり、移住者も増えている。

表 4 南三陸町における人口数と世帯数及び入谷地区における人口数と世帯数<sup>11</sup>

南三陸町			入谷地区		
年度	人口数	世帯数	年度	人口数	世帯数
H. 22	17,687	<b>5,368</b>	H. 22	1,906	<b>519</b>
H. 23 (2011)	15,488	<b>4,893</b>	H. 23 (2011)	1,866	<b>523</b>
H. 24	15,192	4,847	H. 24	1,860	529
H. 25	14,683	4,754	H. 25	1,892	543
H. 26	14,169	4,675	H. 26	2,028	625
H. 27	13,806	4,599	H. 27	2,044	642
H. 28	13,529	4,586	H. 28	2,068	656
H. 29	13,210	<b>4,566</b>	H. 29	2,023	<b>653</b>

表 4 の統計データで確認できるように、南三陸町全体の世帯数は、東日本大震災の前年度である平成 22 年度には、5,368 世帯であったが、震災年度である平成 23 年度には 4,893 世帯で 475 世帯減少した。その後も徐々に人口流出が進行し平成 29 年現在では 4,566 世帯で震災からさらに 327 世帯が減少した。しかし、入谷地区では、震災前年度には 519 世帯であったが、震災年度には 523 世帯で 4 世帯が増加した。平成 29 年 12 月現在では 653 世帯で震災後 130 世帯が増加している。

表 4 で確認できるように、南三陸町全体的には人口と世帯数が減っているが、入谷地区は増えている状況である。

入谷地区も日本の農村社会とも同じく地域が衰退する課題を抱えていたが、東日本大震災の契機に多くの支援（資本や資源）を受けながらも、それに向き合う住民たちの「自主活動」により、復興の地域づくりに取り組んでいる。

入谷地区における復興の地域づくり活動は主に震災で仕事を失った人びとや地元へ戻った人（U ターン）、移住者（I ターン）



への「雇用の場の創出と提供」、地元住民や南三陸を訪れる人びとのための「交流の場の提供」、「移住者の増大のための活動」、「南三陸のPR活動」などを通して「人」「交流」「仕事の場の創出」「地域活性化」「新たな公共性」を中心に南三陸町における「復興の地域づくり」として取り組んでいる。

A: どちらかというと、我々は NPO 活動に近い活動をしているんだね、我々は、その中に自主事業を盛り込んでいるというやり方ですね。だから、新しいスタイルの公共みたいのを目指していますよね。

以下表 5 は、主な活動内容の概要をまとめたものである。

主な活動(組織)名	南三陸復興のダコの会	株式会社 南三陸農工房	一般社団法人南三陸研修センター (ラーニングセンター)	花山ハウス
設立年度	2011年7月	2011年「ふれあい農園」 2013年7月「農工房」	2012年6月(法人設立) 2013年3月(施設設立)	2017年4月
雇用人数	8人	3人	22人	
活動目的と 主な活動内容	<input type="checkbox"/> 活動目的 ・東日本大震災後の「雇用創出」、「交流の場」づくり／・キャラクターを活用した南三陸のPR  <input type="checkbox"/> 活動内容 - YES工房 ・モノづくり製作・販売: オクトパスグッズ、まゆ細工、木製品、レザークラフト／・キャラクター商品開発／・商品開発研究(地域資源)／・販売促進・情報発信など／・モノづくり学習館(推進中)	<input type="checkbox"/> 活動目的 ・東日本大震災の被災者の「雇用創出」居場所づくり／・耕作放棄地の活用／・体験事業をおとした地域復興・震災復興への寄与  <input type="checkbox"/> 活動内容 ・思送りファーム／・農作物の生産(南三陸ネギ・トウモロコシ)／・体験農業の実践	<input type="checkbox"/> 活動目的 ・若い世代に「新しい価値」を伝える研修プログラム企画・提供  <input type="checkbox"/> 活動内容 ・研修プログラム／・宿泊研修施設「南三陸まなびの里いりやど」の管理・運営／・森里海体験学習／・ステーション・ワークショップ／・花見山プロジェクトなど	<input type="checkbox"/> 活動目的 ・シェアハウス(14人入居可) ・社宅、インターン生、お試し移住、長期滞在型対応
備考	・年間 3,000名以上体験・見学・買い物客	・年間 約2,000名のボランティア参加	H28(2016) 基準 ・研修プログラム: 111団体、2,457名 ・年間宿泊者: 9,289名 ・地域住民勉強会: 年間20回、365名参加	・現在 6人入居中

表 5 入谷地区の復興の地域づくりにおける主な活動の概要<sup>12</sup>

表 5 を概略すると、入谷地区の住民たちの災害復興地域づくりの活動は、東日本大震災の年度である 2011 年から始まった。「自主活動」による「雇用」としては、28 人が入谷地区における災害復興地域づくり活動のため雇用されており、現在推進している活動を含めると雇用はさらに増えると予測される。雇用のメンバーは、津波で仕事を失った人びとを含め、U ターンと I ターンの若者と定年退職者、主婦など地元の人である。

活動の目的としては、「南三陸復興ダコの会」は、東日本大震災後の「雇用創出」、「交流の場」づくりや南三陸のキャラクター「オクトパス君」を活用した南三陸の PR を目的として、YES 工房を中心にモノづくり製作や販売（オクトパス君グッズ、まゆ細工、木製品 レーザークラフト）、キャラクター商品開発（現在 LINE など IT 分野にも広げている）、商品開発研究（地域資源を利用）、販売促進・情報発信などの活動を主に取り組んでいる。「南三陸復興ダコの会」が運営している「YES 工房」には、年間 3,000 名以上体験・見学・買い物客が訪れ、「交流人口」を増やして地元の PR や経済にも寄与している。また、「YES 工房」では、収益の一部を復興のため寄付もしている。現在雇用人数は 8 人である。

「株式会社 南三陸農工房」は、2011 年に「ふれあい農園」としてスタートしたが、2013 年に「株式会社 農工房」へ活動組織の名前を変更する。現在雇用人数は、3 人であり、活動目的は、東日本大震災の被災者の「雇用創出」「居場所づくり」、「耕作放棄地の活用」、「体験事業」「南三陸野菜ブランド化」をとおした「地域復興・震災復興への寄与」を目的として立ち上げ、主な活動内容は、恩送りファーム、農作物の生産（南三陸ネギ・トウキ）、体験農業の実践を行っている。年間約 2,000 名のボランティアが農工房に訪れている。

「一般社団法人南三陸研修センター（ラーニングセンター）」は、入谷地区に多くの支援をしている「00 大学」と住民との構成で 2013 年に一般社団法人として立ち上がった。現在理事たちを除いて 22 人が雇用されているが、事務局長 1 人、業務・施設管理 3 人、研修担当 3 人、料理長 1 人、厨房 6 人、清掃 6 人（パ

ート）と夜間管理 2 人（パート）が「南三陸研修センター」で働いている。

設立のビジョンは「未来を創る人を育む」ことで、ミッションとしては「私たちは、地域が誇りを持ち、若い世代が未来に希望を持つ「新しい社会」を、ここ南三陸から実現していきます」を抱えており、ミッションの詳細として「（…省略）震災を経て、この町で立ち上がろうとする人々の生き様。そして、この地に結集する多重多様な人とのつながり。それらの中に、南三陸から伝えられる「新しい価値」があります。私たちは、「新しい価値」を若い世代に伝えることで、「新しい未来」を創造していく手助けをします。私たちは、「新しい価値」をこの地に生きる人々が再認識し、誇りを持てる地域づくりを手助けします。その使命が、私たちにはあります」という理念<sup>13</sup>のもとで活動が始まった。つまり「若い世代に「新しい価値」を伝える研修プログラム企画・提供」することが主な目的となる。

活動の内容としては、研修プログラムの企画・提供、宿泊研修施設「南三陸まなびの里 いりやど」の運営、森里海体験学習、スタディーツアー、ワークショップ、花見山プロジェクトなどがある。「南三陸研修センター」の事務所は、センターが運営・管理している「宿泊研修施設・いりやど」の中にある。平成 28(2016)の基準で、研修プログラムには 111 団体、2,457 名が参加し、年間宿泊者は 9,289 名、地域住民勉強会は年間 20 回、365 名が参加している。

花山ハウスはシェアハウス（14 人入居可）として「社宅・インターン生・お試し移住・長期滞在型対応」の目的として 2017 年 4 月にオープンした。現在 6 名が生活をしている（2017 年 12 月現在）。

これらの主な活動以外に、「花見山ランド」、「煎餅工場（入谷地区外にある）」などがある。入谷地区における復興の地域づくり活動をすることにより、震災前には入谷地区に来訪する人は 0 人であったのに対して、現在は 2 万人の来訪者が入谷地区に訪れるようになった<sup>14</sup>。

## 2. 調査の方法と分析概要

調査は、2017 年 10 月 7 日に予備調査をはじめ、10 月 20 日、10 月 26-27 日、12 月 2-3 日に南三陸に訪問し調査を行った。調査は、インタビュー調査を含め、施設見学や参与観察も行った。インタビューは、調査の概要を調査協力者に十分伝え、調査倫理規定にもとづき協力者の承認を得た上で IC レコーダーの収録を行った。調査は協力者の都合に合わせて一人当たり 40 分から長くて 1 時間 10 分までインタビューを行い、インタビュー協力者は A さんからの紹介で調査を進行した。インタビューは 11 名に対してインタビューを行った。インタビューは反構造面接方式で行い、録音したデータを文字に起こして質的データとして整理をした。

入谷地区での分析データのインタビュー調査協力者の概要は以下である。

表 6 2017 年度「入谷地区」のインタビュー調査協力者の概要

		年 齢	性 別	参 加 形 態	備 考
1	A	60 歳	男	南三陸研修センター 理事／ 事務局長 南三陸復興ダコの会 事務局 長 南三陸農工房 事務局長	・ 生まれ育ち 入谷地区 ・ 元公務員
2	B	60 歳	男	農工房代表 南三陸研修センター 理事	・ 生まれ育ち 入谷地区 ・ 農業者
3	C	59 歳	女	農工房	・ 震災で職場を失 う
4	D	34 歳	男	南三陸復興ダコの会	・ Uターン
5	E	32 歳	女	南三陸復興ダコの会	・ Uターン
6	F	49 歳	男	南三陸復興ダコの会	・ 津波で職業を失 う
7	G	29 歳	女	南三陸研修センター	・ 移住者（Iターン）
8	H	29 歳	男	南三陸研修センター	・ 移住者（Iターン）
9	I	66 歳	男	花見山プロジェクト委員長	・ 生まれ育ち 入谷地区 ・ 元会社員（定年 退職）

以下の表 7 は、M-GTA 分析手法の手順であるワークシートから得られた概念を本研究の理論的立場の分析視野である「意識・行動」「実践コミュニティ」「状況」の関係性を確認するための分類した表を示す。

表7 入谷地区の住民の「自主活動」による災害復興地域づくりにおける  
学びのプロセス－「意識・行動」「実践コミュニティ」「状況」の分類表

<p>【状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア活動への感謝 (ボランティア)</li> <li>・地域住民とボランティア団体との 災害復興の地域づくり始まり (ボランティア)</li> <li>・行政の助成金への申請の壁 (→連携)</li> <li>・ソーシャルキャピタルが豊かになる (公共性)</li> </ul>	<p>【意識・行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自立のために共に考える (自立⇄信頼)</li> <li>・助成金(補助金)に頼らない (自立)</li> <li>・信頼関係からもとづいた話し合い (信頼⇄自立)</li> <li>・インフォーマルでの話し合いを大事 とする(自立→信頼)</li> <li>・外部資源の活用(連携→自立)</li> </ul>
<p>【コミュニティ・行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・雇用の場を作る(公共性)</li> <li>・オクトパス君の非公式化(自立)</li> </ul>	<p>【行動・コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な連携先を築く(連携)</li> <li>・連携先との信頼関係を築く(信頼)</li> </ul>
<p>【意識・コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人が訪れる魅力ある地域づくり</li> <li>・新たな公共性と活力ある地域をつ くる(公共性)</li> </ul>	<p>【状況・行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協力する関係を維持する(信頼)</li> </ul>
<p>【意識】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と人のために考えるようになる (信頼→公共性)</li> <li>・交流人口から学ぶ(自立)</li> <li>・雇用への感謝(信頼)</li> <li>・売り上げをつくる(自立)</li> <li>・交流人口を増やす(自立)</li> <li>・地域に人がいないと復興もない (連携→自立と信頼)</li> <li>・活動の誇り(自立→公共性)</li> <li>・価値観が変わる・個人から共同体</li> </ul>	<p>【行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・復興地域づくりのために公共性をも つ施設をつくる(公共性)</li> <li>・勉強会を設ける(連携)</li> <li>・地域の情報共有(連携→自立)</li> </ul>

へ（自立・信頼→公共性）	
<b>【意識・行動・コミュニティ】</b> ・連携先と関係を重視・維持する （連携→信頼）	<b>【意識・行動・コミュニティ・状況】</b> ・地域を学びのフィールドとしてする（公共性）

この分類表から基づいて、以下、「入谷地区の住民の自主活動による災害復興地域づくり」における学びのプロセスの相互関係性の結果を図6として作成することができた。



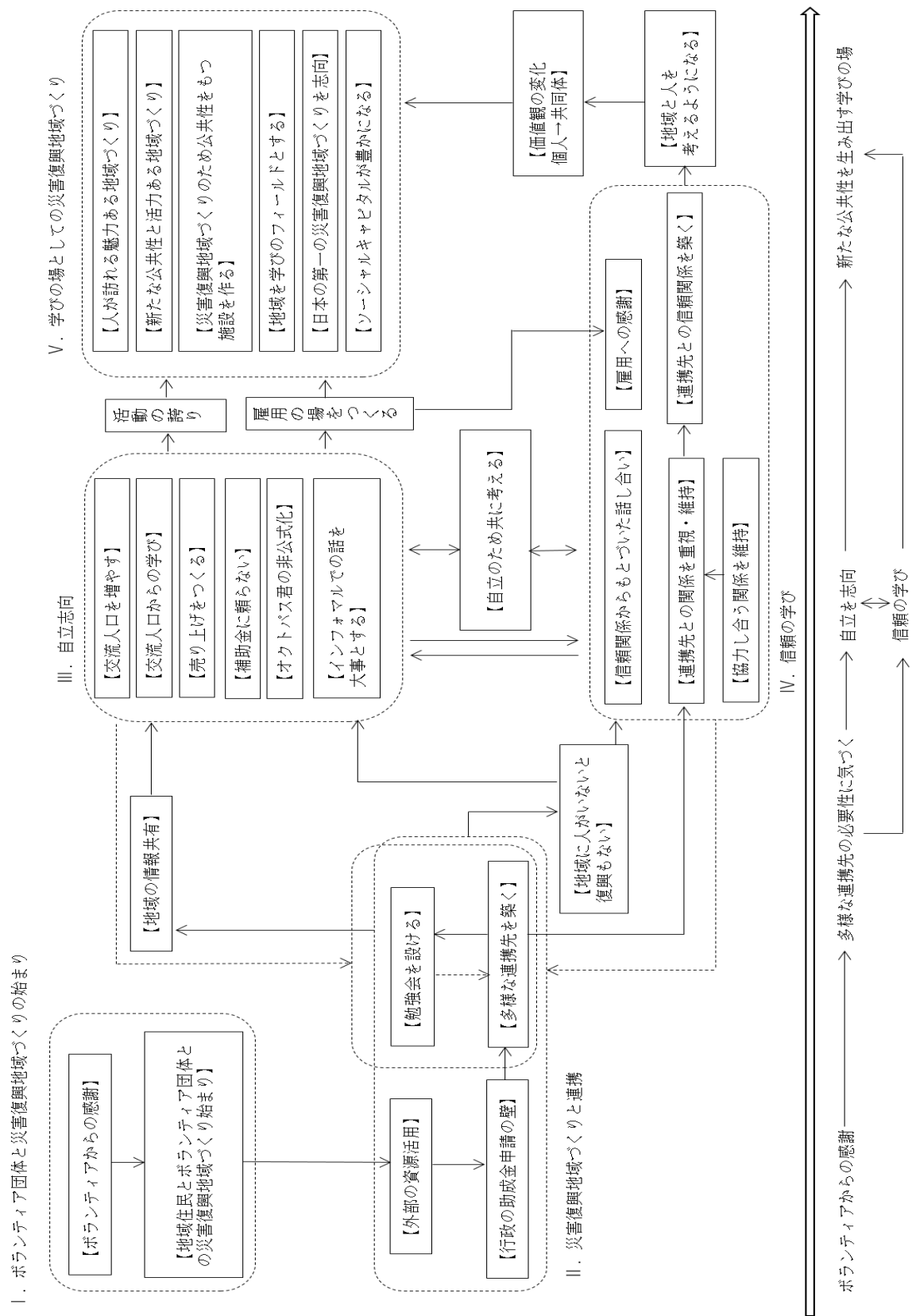


図 6 入谷地区の住民の「自主活動」と災害復興地域づくりにおける  
学びのプロセス

### 第3節 地域住民の「自主活動」と災害復興地域づくりにおける学びのプロセス

#### 1. ボランティア団体と災害復興地域づくりの始まり

##### 【ボランティアからの感謝】

被災地には個人でも団体でも多くの人びとが何らかの形としてボランティア活動をするため被災地に訪れる。被災地での人々はボランティアの人びとから大きな手伝いを貰い、助けてもらう。被災を受けた地域住民にとっては非常に感謝することである。しかし、その感謝の気持ちは被災地の住民のみではなく、ボランティアに参加している人びともそこで何かの気づきを通して感謝する気持ちを貰う。つまり、そこでの感謝の気持ちはボランティアの方からにも生じる。

入谷地区での本格的な災害復興地域づくりの契機となった00大学との支援も、実は、00大学からボランティア活動として訪れた学生さんたちの何らかの気づきからの成長により大学関係者の感謝の気持ちからである。

A：その、3日間ボランティア作業をする学生が、すっかり成長して帰るという姿をみて、え、「これは私らが4年かけても教えられないことがここ3日で学ばせてもらった」ということで、あの、感謝されたんですよ。

##### 【地域住民とボランティア団体との連携による事業のはじまり】

ボランティア活動を通して住民と同じく感謝の気持ちを貰い、その感謝の気持ちが被災地に積極的に関わる気持ちとして繋がりを、そこから、何らかの形としてさらに貢献したいという気持ちとなる。

その際、Aさんが震災する前に取り組んでいた地域のキャラクターのオクトパス君を以前購入したお客さんから渡されるのを

00 大学関係者が見たことから入谷地区における災害復興の地域づくりのための事業が始まった。

A：その、3日間ボランティア作業をする学生が、すっかり成長して帰るという姿をみて、え、「これは私らが4年かけても教えられないことがここ3日で学ばせてもらった」ということで、あの、感謝されたんですよ。それで最後の日にたまたま運よく俺が震災の前に作っていたオクトパス君を買ったお客さんが「Aさんこれ、Aさんが持ってた方が良さから」といって、届けに来たんですよ、それをみて、大学の関係者が「これなんですか」という話になって、「これね、震災の前の前ね、このアホなことやってたんですよ」といって、「じゃ、Aさんこれ復活させましょう」という話になったんですよ。

このように南三陸町入谷地区での災害復興の地域づくりが始まったキッカケは地域住民とボランティア団体である00大学との連携から始まった。

最初は00大学からの連携により災害復興地域づくりが始まったが、現在に至るまで住民の「自主活動」の取り組みがなかったら入谷地区での災害復興の地域づくりは続いていない。

では、その「自主活動」の具体的な様子はなにか、その「自主活動」から住民たちは何を学んだのか。その具体的な学びのプロセスとはなにか。

## 2. 災害復興地域づくりと連携

### 【外部の資源を活用する】

最初の入谷地区の住民たちが「自主活動」として狙ったのが災害復興地域づくりを展開するための外部の資源を活用することであった。その中で一つは国や県から出ている助成金を狙って計画書を書くことであった。被災地という地域状況もあるため、比

較的に受けやすかったと思うと語る。

A：あの、国、県の助成金なんかも狙って計画書、ま、NPO 団体なんかみんなやっていますよね、…ま、最初、、えーと一、ここ被災地なので、受けやすいつていうか、まーあったと思うんですよ（…）

計画書を書く段階で戦略的に考えたのが、他の地域との差を示すことであった。この差が入谷地区の災害復興地域づくりコミュニティの目指す方向とそのため大事な考え方を確立することとなる。

具体的に、少子高齢化、担い手の不足といった人口問題、地域の経済効果などはどこの地域も抱えている課題である。それと差をつけるために入谷地区では、震災の前には考えてないことに挑戦することである。それは、地域が目指す方向は「日本一の研修フィールドを目指す」ことであり、そのための大事な考え方として「縁と繋がり的大事」を確立したことである。このことを助成金の計画書に出せることを他の自治体との差として語る。

A：（…）だから、ちょっと中身としてはどうかなということもあるかもしれないけど、一通り話をすると、少子高齢化とか交流定住人口の拡大、後は、担い手の不足とかというのはどこの地方でも抱えている課題ですね。いわゆる人口問題ですよ。それと、産業のボランティア課というのは、雇用の場とか、地域に経済効果をもたらすという部分でよく一般的に言われていますよね。で、どこの全国、どこの自治体も同じ課題を考えを抱えて、定住促進、移住促進のPRを合戦をしますよね。で、ま、なんだろう、どこの地域でも工夫次第で、魅力ってあって、それをどう差別化して、PRしていくかという、見せていくかというのが非常に重要なんじゃないかなん思っているんですね。そゆうことを全体に言って、現在、チ

エさんが聞きたいことはこの取り組みを聞きたいようですけど、取り組みの状況はこのような状況で、震災前になかったことを震災で、こ縁で、繋がり的大事にして、あの、地域活動として、えー、貢献しているよということをまずその、それを訴えるですね、その仕組みができつつあるよということ、その中で、体育館をどう活用していくかということ、次のページからご説明があつて伝えるんですけど、ま、日本一の研修フィールドを目指すことですね。

ボランティア団体との連携による入谷地区での災害復興地域づくりの事業が始まったが、それとは別として自分たちで外部の資源を利用するため最初取り組んだのが県や国の助成金の申請である。このような助成金を申請するプロセスの中でコミュニティの活動の方向性や入谷地区での「自主活動」の考え方が確立された。

この外部の資源である県と国の助成金から自立の基盤を整えていく。その県と国の助成金は A さんを含めて住民たちが積極的に探したものである。

B: A とか、住民たちが頑張って探してくれて、国の事業かな、(…) それを申請してそれが採択されて動き出したのがちょうど 7 月くらいかな、

### 【行政の助成金申請の壁】

入谷地区では自分たちでの「自主活動」により災害復興地域づくりに取り組むために国や県の助成金の申請をし続けたが、そこには一つ大きな壁があった。それは、時期の問題である。行政の助成金の申請書は必ず 4 月から新しい応募が掲示され、採択されるのがその年の 6 月か 7 月となる。その間の 2-3 か月間の活動の時期の間では活動するための資源が開くことになる。

B:年度が変わって初めてそこで今度新しい事業が出てくるんですよ。そこに応募が始まって採択されるのが、6月か7月になるんで、だから、その、開くんですよ。それがなかなか難しくて。それで、12月1月くらいに来年度の事業とかが提示されて、3月くらいに採択されて4月からまたバトンタッチされてまわればいいんですけど、どうしても行政ってそうじゃなくて、4月になったら、新しい提案しますよ、応募してくださいね。採択が6月か7月ですよ。そんなことになるんです。

これは、入谷地区の災害復興地域づくりに取り組んでいる入谷地区の住民たちと行政が出す助成金のルールという権力関係としても見ることができるが、これに対して、入谷地区の住民たちはどのように乗り越えたのか。

### 【多様な連携先を築く】

【行政の助成金申請の壁】を入谷地区の住民たちは、他の連携先を積極的に確保することから自分たちの「自主活動」を持続させた。つまり、行政が出す助成金のルールを変えることもできない権力関係から、自分の活動をそのまま中止することでもなく、「自主活動」を持続するため多様な団体とも積極的に連携先を確保することに気付く。最初目を向いた連携先は企業である。

A: その部分を企業に着目して (…) 結果的には、あの、良かったのかなと思うんですね。

しかし、ここで多様な連携先を築くことは、災害復興地域づくりをするのに必要とされる資金の問題だけのみ視野にいられているわけではない。つまり、企業に目を向いても企業と連携を結んでも、最終的に自分たちの「自主活動」のコミュニティの方向性を目指すためには行政との連携を築くことは不可欠である。しかし、そこでは行政との連携することによって一緒に地域ブランド

を育てていくという行政との水平的な関係でいきたいという考え方がある。

I：行政と一緒にになって、地域ブランドを育て行く（…）

具体的な形としては、入谷地区住民の自主的な活動を発信することを行政の委託事業としている。この背景には、今の時代では、行政の仕事を民間に委託することが多い。行政の仕事を民間に委託することについての評価は様々であるが、ここで大事なのは、入谷地区の住民は行政が地域住民とシュリンクしていくこと、それに合わせて積極的に担っていくこと、それを財源とすることを意識して活動を展開していることである。

G：路線としてはですけど、行政もどんどんシュリンクしていくと思うんですね。今、うちでも、町が運営しているブログの業も委託していますけど、役場がやっていることでも、どんどん民間に出していくことが今後多くなっていると思うので。（それについて）ま、積極的に担っていて、それを財源とすることも、今後の路線としては多いだろうかなと思いますね。

### 【勉強会を設ける】

【多様な連携先を築く】ことに気づいた住民たちは、自主的に勉強会も設けている。そこでの学びは、どのようにすれば他の団体との連携ができるのか、自分たちの事業をさらに展開するためにはどうすればいいかという、企業系の勉強や接客、交流イベントなどの勉強会である。

D：勉強会とかもあるし、

イン：どのような勉強会ですか。

D：要は、企業系の勉強会とか、接客の勉強とか、やっぱどのようにグッツのデザインをするとか、いろんな、

## 多種多様な交流イベント、勉強会とか、

上にあげた勉強会がいわゆる入谷地区で「自主活動」が持続できるための事業に向けた勉強会であるが、その他に、住民と他の町民との勉強会も設けている。勉強会の様子としては、住民や連携先である観光協会の人等が集まって、地域の住民が講師になって入谷地区の地域について学ぶことである。

H: 住民、他の町民ともあります。割と小さい勉強会みたいなものって頻度多くやっている地域で。例えば明日もここいりやどを会場にして、いりやの里山の歴史文化、金が取れたとか繭で有名だったとかスレート屋根がどうだかっていうのを学ぶ勉強会を2時間がここであって。それも僕も出るし観光協会の人が出て、講師は地元もおじちゃんがやって、あとは地域のおばちゃんとかのちょっときてくれてるみたいなんだけど。少人数、10人行かないくらいの勉強会なんだけど、それがこの入谷地区の事を勉強する会っていうのだけでも12月1月2月3月と年度末まで4回やること決まったりして。それがいろんなところで各地であたりするので、そういうのを通してっていうのは大きいですね。

住民の「自主活動」による災害復興地域づくり活動を持続するために【多様な連携先を築く】ことと【勉強会を設ける】ことは「自主活動」における自立志向をさらに強まることと繋がる。さらに、連携先と勉強会を通して【地域の情報を共有する】ことと【外部の資源を活用する】ことから「自主活動」による災害復興地域づくりにおける自立志向が強まって行く。

### **【地域の情報を共有する】**

【地域の情報を共有する】という活動は、自分たちがしている活動を他の団体と共有することを指す。地域内でも勉強会をして



いるが、災害復興地域づくり活動をするのにそれは限定的であることを気づいたことからである。そのため、入谷地区外の町内単位での情報共有をしたり、全国単位での研修会に参加して情報共有したりしている。このような【地域の情報を共有する】ことの活動は、自分たちのスキルも高まっていくと語る。

H: あとは、町内での情報共有を頻繁にやっていて、それは個人的にはそこの方が意味ある活動に繋がってるかなって。研修センターと観光協会とかビジターセンターって戸倉にある海のビジターセンターっていう、いろいろそこも自然体験に特化した研修とか教育旅行を請け負っている所なんだけど、大体その三社で色々な情報共有、こういうのが上手く行ったこういうのが上手く行かなかったって言うのを含めて。ビジターセンターとは二週に1回定期的にスタッフ同士であって直接会って話をしていて、観光協会含めると月1回共有している。そこでのやりとりとかスキルをお互い高め合ってるようなイメージが近いかなっていう感じですね。

H: ひとつには、日本国内だとエコツーリズムの研修会とかグリーンツーリズムの研修会とかは年に何回もいろんなところで開催されていて。それ自体も一泊二日とか二泊三日とかで色んな地域の人が集まってうちではこういうやりかたしてるけど、そっちではどういう風にとか、うちでこういう風にしてくまくいったよっていう事例を共有し合ったりする場があたりするので、そういうのに参加をしたことはあるし。

### 3. 自立志向

自立志向とは、様々なつながりを大事にするようになり、その繋がりと補助金を受けているうちに自分たちで災害復興地域づ

くりのための基盤をつくり、自立を向けて取り組むようになることである。つまり、被災地ということで様々な繋がりや補助金を受けやすいという状況もあるためであるが、単に受けるだけで終わるのではなく、その受けているうちにコミュニティが将来に自立するための体制をつくらなければならないという意識があるからである。

A: この繋がりあるうちに基盤をつくり徐々にその基盤をできつつあるなというところがありますね。(…) おそらく山とか海とかグリーンツアリズムとかどこの自治体も頑張っていますね。たまたま南三陸は被災地で有名になったから、他の自治体よりも恵まれているんですよ。それをいつまでもあぐらをかえて大変なことになると思っていて、やはり、震災なしで勝負しなければならないと思うんですよ。体制づくりはね。

このコミュニティの自立を向けた体制づくりに取り組んでいる入谷地区の「自主活動」の姿をみて I ターンを決めた G さんは以下のように語っている。

G: 実は僕がそれに引っかけて南三陸に来たんですが、津波でさらに少子化になって衰退しているところに、そこに残る人、動けない人がいるわけですね。その人たちがこの地域を何とかしなければならない、って言って、頑張って、自分たちで戦略して、いろんな人や企業と連携しながら地域をなんとか起こしたいという姿が見えたので、ま、これが将来の地域づくりに必要な要素じゃないかなと思いました。

つまり、将来の地域づくりに必要な要素とは、「自立志向」であると意識しながら「自主活動」を展開している。

では、具体的に「自立志向」の意識や行動とはどのような様相

であるのか、また、「自立志向」をすることにより、入谷地区での災害復興地域づくりに取り組んでいるコミュニティはどのように変わり、それによってどのように地域の状況が変わったのか。

### 【交流人口を増やす】

自立のためにまず【交流人口を増やすこと】を考えるようになる。これは、自立的に災害復興地域づくりをするためには、外部の人に知ってもらわないという意識からである。この外部の人が自分たちの活動に興味を持つことは、災害復興地域づくりのための資金を稼ぐこともあるが、それより大事なのは地域を存続していくためである。つまり、今の危機を越えてコミュニティと地域の状況を変え、新たな形として存続していくことこそ、今まで頂いたご支援の恩返しするためであると考えている。

E: 目的としては、大きく南三陸町を元気に明るくするための活動として、主に、オクトパス君の着ぐるみですね、こちらの方でやっています。また、具体的に言えば、交流人口増加のためにですね、なんか、やっぱ、交流人口がまず欲しいなということで、外部の人に知って貰はないと分からないので、そうやってやっていますね。本当に現実てきな事を言えば、稼ぐために頑張っていますが、存続していくためには、なんで、今まで頂いた恩を返しながらっていいですか、最初にご支援いただいているので、そのご支援いただいたものを、ま、恩返しをしつつですね、はい、仕事いま頑張っているところですね。

E: 単純にもの食べておいしかったね、楽しかったねって言って帰ってもらえればそれが一番良い、復興かなと思いますね。

交流人口を増やしながら地域を変えたいという意識は、今は入谷地区における災害復興地域づくりに「自主活動」を行っている住民たちの共通認識である。つまり、自分たちでは地域を変える

ことの限界を認識していることでもあり、それが、自分たちができるものとして認識している。この【交流人口を増やす】ことを通して入谷地区のみではなく、南三陸町全体を盛り上げたいと語っている。

イン：そこで自分でできるものは何だと思うんですか？

I：やはり、生間を増やすことだね、一人、二人だけではできないから、ま、町全体のね。

イン：増やししながら地域を変えたい

I：そうそう。入谷もそうだけど、まち全体を盛り上げたい。

イン：なるほど、交流人口を通してまちを盛り上げたい？

I：そう。

### 【交流人口からの学び】

自立のために交流人口を増やししながら地域を変えていきたいという気持ちから災害復興地域づくりに自主的に取り組んでいるが、【交流人口を増やす】プロセスから地域の住民たちも交流人口から色々なことを学ぶ。

その中で一つは、自分たちの地域と自分たちが取り組んでいる活動の魅力さに気づかされることであり、それは「価値」として捉えている。つまり、自分たちには映らなかったら、気づくことが出来なかった自分たちの「自主活動」と地域を変化、魅力について気づかされることは、交流人口を通してであるという。

B：ここに生まれた人にとってはここが魅力的に映らないですけれども、その、都会からくる様々ボランティアさんとか、ものすごい、その、憧れの職業にも映るんですよね。それを、我々がやってることに対してもう少しだから、農業っていうものが身近で親しみやすいっていうんですかね。そのようになっていくべきなんだろうなというのはありますよね。そんなことに改めて気づかさ

れたというが、このような活動を通して、皆さんと話を  
していて思うことなんですよ。

Y: 私も、ここに入って地元について興味や分かるように  
なりましたね。

イン: それは、やはり交流人口を通して

E: そうですね、やはり、自分たちのだけでは、なかなか、  
ま、決して駄目だとは思ってないですけど、そこまで、  
その、ま、別の見方からの価値が出るかなと正直思った  
なかったことなので、角度をかえれば見える方がすごく  
価値があるのだろうかと、交流人口のおかげですね。  
地元だけではなかなか、気づけないところかなと思います。

自分たちが取り組んでいる活動が魅力的なことの気づきを端的にみせているのが、地域の変化である。例えば、昔はいなかったIタンの人が増えたことである。被災地には人口が減っているにも関わらず災害復興地域づくりを住民の「自主活動」として取り組んでいることに魅力を感じてIタンする人が増えたことは、地域住民たちにも自分たちの活動と地域の魅力を気づかされてもらう。

E: 被災後さらに人が減ったんですけど、このいいところ、  
地元の気づかない良いところを外の方々っていうと  
あれなんですけど、Iタンってふうに呼ばれる方々が  
いっぱい来ていただいて、その方々に刺激を頂いて、それ  
で気づくのも恥ずかしい話ですが、まちの良いところを  
すごく気づかされたなと思いましね。

二つ目は、地域の魅力を交流人口から学び、気づかされるということから地域の人びとの関係もみえると語る。つまり、自分た

ちは当たり前の地域の人びとの関係は、外から見たら活動に取り組んでいる地域の人びとの関係がしっかりできていることである。

E: その魅力の中で地域の人々の関係も見える(…) 人間関係とか、ま、外から見たら地域関係がしっかりできているんだなということだったので、それがすごくいいところの一つかなと思います。

入谷地区では「自主活動」の災害復興地域づくりが始まってから現在まで交流人口は約3千人訪問しているという。このような田舎で、多くの交流人口ができているのは幸せとして住民たちは感じている。このように多くの交流人口が増えることは、そこには単に訪問することではなく、研修会や懇談会、お話する機会をいっぱい設けることから【交流人口からの学び】があるからである。

H: 学んだことはすごいいっぱいあるんですよ。こんな田舎で、今年度の実績出してないですけど多分研修で三千人くらい来てるはずなんです。こんな田舎でその人数と関わることだけでも幸せだなと思っていて。色んな人がいていろんな価値観を持って、プロフィールがあり今まで活躍してきたようなそれぞれのスキルがあって。この南三陸にいながらにして出会えるっていうのだけでも素晴らしいことだなんておもっていて。色んな人と話すのがとても好きなので、研修をしてても、研修中に学ぶことよりも懇親会してる時にお客さんと話してる方が学びになることが多いかな。

### 【売り上げをつくる】

自立を向けた行動の一つとして【売り上げをつくる】ことがある。これは、単に利益を上げて儲けることなく、地域の存続

と自分たちの活動を維持、継続し貢献するための売り上げづくりである。いわゆる、共同資源（Commons）を構築するための【売り上げをつくる】ことである。つまり、コミュニティが目指す方向である「地域全体を日本一の研修フィールドを目指す」ための共同資源（Commons）の構築として【売り上げをつくる】ことである。

イン：売り上げる作る理由は、これを維持したいとかですか？ただ儲けたくて？

D：維持ですね。いちゃうと、儲けないと、この活動は続けられないですね。究極的に、

イン：地域の復興とかのも貢献という面も含めて

D：はいはい。いろんな活動とかにも参加してして

この【売り上げをつくる】という行動と意識は、単に儲かるということではないのは、以下の語りからも分かる。つまり、住民たちの「自主活動」による災害復興地域づくりを通して「新しいスタイルの公共を目指している」ことである。この意識と行動から、コミュニティや地域の状況も変化していくことが分かる。

A：どちらかというと、我々は NPO 活動に近い活動をしているんだね、我々は、その中に自主事業を盛り込んでいくというやり方ですね。だから、新しいスタイルの公共みたいなを目指していますよね。

### 【補助金に頼らない】

【補助金に頼らない】ということは、最初活動を始める頃には助成金といった補助金に頼って基盤づくりをしていたが、今日に至っては国や県からのソフト面としての助成金がどんどん減っている状況である。

A：いろんな助成金なんか活用しながらやってきたことは

やってきたんだけど、ここへきてあまりその、ソフト面の助成金ってないじゃないですか、どんどん減っているし、

その現実的な状況から【補助金に頼らない】ことを意識しながら「自主活動」を展開している。

E:そうですね。でも、今はずっと続いている補助金はないですね。その、つどつどですね。いい物があればということですか、(…)その緊急雇用が切れた後は、ずっと継続的に頂くのは基本的はないです。(…)えーと、復興とは何ですかね。やっぱり、地域住民が外から頼らずに全部賄えるのが一番いいかなと思うんですけども、(…)ま、もちろん人は来て頂いて、ま、それこそね、補助金とかも使わなくても活動の維持ができるような、そのような団体になっていければと思いますね。

### 【オクトパス君の非公式化】

入谷地区の災害復興地域づくりのため力を入れているのが「オクトパス君」である。「オクトパス君」というキャラクターを通して外部に南三陸を知らせるのに有用に活用できている。

南三陸町に訪問すると、町中に「オクトパス君」のキャラクターを良く目にすることができる。特に、南三陸町の沿岸部は今でもハード面としての工事が活発にされている。その工事現場にも「オクトパス君」が張られている。ここから「オクトパス君」は地域の代表的なキャラクターとして認識されている。

イン：車で南三陸案内してもらったんですけど、いろんなところでオクトパス君がいろんなところにあって、南三陸の代表的なキャラクターだなと思いました。

E:そうですね。工事現場、直接まちにある大きな建設会社さんの方からも、使っていいとか、して使っていただ



いたり、そもそもですね、工事の看板とかつくるところでも、使ってもいいですかと声を掛けてもらったりですね。

しかし、「オクトパス君」は南三陸町の公式的なキャラクターではない。その理由として、行政の公式のキャラクターにすると、行政との関係は水平的な関係になるためである。それを端的に見せている部分が「行政のキャラクターさんになったら、冒険ができない」「行政のいい面であり、悪い面でもある」「逆に非公式の方がありがたい」の語りから読み取れる。つまり、行政も町を復興するためにはキャラクターを活用した方が有用であることを認識しているため、入谷地区のコミュニティは行政との関係を水平的な関係として維持するために【オクトパス君の非公式化】の戦略をとっている。

D: やっぱ、行政のキャラクタさんになったら、冒険ができないというか、結構きっちり決まった範囲で、行政のいい面であり、悪い面でもあるんですが、そこが、譲りが聞かないのが個人的にいやなので、好き勝手できるからこそ、このゆるいことが作れる。逆に非公式の方がありがたいですね。

D: 今、昨年度だと、60 何回の出場依頼がありましたね、周 1 や 2 くらいでというペースの出場だったので、年々そのような依頼が増えていますね。ま、要は、PR イベントで、キャラクタとして認知される、役場とか、観光協会さんのイベントにも呼ばれるようになっているので、地元の PR とか復興にもつながるという活動であるのは間違いないですね。

ここから行政の役割についても考察することができる。「オクトパス君」は南三陸町を外部に PR するため取り組んでいる。しかし、語りから覗えるように、「オクトパス君」が町の公式的な

キャラクターではなくても、行政は関心や興味を持ち、入谷地区の住民たちと「オクトパス君」を通してまちのPRをしたいと話かけ、連携を結びながら共に災害復興地域づくりを目指して取り組んでいる姿が見えた。そこから、お互いにできることを支援しながら共に災害復興地域づくりに取り組む協働のプロセスをしていくのが、今回の事例から行政の役割として考察してみることができる。

【オクトパス君の非公式化】をするのは、オクトパス君は入谷地区の災害復興地域づくりに取り組んでいる「自主活動」のコミュニティのキャラクターであるが、地域の工事現場とか、他のところで使うときにはお金や利益が発生していない限り無料で使わせてもらっている。入谷地区の地域住民の「自主活動」によるキャラクターを通した災害復興づくりと連携である。

D: 外で使っていただくときに、お金が発生しない、利益につながっていないのであれば、どんどん無料で使っていただいていますね。

つまり、キャラクターを公式化すると自分たちに好きなようにできない。公式化にするとむしろ権力関係で支配されることになる。そのためわざと協力し合う関係を維持し公式化を求めない非公式化にした方が行政との関係としても水平的な関係を維持でき、自由にできるため、オクトパス君を非公式化している。

### 【インフォーマルな話し合いを大事にする】

「自主活動」の災害復興の地域づくりを展開する上で、自立を志向するようになった大きなきっかけは【インフォーマルな話し合いを大事にする】ことであった。つまり、「自主活動」により災害復興地域づくり活動に取り組み、コミュニティが目指すのが住民の「自主活動」を通した地域の新たな公共性を生み出すことであった。そこには現実的な状況からいえば「資金」や「資源」は不可欠な要素である。その「資金」や「資源」を確保するのに

難しくなって、活動を持続するのに難しい状況になった場合、それ乗り越えたのが「自主活動」に参加している参加者たちのインフォーマル場面での話し合いであった。

イン：3年間の緊急雇用が切れても続けたのが…

E：そうですね。多少は無理だったんですが、若干大変ではあったんですが、何度か続けていけるのかなというのもありました。だから、ま、それをきに、少し、ま、働き方とかももう一度見直しして、時間の方も、何時から何時までをしっかりと考えたりとか、ただただじゃないですけど、最初からみなん、こう、自分がこうしたという経験を話しながら作業をしていたので、若干手が止まる、仕事ちょっとできずに、話だけに集中してしまって、作業しない時もたまにあるんですけども、そのようなものですね。ま、当たり前なんですけど、しっかい見直して、自覚をもって、仕事をしようということで、みんな意識変わったかなと思うんです。

自分たちの活動に大きな壁ができるとき、仕事を少し休ませても、この【インフォーマルな話し合いを大事にする】ことが、自立のための意識を変革させるのに大きな要素として挙げられる。

### 【地域に人がいないと復興もない】

ここで確認した「3. 自立志向」と、次に確認する「4. 信頼の学び」はインタビューの分析の結果、「地域に人がいないと復興もない」という意識から支えてられていた。

災害復興地域づくりといっても人がいないと地域自体が存続できない。つまり、地域に人がいないと復興もないという考え方に「自主活動」に参加している参加者たちは気づいていた。このような共通の意識のもとで「自立志向」と、「信頼の学び」として活動が展開されている。

E: 震災で人が離れてしまったので、人を呼び戻すための拠点となつてばいいなとおもって、活動してますね。やっぱり、人がいなと復興っていてもなかなか難しいところもあるので、ま、まちの復興、ま、もとのまちに戻ってもいいんですけど、どちらだったら、もとのまちより住みやすい、生活しやすいまちに戻る、というのを目標としているのか、と思います。

### 【自立のため共に考える】

「自立志向」に変革したのは、普段の「自主活動」に参加のプロセスのなかで、「自立のために自分たちが出来るのはなにか」、「自立するためにはどうすればいいか」といった共に考えているプロセスがあったからである。

B: 国からの緊急雇用対策をいただいている間に自分たちが自立あるいはこの地域が自立するためになにができるのかということを皆と一所懸命考えたんですよ。

イン: 一人でやっていて、震災があつて、それで、緊急雇用の受け皿、それで事業の展開。その緊急雇用の話はどこからの情報でしたか。

B: ま、一緒に当時にね、やってたんですよ。

以上、「3. 自立志向」では、災害復興地域づくりの住民の「自主活動」における「自立志向」がどのように形成されるのかを確認した。

「自主活動」の「自立志向」は、「自主活動」に参加している参加者たちとの【自立のため共に考える】ことを通して危機を乗り越え、コミュニティの方向性は戦略等を決めていた。つまり、【自立のため共に考える】ことは、「自主活動」の「自立志向」する上で大きな意義をもっている。この【自立のため共に考える】ことは次にみる「4. 信頼の学び」へも相互影響し合っている。

## 4. 信頼の学び

「信頼の学び」はどのような「意識や行動」「コミュニティ」「状況」の変革から構成されているのか。「信頼の学び」はどのような要素と関係し合っているのか。

### 【信頼関係から基づいた話し合い】

【信頼関係から基づいた話し合い】とは、コミュニティの構成員がお互いにそれぞれ言いたいことは話し合い、それを重ねることを指す。ここで大事なものは、ここでの関係は一方的に指示することでもなく、一方的でもないことである。このような関係は「自立志向」と「信頼の学び」の大きな要素であることが分かる。

F：地元の方でフラットな感じの職場なので、人間関係が、それなので、それぞれに言いたいこといいながら、いろいろ物を作っていくにしてもなにしても、話し合いを重ねている形なので、一方的というのはいらないですね。

入谷地区の住民の「自主活動」による災害復興地域づくり活動は、キーパーソンであるAさんが中心となっている。しかし、ここで注目したいのが、Aさんが一人でしたことでもなく、Aさんが皆に指示をしたことでもない。何かあったらみんなと話をする機会を設ける。つまり、横のつながりを大事にしている。ここから【信頼関係から基づいた話し合い】ということが読み取れる。

イン：やはりAさん一人で決まってというより、やはり住民のみんなに声かけて、どう思う？と一緒に話をして決めたと

B：そうそう。そうです。これがやはり一番大きいかなと思いますね。(…) お互いに声かけあって、大学のお金でも、ま、本当にここはできるのか、最初は難しいなと思

ったんですよ、みんなと話をしたときに、  
イン：難しいということは

B:本当にできるの？億のお金かかるし、土地要件もあって、本当にできるのという感じがあったんですよ。ま、そこひたすら頑張ったのがA、ま、そこで我々は相談とかお話ししたり、東京にもいったし（…）しょっちゅう来ていていろんな話をしています、（…）いろんな話をし、つねに連絡をとって、コミュニケーションをしていたんですね、

B:で、あの、考えることができたのは何人かいたんですよ。我々を含めてAが最先端、中心になって人間ですけども、そゆう、そして、個人の考え、まずはその、ボランティアさんでも企業さんでもまずはそのこの人っていう、その接点がある人に話をもっていきますよね。で、そこからその人のものとせずに、00したっていうか、例えばAがいろんな企業、いろんな人の声を聴いてどうしようかなと思ってもわれわれがその相談に乗ってるっていうかそんなことができた。じゃ、それいいんじゃないか、やりましようかっていう感じになって、横のこのまちの繋がりが非常にこう濃い、それが一番大きな要因ではないかなと思います。

### 【連携先との関係を大事にし、維持する】

「信頼の学び」では、一緒に「自主活動」する仲間たちの関係の信頼以外にも連携先との信頼関係も大事にしている。つまり、入谷地区の住民たちは自分たちで災害復興地域づくり活動を展開しているうちに、「多様な連携先を築く」ことになるが、その関係は「一緒にやっていくこと」として捉え、そこから自分たちではやっていくことが難しいことに気づくことである。

D：やっぱり、この6年、7年経つうちに、やっぱり、こう、一つの団体だけでは、そのまちの魅力とかPRが難しいなとすごく感じて、やっぱ、他役場であったり、他の企業様だったりして、連携をとっていくようなことが必要なんだな、と、そのPRをするという意味でも、その、グッツとかもどんどんPRする上でも、他の方々と一緒にやっていくことが結構大事なのかもしれないと最近結構強く思っていますね。

自立に向けた災害復興地域づくりは、住民がどのように関わったのか、そこにいかに自主的に参加・活動しているのかは大事である。しかし、それは住民だけでは自立に向けた持続的な活動の限界がある。その意味で、他の団体との連携は不可欠であり、大事である。そこから、「自主活動」をする仲間たちとの「信頼の学び」以外にも災害復興地域づくりを共にやっていく連携先とも信頼関係が大事であることに気づく。

【連携先との関係を大事にし、維持する】ということは連携先との関係を重視し維持するために取り組んでいることであり、協力し合う関係として捉えていることである。

### 【協力し合う関係を維持する】

連携先との信頼関係は、一方的に支援を貰う事ではなくてお互いにできることを協力し合って関係を維持することである。例えば、行政や観光協会のイベントに入谷地区の住民たちが取り組んでいる活動を活かしてお互いに【協力し合う関係を維持する】ことである。

D：今、昨年度だと、60何回の出場依頼がありましたね、周1や2くらいでというペースの出場だったので、年々そのような依頼が増えていますね。ま、要は、PRイベントで、キャラクタとして認知される、役場とか、観光協会さんのイベントにも呼ばれるようになっている

ので、地元の PR とか復興にもつながるという活動であるのは間違いないですね。

この協力し合う関係で一番大事としているのが、一方的に支持することもなく、使途通りに従う事でもないことである。

イン：なんか葛藤とかは生じたことないですか？外と連携するプロセスのなかとかで、

D：そうですね、ま、どうだろう、ううん、、、そんなに、、葛藤とかあまりなかったですね。なんか一方的な指示とかもないので、

イン：今の話聞いて疑問になったところですが、いろんな資源とか支援をもらったことで、一応成り立たことは事実かなと思うんですが、その資金を貰ったことをどうやって使うのかということは、あの、支援してくれた大学とか企業とかが、このようにやってくださいとかの使途が指定されたのかそれではなくて、阿部さんたちが自分たちで話し合って決めたのか。

A：そいつはね、半分半分だね、一方的なことはないね。

このように連携先との関係を重視し維持する、協力し合い関係の大事さを分かるようになったことであるが、このようなプロセスから「連携先との信頼関係を築く」ことになる。

### 【連携先と信頼関係を築く】

連携先との信頼関係ができたことの一つの例として挙げられたのが大学からの支援金を貰ったものを災害復興地域づくりとして活動をしながらか得られた利益からすぐ返すことにより信頼関係が築かれたと語る。

A：1週間後にね、資金、復興させるため出資金、ま、500



万もらったんですよ（…）ま、そうゆう出会いがあって、  
500万円は利益得たときにお返しして、

イン：お返ししたんですか？

A：うん、すぐ返した。そのようにお付き合いしたときに  
大学に信用ができたんだと思うんです

また、連携した人たちと持続的な関係を維持し、その信頼関係から何回も入谷地区に訪問して交流している企業もある。

D：実際今日後で来る方々も YES 工房で交流、体験されて帰るんですけど、その活動を通じてご縁ができて、今回この方々は5～6回くらい来ていますね。建設関連の会社の方々なんですけど。中での交流も当然ありますし、

このような語りと連携先との関係を大事にしていることから  
【連携先と信頼関係を築く】ことになることが分かる。

### 【雇用の場をつくる】

入谷地区の住民たちは自主的な活動から災害復興地域づくりに取り組んでいる。入谷地区の住民たちは災害を受ける前と同じような状態として戻るため活動をしているわけではなく、以前とは異なる地域をつくることとして自主的に災害復興地域づくりに取り組んでいる。新たな地域としてつくっていくため、活動を持続するため自主的に事業活動も展開している。その事業活動の利益から活動を持続しているが、その得られた利益は新たな公共性として、地域のために使っている。その中で一つが、震災で仕事を失った人たちの【雇用の場をつくる】ことである。

災害を受けた地域でそれも被災を受けた住民たちが自分たちで【雇用の場をつくる】ことは大きな意義を持っているといえる。地域住民たちは、被災地で自分たちで地域を活性化するため新たな雇用の場をつくって拡大することを自分たちの手で地域を存続させることであり、新たな公共性を生む活動として捉えている。

A：それがね、マスコミさんからも受けて、あの、結構売れたんですよ。ガンガン毎日ほど来たし、うんで、いい例が、オクトパス君うちの店にも置かせてくださいって、要は、殿様商売やったんですよ。だけど、そのころは何も長く続けようという気持ちがないのであまり利益あげないで、トントんと回したんですけど、何万個も売れて、通算9万個くらい売ってたんですけど、年間多いと8千万くらい売り上げあった。だから、それでその資金にそのキャラクター化を強めて、そして、雇用拡大ですね。

B：南三陸町内、町内に住んでて、震災で仕事をなくした人ですね。働く場がなくなった人、その人に仕事の場を提供するために

災害のレジリエンスを高めるということは、地域の存続が前提である。破壊された地域に誰も住んでない状態になること、つまり、地域が存続できてない状態になってしまえば、住民の自主的なレジリエンスも存在しない。そのため、地域を存続するための「自主活動」による【雇用の場をつくる】ことは大きな意義をもっている。

### 【雇用への感謝】

入谷地区での災害復興地域づくりのための事業と活動では、震災から仕事を失った人たちの仕事の場をつくる活動もしている。実際、震災当時仕事を失って雇われた人たちは困難を抱えた人たとも何人かいる。

具体的にどのように困難を抱えた人であったのか。インタビューでは2人いたが、2人とも津波で仕事を流された人であった。その中で一人は年のせいで仕事をみつからない人であった。もう一人は、体調の崩し仕事があまりできない体調であった。2人とも新しい仕事を探すのに年齢もあったせいでなかなか仕事を見

つからず収入がなくて困っていた。その人たちを先に雇うことにより感謝の気持ちとそこから信頼性が築かれた。

イン：じゃ、ここはいつから働いたんですか？

C：7月1日から。そのとき、決まって、ありがたかったんです。やっぱり、ね、嬉しかったよ。何もないんだもん。助かった、ありがたいと思った。仕事なくして、普通の会社は年も年だし、（…）探しましたよ。探したの探したの。でも、ここにはないのよ。南三陸には。気仙沼まで探しに行ったのよ。でも、歳も歳だし

イン：印刷屋さんは流されましたか？

F：はい。そうです。その時私はそこで働いていましたが、津波がくることで、（…略）震災後に会社がなくなったんですが、その後、体調を崩しました、、Aから誘われてここにきています。

イン：ここに働くようになって、その時の気分はどうでしたか。感情っていうか。

F：新しい仕事見つかったことで本当にホットしたし、後、この職場の雰囲気も良かったので、なかなか面白そうな工房だなと思いながら私にとって、本当に心地よい職場ですね。

最後の職場になるか分からないけど、今のところ最後たどり着いたところとしては、良いところたどり着いたという感じですね。

イン：助けてもらったという感じもしますか？

F：そうですね。拾ってもらったという感じですね。

このように災害から仕事を失って困っている人に雇用の場を

提供することにより、感謝の気持ちを感じる。そこから「信頼の学び」が芽生えることが分かる。この語りから「自主活動」が展開している事業が単に利益をあげる活動ではなく、新たな公共性と価値を追求していることを端的に表している。

## 5. 学びの場としての災害復興地域づくり

今まで災害復興地域づくりに取り組んでいる南三陸町入谷地区での住民の「自主活動」への参加における学びのプロセスを分析してきた。では、入谷地区での災害復興地域づくりは現在どのような姿であるのか。災害復興地域づくりにおける入谷地区の住民たちの自主的な活動が目指すのは「学びの場としての災害復興地域づくり」である。

災害復興地域づくりを「学びの場」として捉えていることは、今まで確認したようにそこには「自主活動」へ参加している住民たちの意識や行動の変革、コミュニティと地域の状況の変革から今まで至っている。その「変革」を本研究では「自主活動」における学びとして捉えていた。以下では、具体的にどのような要素から「学びの場としての災害復興地域づくり」として捉えるようになったのか、その関係要素と構成要素のカテゴリーを分析する。

### 【活動の誇り】

【活動の誇り】は、自分たちがやっている活動を通して地域が変わったことに対する誇りである。活動する前はあまり若い人が集まらない地域であったが、自分たちの手で災害復興地域づくりに取り組むことで若い人がいっぱい来ることに活動の対する誇りである。しかし、この【活動の誇り】は、単に地域に若い人がいっぱい来ることだけの誇りではない。以下の語りからも確認できるように、地域の変化とともに、これから社会を担っていく若い人たちが少しでも南三陸で何かを学んだり感じたことがあれば、それは南三陸が今まで受けていた支援に恩返しすることとして捉えている。

G: やっぱ若い人たちがこゆう場所に来るのはすごく意義があると思うんですね。その人たちが別に移住しなくてもいいんですけど、今後日本のいろんなところで、これからの社会をつくっていくことの担い手になっていくっていうのであれば、南三陸が日本中のいろんな人から支援を受けて、助けてもらったことで恩返すことができるじゃないか。

### **【地域と人のために考えるようになる】**

震災後、災害地域づくりの「自主活動」に参加することによって大きく学んだことは価値観の変化である。つまり、その価値観の変化というのは、「自主活動」を通して個人より、**【地域と人を考えるようになる】** ことである。

A: 活動しながら、、やはり、世のため、地域のため、人のために考えるようになって、そこがちょっと変わっていることかな。

### **【価値観の変化：個人から共同体へ】**

「自主活動」へ参加してから生じた価値観の変化は**【個人から共同体へ】**へ繋がるのが分かった。「自主活動」に参加することによって、自分の人生が変わり、自分の価値観も変わったと語る。具体的に参加することによって自分がこのまちに、「自主活動」の組織になにができるのかを考えるようになり、それは、このまちの人びとのそれぞれの役割をみてから感じたという。つまり、住民たちが、自分の役割がこの共同体のためで役割を果たしている姿から自分の価値観が変わったことである。「自主活動」に参加を通じた価値観の変化である。

G: 私自身も大学卒業してすぐのタイミングでここでいろんな人と出会って、それこそ、人生が変わったというか、

ね、ここにきてなかったらこのような仕事もしないとおもうので、価値観も変わったし、人生も変わったと思うので、(…略)

イン：ここに関わることで価値観が変わったといましたが、前と今と比べると変わったことは具体的に、

G：大学時代って、それこそ就職活動について学んでも、自分がなにがしたいんだ、自分はこれが強みで、だからこのような会社に勤めてこの仕事するとか、自分はこのような人生を歩みたいから、こゆう会社でこゆう力を身に着けるとか、自分は何だろうという自分を考えさせると思うんですよ。今の日本の大学、大学生、就職活動する人たちは。私もそれが大事なんだろうかなと思ったんですが、こっちに来ると、えーと、それは個人のおもいというのはそれほど大事ではないんじゃないかなと思ひ始めて、それより、もう、その、社会っていうものの一つのピースとし自分はなにができるのか、その、集落とか共同体とか或いは、この組織とかっていうもののうちの一人として自分がなにができるのかっていうの方が大事なのかなと段々思ひ始めてきて、本当に自分がやりたいことっていうのは、そう思っても、できない、ことだって多いし、そんなに大事ではないと思ひて、で、別に、会社のピースとか歯車って悪い意味で言われるじゃないですか。でも、このまちにいと、本当に、高齢者たちも役割があって、なんだろう、一人ひとりの担っているものが大きい、見えやすいですね。たぶん東京にいたて、大阪にいたて、一人ひとり大事な役割をしているはずなんだけど、どこか、置き換え可能な歯車のように思えてしまうのが、なんか、こゆう小さなコミュニティー、みんなが家族や親戚みたいなコミュニティーの中にと、本当にこの人がいるからできるみたいなことって、すごく多いんだなと気づかされて、なんだろう、そうやって自分がいることで、何かが上手くいくとか、動

いていくとかっていうことの方が大事だなんて、思うようになったことが大きな価値観の転換かなとおもいますね。

「本当にこの人がいるからできるみたいなことって、すごく多いんだなと気づかされて」という語りから、状況的学習論の視点からいうと、価値観の変化というのは自分の頭の中からの省察を通した生じるプロセスではなく、参加として生じるプロセスであることが分かる。

### 【人が訪れる魅力ある地域づくり】

入谷地区の住民たちは様々な連携を自主的に結びながら自立と信頼の学びから、自分たちの意識や行動の変革、コミュニティの方向性や地域の状況が変革しながら現在まで至っている。

主に地域を存続するために利益事業をしているが、このように災害復興地域づくりにおける利益をあげる活動への展開は【人が訪れる魅力ある地域づくり】と【新たな公共性と活力ある地域づくり】を志向していることである。

具体的に、震災後、地域の経済と雇用を促進するためにいろいろ地域の中で事業を展開しているが、それは、ただお金を稼ぐというより、人びとが継続に訪れる魅力ある地域づくりとしてつくったため、地域の新しい経済事業はあくまでも、【人が訪れる魅力ある地域づくり】としての手段として認識している。つまり、お金を稼ぎ利益のみ追求することではなく、入谷地区での自主的な災害復興地域づくりは、人との繋がりを大事にし、経済より魅力がある地域づくりを志向することになる。

このように考えるようになったのは、震災前には考えなかったと語る。つまり、震災後「自主活動」への参加を深めるプロセスからできた考え方であるといえる。

A：結局ね、たまたま、あの、縁があって、このような事業を始めてしまったじゃないですか。そこは、23名以

上かな、働いているじゃないですか。その人たちの仕事を継続するためには、あの、努力しなければならないですけど、努力する中で、いろんな戦略があるじゃないですか、例えば、宿泊施設だから、風呂が大きい方がよいよねとかの施設を充実したり、ネットの企画商品を出してするとか方法あるじゃないですか。だけど、私は、南三陸、あるいは、入谷地区に魅力ないと人來ないじゃないですか。(…)事業というのは利益を上げるためにするのが当たり前だけど、私は、お金というのは、物を繋ぐため、あるいは、解決するため、成し遂げるために利用する道具だとおもうんですよ。それって、震災後に感じたことで、ま、方法として、事業活動して社会に貢献するのが理想ですし、事業をやって、その主益を社会に還元することが理想だけど、その考え方でやりたいけど、それができないステージじゃないですか、田舎だし、なので、その仕組み、面白そうな地域づくりですね。

A：やっぱり、完璧だとね、一回これば、来なくてもいいと思うんですよ、つねに変わっている、動いている、生きている、地域がですよ、あるいは、可能性を感じるとかという地域じゃないと、2度も来ないと思うんですよ。そゆう、ことを感じさせるのが、そこに住む人だと思うので、そこはチャレンジ、いろいろやってみないと分からないことですけど、そんな展開ですね。

イン：じゃ、やはりBさんも、Aさんのようにこの地域を何とかしたいという気持ちでやってたんですね。

B：そうです。そゆものが、なんか繋がって、現れが、チェさんに移る、このまちの姿なんじゃないですかね。

地域を存続していくため、また、地域を人々が訪れる地域としてつくるため、入谷地区での災害復興地域づくりの事業に参加し



ている住民たちは、緊急雇用制度という国からの制度からもらった給料を貰えなくなっても、そのため、自分の給料が下がっても意思決定をし、活動に持続的に参加をしている。それくらいこの地域を存続したい気持ちを「自主活動」に参加している住民たちはもっていることであり、それは【人が訪れる魅力ある地域づくり】を指向しているからである。

E: オクトパス君の方もある程度皆さんに知られてたので、突然辞めるというのも、できない話だったので、それも含めて、ま、ちょっと、お給料の方がじゃっかん、緊急の時よりは減るかもしれない、それでもよかったら続けましょう、という形で、皆さんに意志確認をとられて、開始、そのまま引き続きですね。

イン: もし、助成金はとれなかったらどうなると思いますか？

E: どうなるんですかね。ま、みんな、それでも働いてるじゃないですけど、ある程度、他の仕事をしながらしても、ま、

イン: それくらい、ここの存在を外に知らせたいとくらいという事ですかね

E: はい。そうですね。ここまでずっと続けてきたものなので、ちょっちょっちょ知名度も上がっているんで、そこは継続させていかないと意味がないと思うので、タコ見てもらって、南三陸を思い出してもらえるようにいたらいいなと思ってます。また、来て頂ければそれもいいなと思うますね。

A: ただ、今、我々が築きあげようとする研修フィールドを確立するため、あるいは、継続的に持続可能な事業体にいくためには、趣旨が合わないといけないじゃないですか。だから、それを守るためにこの事業で収益をあげてそれを社会に還元してく、要するに、フィールドとし

て熟成していく地域づくりに還元していくような観点で  
いるんですよ。

### 【新たな公共性と活力ある地域づくり】

入谷地区での住民の「自主活動」が目指す災害復興地域づくりは【新たな公共性と活力ある地域づくり】である。地域を震災以前とは違う日本一の学びのフィールドを目指しているが、それはこの地域が続くための一つの手段として捉えている。今の日本の農山村は高齢化が高くなりつつ、衰退している問題を抱えている。それに入谷地区の住民たちは、自分たちの「自主活動」をすることによってその未来に対抗している。人が訪れる地域のために、またこの「自主活動」が新しいスタイルの公共性を生む活動に、後世人に地域を残すために「自主活動」に取り組んでおり、ここという災害復興地域づくりは【新たな公共性と活力ある地域づくり】である。

G: ま、もちろん、研修センターとしては、日本一の学びのフィールドを目指してはいますが、でも、なんか、それも一つの手段であって、結局目指すのは、ここが続くことだと思ったんですよ。地域が続いていくこと。地域が、あの、衰退していく未来はいくらでもパターンが思ってきますね。どんどん人が減っていくのは明らかだし、高齢化していくと、田んぼとか、山とかを整備する人もいなくなって、どんどん風景も荒れていくし、そゆう未来って簡単にたぶん訪れてしまったんですけど、それに一生懸命に抵抗している、なんとか、この風景を守りたいとか、あの、今までの家や世代っていうのが、もっと続いていくように、そんな感じですかね。

A: そうすると、なんか入谷地区ってなんか面白いことやっているね、面白そうだから行ってみようかな、で、あれ、ところで、泊まる場所あるのというみたいな感じ

で、要は両方から 00 施設として充実していくことも必要なんだけど、地域が、こう、なんだろう、活力ある地域に、イメージしていかないと人って、あの、目も送れないというか、対象にならないのね、どこかに行こうとしていることで、そういうアクションを 0 0 勝負ですね。

(…) どちらかというと、我々は NPO 活動に近い活動をしているんだね、我々は、その中に自主事業を盛り込んでいるというやり方ですね。だから、新しいスタイルの公共みたいのを目指していますよね。(…) 私たちのこの活動が後世人に残されるものとかなんかあればいいのかなと思ってます。

### 【災害復興地域づくりのために公共性をもつ施設を作る】

【新たな公共性と活力ある地域づくり】のために地域の大きな変化として以前には地域になかった【災害復興地域づくりのために公共性をもつ施設を作る】ことと【地域を学びのフィールドにする】ことである。この二つは地域を存続するための手段としての「自主活動」であるが、この手段としての災害復興地域づくりは地域の様子を大きく変えている。

A：次のステップで、この地に研修センター、ま、いりやどですね。作って、学生を送り込んで学ばせると、地域の雇用拡大と振興を図っていきましょうという話になって、その時も「ああ良いですね」と言って、そして、とんとん拍子に、こう、始めたんですね。

A：もう一つは、体験学習事業として、日本一のフィールドを目指すために、あの、施設を活用したいですが、モノづくり体験ですね。

### 【地域を学びのフィールドにする】

そもそも入谷地区が観光地でもなく、高齢化が進んでいるいわゆる日本の衰退しつつある地区であった。この地域に人が足を運

ぶのにどのようにすればいいかを東大震災を機に【地域を学びのフィールド】にしている。

イン：地域全体を学びのフィールドという話や、教材にするという話を聞いたんですが、

G：そうですね。ま、そもそもこの地域って別に観光地ではないわけですよ。じゃ、なんで人が足を運ぶのかというと、学びしかないんじゃないかなと思っていて、ま、それはやっぱり震災があったからのもありますし、ま、千年に1年に呼ばれる震災だったんですね。それによって、町がもう、壊滅状態になって、そこでゼロからまちづくりが始まると、っていうことは、もう、日本で一番新しいまちづくりのはずなんですよ。それって、

しかし、【地域を学びのフィールドにする】ためには、地域住民の協力と信頼、合意がないと難しい。以下の語りからも読み取れるように、そのネットワークや住民の協力合意がきちんとされていることが分かる。

G：例えば三泊四日で地域のコミュニティについて学びたいんですって言われたら、こういう人にインタビューに行けますよとか、お年寄りの話聞きたいならこういう所に行くといいですよとか、ていう具体的な活動に落とし込んで、三泊四日のツアーの工程を作り上げるっていう風なことをしています。

G：例えばですけど、あの、民泊っていうのを南三陸で始まったときにもAさんが担当だったんですね。民泊っていわゆる農家さんとかなどで、お宅で、中高生が泊まるということですけど、泊まることだけではなくて農作業とか、漁業を手伝ってもらったりとか、その体験も自分たちで考えなければならいでしょ。そうになると、自分の畑とかを持っているかはいいいけど、たまたまその時畑

に何もないとか、あの、自分のおうちだけでは受け入れきれないということがあるらしいですね。そうになると、自然と同じ地域の近所の人にちょっと助けを求めて、ちょっと畑の手伝いをさせるからさ、高校生受け入れてくれないという話をする事になって、地域のつながりというのもできるし、ただの畑仕事でも高校生喜ぶんですよ、この地域であたりだったという事によって、そんなに価値あることなんだということを再認識するようになる機会になったりとか、って、ま、それを分かって仕掛けたこともありますし、実際にやっているからそれが実感としてあった部分もあるので、その話を聞いて、なんとなく地域づくりってというのはこゆうものなんだなということを感じたと思うますね。

この地域住民の協力と信頼、承認、ネットワークができているのは地域のソーシャルキャピタルとも関係する。

### 【ソーシャルキャピタルが豊かになる】

【ソーシャルキャピタルが豊かになる】ということが、以下の語りから読み取れる。例えば、自分がやりたいことについて地域の人が応援してくれること、しかも、地域住民のその応援の支援のおかげで加速させようとしてくれることからこの地域にはソーシャルキャピタルが豊かになっていく。また、それが他所からの人であっても、その信頼性を基盤として受け入れてくれる。

H: 単純に面白い町だなと思っていて。いい表現か悪い表現か難しいけど。自分がやりたいっていったことを街の人が応援してくれるし、誰かが手を挙げたらそれを応援して加速させようとしてくれる街だなってというのは感じていて。それは普通の田舎じゃなかなか難しいことで。

H: 特に自分のようなよそから来た人がすんなり受け入れられているっていうのは、南三陸の特異な良いところな

のかなって。それは感謝ですね。色んな人にお世話になって。

さらに、「自主活動」をしながら自分が出来ること、できないことは住民の人びとに頼ったり、任せたりすることが自然なことになっている。このプロセスから「自主活動」における【ソーシャルキャピタルが豊かになる】。

イン：実際に大学でコーディネートをしたり、企画をしたり、学生や企業さんが来た時に案内などした時、そのような経験なかったのにこれをやったってということだと思いますが、大変だったときはなかったんですか？

G：そうですね。ま、なんか、できないものはできないので、本当に徹底的に地元の人に頼ることにしました。それこそ、山の仕事になって、結構職人的なので、私ちょっと間違うとケガするとするから、あくまでは私は連れていて、この人先生ですと紹介とか、後、この活動はこゆう意義がありますよって、説明をするところまでが自分の仕事ですね。

ま、できないことは特の地元の人にお任せする、そゆうスタンスはずっともっていました。

以上のように、単なる利益を上げるのではなく、入谷地区の住民の災害復興地域づくりにおける「自主活動」は地域を「学びの場としての災害復興地域づくり」を目指し、それは新たな公共性を生み出す「自主活動」として認識している。その認識を基盤とした「自主活動」のプロセスから入谷地区のソーシャルキャピタルが豊かになっていくことが分かる。

## おわりに：災害復興地域づくりの「自主活動」における学びのプロセス

第4章では、本研究の課題を明らかにするために2つ目の事例である災害復興地域づくりの住民の「自主活動」の事例を取り上げ本研究で確立した理論的立場から分析を行った。第4章での分析単位としては「特定の実践コミュニティ」に着目し、「意識・行動の変革」「コミュニティの変革」「状況の変革」の分析視野から災害復興地域づくりの「自主活動」における学びのプロセス（変革のプロセス）を明らかにした。

以下ではその学びのプロセスをまとめるが、第4章では、災害復興地域づくりにおける住民たちの「自主活動」によるレジリエンスを高めるプロセスを学び（変革）のプロセスとして捉えた。

今回、事例として取り上げた入谷地区の住民たちの災害復興地域づくりは「ボランティア団体と災害復興地域づくりの始まり」がきっかけである。具体的に【ボランティア活動への感謝】と【地域住民とボランティア団体との災害復興の地域づくり始まり】の状況の変革から「ボランティア団体と災害復興地域づくり」が始まった。

その後、【外部資源の活用】という意識・行動をするようになる。しかし、そこには【行政の助成金への申請の壁】という状況があった。この壁を乗り越えるため「自主活動」は行政の助成金のみ頼らず、【多様な連携先を築く】ことに行動とコミュニティの変革を図る。このような変革によって「自主活動」に参加している住民たちは【地域に人がいないと復興もない】という意識の変革も生じた。さらに、【多様な連携先を築く】ために自主的に【勉強会を設ける】という行動の変革も生じた。この学びのプロセスは「災害復興地域づくりと連携」の学びであるが、参加を深めることにより、【勉強会を設ける】行動の変革から【地域の情報共有する】という行動の変革と【地域に人がいないと復興もない】という意識の変革から「自立志向」の学びに繋がることが分かった。

「自立志向」の学びは、具体的に、まず、【交流人口を増やす】ことや、【交流人口から学ぶ】、【売り上げをつくる】という意識の変化が生じた。また、【助成金に頼らない】ことと【インフォーマルでの話し合いを大事とする】という意識・行動・コミュニティ・状況が合わさった変革と【オクトパス君の非公式化】のコミュニティ・行動の変革も生じた。つまり、ここでの学びのプロセスは「自立志向」の学びである。

今まで災害復興地域づくりの「自主活動」の学びは「ボランティア団体と災害復興地域づくりの始まり」から「災害復興地域づくりと連携」の学びを通して「自立志向」の学びに繋がった。しかし、今回の事例で大事な学びとして「信頼の学び」が挙げられる。この「信頼の学び」は「自主活動」の内部と外部との関係において大事とする学びであったが「自主活動」を維持する学びでもあった。この「信頼の学び」は、参加を深めることによって【自立のため共に考える】という意識・行動の変革と【地域に人がいないと復興もない】という意識の変革からの学びであった。具体的に、【信頼関係からもとづいた話し合い】という意識・行動・コミュニティ・状況の合わさった変革は「自主活動」の内部での「信頼の学び」であった。外部との「信頼の学び」は【多様な連携先を築く】という行動とコミュニティの変革から繋がっていることが分かった。具体的に、【連携先との関係を重祖・維持】するという意識・行動・コミュニティの変革が生じ、これが【連携先との信頼関係を築く】というコミュニティ・意識の変革をもたらせた。また、【連携先との関係を重祖・維持】することは【協力し合う関係を維持】する状況・行動の変革から支えられていた。そして、「信頼の学び」は【雇用の場をつくる】というコミュニティ・行動の変革から雇用された住民たちの【雇用への感謝】という意識の変革から「信頼の学び」を構成していた。

最後に、「学びの場としての災害復興地域づくり」の学びは、【活動の誇り】と【地域と人を考えるようになる】【価値観の変化：個人→共同体】の意識の変革と【雇用の場をつくる】のコミュニティ・行動の変革から繋がっていた。具体的に「学びの場として



の災害復興地域づくり」での学びは、【人が訪れる魅力ある地域づくり】と【新たな公共性と活力ある地域をつくる】という意識・コミュニティの変革と【災害復興地域づくりのために公共性をもつ施設をつくる】という行動の変革、【地域を学びのフィールドとしてする】意識・行動・コミュニティ・状況が合わさった変革、【ソーシャルキャピタルが豊かになる】という状況の変革から構成されていた。

これまで災害復興地域づくりの住民たちの「自主活動」における学び（変革）のプロセスをまとめた。ここから分かるように、学びのプロセスは単純なプロセスを経ることではなく、お互いに総合的重層的に絡みながら学びが生じ、参加を深めるプロセスであった。また、ここでの学びのプロセスの中で「災害復興地域づくりと連携」を経て大事とされる「自立志向」と「信頼の学び」は「自主活動」であるからこそ生じる学びのプロセスであり、この学びのプロセスを経て「学びの場としての災害復興地域づくり」への変革が地域の災害復興のレジリエンスを高める学びのプロセスであることが明らかになった。

しかし、「自主活動」は自分たちが勝手にすることや、自分たちだけでしていることを指すことでは決してない。そのプロセスには行政との権力関係をいかに水平的に維持していくのかといった住民たちの悩みや、助成金の壁を乗り越えるための多様な連携先を築き、大事にしていくプロセスがあった。つまり、「自主活動」は自分たちだけで勝手に活動に取り組むことを指すことではなく、他の人びとや組織と連携しながら活動を展開することを指す。そこから、自分たちの「自主活動」へ外部の人や組織をいかに周辺化していくのかも大事である。

特に、この事例から行政の在り方についても考えてみることができる。第1節でも確認したように、従来は、震災に関する問題について住民たちは行政に依存しすぎたことが問題として指摘されていた。そこからレジリエンスという概念が出ており、その概念の重要なポイントとなるのは、いかに住民が自主的にレジリエンスを高めることができるのかである。しかし、それは住民だ

け頑張るということではない。そうすると、住民たちの「自主活動」における「自己責任論」と繋がる。本研究では「自主活動」の概念を「自立」を志向しながらも行政との「共同」の関係を志向している活動を「自主活動」として捉えている。つまり、行政といかに水平的な関係を維持しながら「自主活動」を展開していくのかを視野に入れる必要がある。

震災におけるレジリエンスを高めるため、今回の事例からは住民の「自主活動」のプロセスから行政と以下に共同で行くのが問われていた。言い換えれば、いかに行政が入谷地区の住民の「自主活動」を支援してくれるのが行政の役割として問われていた。これについて今回の事例では、【オクトパス君の非公式化】と【協力し合う関係を維持する】ことから行政の役割について考察することができた。そこで行政は「オクトパス君」が町の公式的なキャラクターではないため、関心も興味も持たなかったというところでもなかった。町の公式的なキャラクターではなく、入谷地区の住民たちの「自主活動」から生まれた「オクトパス君」に対してむしろ積極的に入谷地区の住民たちと連携したいという話をかけ、連携を結びながら共に災害復興地域づくりを目指して取り組んでいる姿が見えた。そこから、お互いにできることを支援しながら共に災害復興地域づくりに取り組む協働のプロセスをしていくのが、今回の事例から行政の役割として考察してみることができた。

しかし、本研究では住民の「自主活動」と国や県の助成金の関係を権力関係として捉えようとしていたが、具体的には明らかにすることができなかった。さらに、それ以外の「自主活動」の内部と外部とのパワー権力関係に関することも明らかにするのに限界があった。したがって、災害復興地域づくりにおけるパワー・権力関係はいかに形成されていて動いているのかを今後の課題としてあげたい。

第4章では、「レジリエンスをいかに高めるのか」「地域の災害レジリエンスの力とは何か」の問いから災害復興地域づくりに取り組んでいる入谷地区の住民たちの「自主活動」を事例として取

り上げ明らかにした。また、ここではその「レジリエンスを高めるプロセス」を「学びのプロセス」として捉え、具体的な学びのプロセスとその学びのプロセスから現在どのように変革しているのかを明らかにし、それを「地域の災害レジリエンスの力」として捉えている。つまり、「住民の「自主活動」と災害復興地域づくり」の学びのプロセスの中で「学びの場として災害復興地域づくり」の学びが「地域の災害復興レジリエンスを高める学び」であることを災害復興地域づくりの「自主活動」の教育学的意義として考察することができる。

## 註

- 
- <sup>1</sup> 田中重好（2013）「東日本大震災を踏まえた防災パラダイムの転換」社会学評論 64(3), 368－369 頁．
  - <sup>2</sup> 片田敏孝（2012）子どもたちを守った「姿勢の防災教育」：大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的行動に学ぶ（特集 東日本大震災と災害情報）災害情報：日本災害情報学会誌（10），38 頁．
  - <sup>3</sup> 同上．
  - <sup>4</sup> 文献によっては、「Resilience」の表記を「レジリエンス」や「リジリエンス」のように表記が少し異なっているが、本稿には「レジリエンス」と統一する．
  - <sup>5</sup> 前田 昌弘（著）（2016）『津波被災と再定住：コミュニティのレジリエンスを支える』、京都大学学術出版会，9 頁．
  - <sup>6</sup> 浦野正樹（2007）「災害社会学の岐路－災害対応の合理的制御と地域の脆弱性の軽減」35－40 頁．大矢根淳 [ほか] 2007 編『災害社会学入門』 / 東京：弘文堂，40 頁．
  - <sup>7</sup> アルドリッチ（著），石田 祐（翻訳），藤澤由和（翻訳）（2015）『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か：地域再建とレジリエンスの構築』，ミネルヴァ書房，3 頁．
  - <sup>8</sup> 同上，9 頁．
  - <sup>9</sup> 京大・NTT リジエンス共同研究グループ 著（2009）『しなやかな社会の創造』日経 BP コンサルティング，15 頁．
  - <sup>10</sup> 枝廣淳子（2015）『レジリエンスとは何か－何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる－』東洋経済新報社，14 頁．
  - <sup>11</sup> 南三陸町統計資料により筆者作成．  
（<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/10,0,56,239,html>）・人口数と世帯数は 2017 年 12 月現在

---

<sup>12</sup> 表は、調査時手に入れられた資料をもとに筆者作成）。

<sup>13</sup> 一般差段法人南三陸研修センター（ラーニングセンター）の資料参照。

<sup>14</sup> 以上の交流人口（何らかの形で入谷地区の復興の地域づくりに参加した他所の人びと）のデータは入谷地区の内部資料により作成。

## 終章 「自主活動」へ参加を通じた学びのプロセスと 成人教育学的意義

### 第 1 節 本稿のまとめ

本稿は序章と終章を含めて 6 章の構成である。

序章では本研究の問題所在について述べた。本研究の問題意識の出発点は、今日の生涯学習政策が従来の住民や市民の自由な教育・学習活動を後退させているところにある。この問題を筆者はグローバリゼーションの政治経済的パワーから整理し、市民や住民の教育・学習活動における新たな公共性を生み出す活動として NPO といった市民や住民の自主活動が注目されていることを述べた。その上で、自主活動がもつ教育的、学習的意義とは何かを本研究の問題所在としてあげた。

第 1 章では、本研究の目的や研究対象、方法を明らかにした。本研究の目的を、「教育・学習における新たな公共性を生み出す活動として注目されている自主活動がもつ教育学的意義を明らかにすること」に設定した。研究対象として「高齢者の健康づくりにおける自主活動」と「災害復興地域づくりにおける住民の自主活動」を挙げた。本研究でいう自主活動とは、本研究の問題意識である生涯学習政策の支配として推進している自主活動とは異なる。本研究で捉えている「自主活動」とは、「行政との関係で支配的関係ではなく、行政との共同と水平的関係の維持のため努力し、自分たちで活動を展開する独立された類型として位置づく」ものとして捉える。研究の方法としては、本研究の研究対象をどのように分析するのかという理論的確立と課題を抽出するため理論的研究を行った。

第 2 章では、先行研究の批判的検討を踏まえ、本研究における理論的立場と課題の抽出、研究方法の再設定を行った。先行研究の指摘としては 3 つを挙げた。第 1 に、日本の社会教育分野では、本研究で注目している自主活動がもつ教育・学習力に期待が寄せ

られているものの、実際、自主活動の事例に着目して自主活動がもつ教育学的意義を明らかにした研究は少ないこと、第2に、さらにその自主活動の事例研究では、各自主活動の事例がもつ教育学的意義を明らかにしていることには大きな意義をもっているが、その自主活動のプロセスは単なる活動実態の紹介に留まっていることを挙げた。つまり、自主活動のプロセスを学術的な視点から詳細に分析することが求められる。そのため、第3に、本研究では自主活動の活動プロセスを分析する際、有用な学術的視点を与えてくれる理論として欧米の成人教育学理論の状況的学習論の立場に立つが、状況的学習論ではまだ捉えてないところを議論し指摘した。1つ目は、状況的学習論の分析単位である。状況的学習論の批判の中で1つは、状況的学習論では参加者が複数の実践コミュニティへ参加していることを視野にいれていないという批判があった。しかし、参加者が他のコミュニティへも参加していることをみななければならないということは分析単位をその個人に置くということになる。状況的学習論で注目しているのは「個体」ではなく、「特定の実践コミュニティ」であり、「特定の実践コミュニティ」のなかでの「特定の参加者」であることを議論した。2つ目は、状況的学習論における分析視野である。今までの数少ない状況的学習論の立場からの事例研究では、「参加者の意識や行動の変革」のみ分析視野として焦点化されていた。しかし、状況的学習論が社会的文脈から学習を捉え、従来の個体主義的学習論を乗り越える学習論であるなら、その分析視野を「参加者の意識や行動の変革」「実践コミュニティの変革」「状況の変革」を分析視野として入れなければならないことを主張した。つまり、状況的学習論の立場から実践コミュニティを分析するならば、その分析単位を「特定の実践コミュニティ」へ着目することと「特定の実践コミュニティ」の中での「特定の参加者」へ着目し、その分析視野として「参加者の意識や行動の変革」「実践コミュニティの変革」「状況の変革」を分析視野として入れなければならないことの検討を行う必要性を第2章で確認した。以上の先行研究の批判点を踏まえ、本研究の課題として「本研究で確

立した理論的立場と分析視野から「自主活動」の具体的な学びのプロセスを明らかにする」ことを設定した。理論的立場は成人教育理論である「状況的学習論」であり、事例を分析する分析視野は「自主活動」に参加している「参加者たちの意識や行動の変革」「実践コミュニティのルールや方向性といった実践コミュニティのアイデンティティの変革」「参加者に置かれている或いは囲まれている状況の変革」であり、その変革のプロセスを本研究では学びのプロセスとしてとらえた。課題を明らかにするための研究方法としては具体的な「自主活動」の事例を取り上げ、質的調査から事例研究を行った。

第3章と第4章では、本研究で確立した理論的立場と分析視点から、具体的な「自主活動」の事例を取り上げ、「自主活動」に参加をするプロセス（学びのプロセス）を明らかにし、その上で「自主活動」がもつ意義について考察を行った。

第3章では、高齢者の健康づくりにおける「自主活動」である「つるがやりフレッシュ倶楽部」を事例として取り上げた。

高齢者の健康づくりの「自主活動」である「つるがやりフレッシュ倶楽部」は、健康を維持・促進することが目的であるため、「健康に対する意識や行動の変革」が生じた。しかし、高齢者の健康づくりの「自主活動」における学びのプロセスは、単に健康に対する意識や行動のみを変革するプロセスではなかった。参加を深めることによってそこでの学びは、「情報の場」としての「コミュニティの変革」や「地域に関心がある」という「状況の変革」も生じた。つまり、そこでの学びは「人間関係の広がり的大事さ」の学びである。高齢者の健康づくりの「自主活動」に参加を深めることを通してソーシャルキャピタルが豊かになることや運営者として参加することの意味、高齢者の再参加という「包摂」のプロセスから、高齢者の健康づくりの「自主活動」は「包摂的な地域社会（inclusive community）」を構築する学びの力を内包していることに高齢者の健康づくりの「自主活動」がもつ教育的意義として考察することができた。

第4章では、災害復興地域づくりの「自主活動」である「南三

陸町入谷地区の住民の自主活動」を事例として取り上げた。

災害復興地域づくりの「自主活動」である「南三陸町入谷地区の住民の自主活動」は「ボランティア団体と災害復興地域づくりの始まり」が災害復興地域づくりのスタートであった。そこからの学びのプロセスは、「災害復興地域づくりと連携」の学びを通して「自立志向」や「信頼の学び」に繋がったことが分かった。ここでの学びのプロセスは、単純なプロセスを経ることではなく、各学びには「意識や行動の変革」「コミュニティの変革」「状況の変革」といった社会的文脈の側面がお互いに総合的重層的に絡みながら学びが生じ、参加を深めることによって各学びが繋がるプロセスを見せていた。また、災害復興地域づくりの「自主活動」の学びの意義として、「学びの場として災害復興地域づくり」の学びを「地域の災害復興レジリエンスを高める学び」であることを第4章の災害復興地域づくりの「自主活動」の教育学的意義として考察を行った。

## 第2節 本研究における新たな知見と学術的意義

本研究における2つの事例分析を通して新たな知見を3つ挙げることができる。

1つ目は、「自主活動」に参加する学びのプロセスは単純なプロセスや段階を経ることではなく、社会的文脈としてお互いに学びの要素が絡みながら変革（学び）が生じることである。今までの先行研究では学びのプロセスを単なる活動の実態の紹介に留まっているため、そこでの学びは「どのような活動をした」という単純なプロセスのようにみえるが、実際の学びのプロセスとは、参加している参加者同士、物、コミュニティ、ルール、状況といった様々な様相がお互いに総合的重層的に絡みながら学びが生じ、参加を深めるプロセスであった。

2つ目は、「自主活動」では、生涯学習政策や行政には捉えていない多様な学びの機会が開かれており、新たな価値観を生み出す教育・学習力を内包していることである。生涯学習政策や行政は



既に決まられている枠組みの内から活動を展開するのが特徴である。しかし、「自主活動」は多様な学習の機会が開かれているため、そこでの学びも多様に展開する可能性を内包していることが2つの事例から明らかになった。つまり、高齢者の「自主活動」や災害復興地域づくりの「自主活動」では、最初自分たちが目標していた活動が多様な学習の機会によって意識・行動の変革が生じた。さらに、自分たちのコミュニティの方向性やルール、性格の変革や地域の状況も変革し、ここから「自主活動」では多様な学びの機会が開かれていることが分かる。また、高齢者の「自主活動」の事例では「地域に全く関心がなかったのに「地域に関心がある」という変革、災害復興地域づくりの住民の「自主活動」の事例では「地域全体を学びのフィールドとしてする」という変革から分かるように「自主活動」は新たな価値観を生み出す教育・学習力を内包しているといえる。

3つ目は、「自主活動」は単なる「自分たちで勝手に活動をする」ということを指すことではなく、「自主活動」の学びのプロセスの中で行政や他の団体といかに水平的な関係や共同的な関係を維持しながら自分たちの「自主活動」を展開するのかが「自主活動」における学びのプロセスの中で大きな影響を及ぼしていることが分かった。例えば、高齢者の健康づくりの「自主活動」では、行政は研修と相談の役割として「自主活動」との関係を水平的に維持しており、参加者たちはその関係を維持しながら「他の交流の場への参加」をしていた。つまり、行政と垂直的な関係ではなかったため「地域に関心がある」ことや「情報の場」としてのコミュニティの変革の学びは生じたといえる。また、地域の災害復興地域づくりの「自主活動」では行政や他団体と共同のかつ水平的な関係を維持して活動を展開することが「自立志向」と「信頼の学び」に大きく影響していることが分かった。つまり、「自主活動」は単なる「自分たちで勝手に活動をする」という独立された「活動」として捉えて分析するのではなく、そこでの学びに行政や他団体が「自主活動」の学びにどのように、いかに影響しているのかも「自主活動」における学びのプロセスを分析する上で

大事であることが分かった。

以上の新たな知見から本研究における学術的意義を2つ示す。

第1に、自主活動における学びのプロセスを具体的な学術的立場と視点から明らかにしているところにある。これまでの日本の社会教育学分野での自主活動の事例研究では、各事例がもつ教育学的意義は明らかにしているものの、その活動のプロセスは単純な活動の実態の紹介に留まっているが、本研究ではそのプロセスを具体的な学術的立場と分析視点から明らかにしている。

第2に、その具体的な学術的立場である成人教育学理論の状況的学習論におけるまだ捉えていないところを提示し議論したところにある。

1つ目は、状況的学習論の分析単位の提示したところである。私たちが状況的学習論の立場に立つなら、事例として分析したい分析単位は、個体ではなく、さらに、実践コミュニティへ参加している参加者が参加している全ての実践コミュニティでもない。私たちが注目したいのは、分析したい「特定の実践コミュニティ」であり、「特定の実践コミュニティの中での特定の参加者」であることを提示した。

2つ目に、その分析単位における分析視野の議論をしたところである。今までの状況的学習論の立場では、実践コミュニティへの参加における参加者の「意識・行動の変革」のみ分析視野として捉えていたが、社会的分文脈と緊密に関係している状況的学習論での分析視野を、「参加者の意識・行動の変革」のみならず、「実践コミュニティの変革」と「状況」の変革も分析視野に入れなければならないことを議論した。

第2に、先行研究の検討で行われた議論にもとづいて、具体的な「自主活動」の事例をとりあげ、「自主活動」における学びのプロセスを明らかにしたところである。

したがって、本研究では今まで焦点化されなかった「自主活動」の学びのプロセスを具体的な学術的立場と先行研究ではまだ捉えていない分析視点から「自主活動」における学びのプロセスと「自主活動」がもつ教育学的意義を明らかにしたところに学術的意

義を持っている。

### 第 3 節 残された課題

本研究での残された課題を確認するためまず本研究における限界を指摘する。

第 1 に、本研究で取り上げた事例での権力・パワーの問題を具体的に解明することができなかった。理論的背景では、本研究の理論的立場である状況的学習論における権力・パワーの問題について言及したものの、実際の事例では具体的に解明できなかった。第 6 章である「住民の自主活動と災害復興地域づくり」の中では、行政の助成金と住民の自主活動における権力関係とそれをどう乗り越えたのかを学習として分析したものの、それ以上の具体的な権力・パワーの構造と学びとの関係を解明できなかった。ここに本研究における第 1 の限界がある。

第 2 に、「特定の実践コミュニティ」・「特定の実践コミュニティの中での特定の参加者」と他コミュニティとの関係について捉えることができなかった。本研究では、私たちが注目したいのは、参加者個人が参加している多様な実践コミュニティを分析単位として注目することではなく、「特定の実践コミュニティ」或いは「特定の実践コミュニティ」のなかでも「特定の実践コミュニティの中での特定の参加者」であることであった。しかし、「特定の実践コミュニティ」と「特定の実践コミュニティの中での特定の参加者」も社会的文脈として他のコミュニティとも相互作用をしている。第 6 章では、連携先との関係からこの関係を見ようとしていたが、その具体的には解消できなかった。ここに本研究における第 2 の限界がある。

これについて、今後、エンゲストローム（Engeström）の拡張による学習論（Learning by Expanding）を理論的背景として視野に入れながら、私たちが注目したい「特定の実践コミュニティ」・「特定の実践コミュニティの中での特定の参加者」と他のコミュニティとの関係をどうとらえられるのかについて議論した

い。

本研究の限界の 2 つを踏まえて残された課題として、「自主活動」への参加における具体的な学びのプロセスを明らかにする中で、①権力・パワーの問題と②他コミュニティとの関係がどう自主活動の参加者たちの学びとどう影響しているのかを解明することを残された課題として設定したい。それに加えてもう一つの視点を入れたい。それは「アイデンティティ」の問題である。本研究では「参加者たちの意識・行動の変革」「コミュニティの変革」「状況の変革」を自主活動の学びのプロセスとして捉えている。つまり、その「変革」というのは参加者たちの「アイデンティティ」とも密接に関係している。したがって、本研究で明らかにしたことをさらに研究として発展するため、本研究での限界と「アイデンティティ」の問題をどのように結びつけながら議論できるのかを関連する先行研究の検討を通して明らかにすることを次の課題として設定する。

## 参考文献

- 相場和彦（2016）『現代市民社会と生涯学習論：グローバル化と市場原理への挑戦』明石書店．
- 稲葉陽二（2013）『ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立－重層的予防策とソーシャルビジネスへの展望－』ミネルヴァ書房．
- 宇良千秋（2003）「高齢者の社会参加の促進・阻害要因」老年精神医学雑誌，14(7)，pp.884-888．
- 浦野正樹（2007）「災害社会学の岐路－災害対応の合理的制御と地域の脆弱性の軽減」35－40頁．大矢根淳 [ほか] 2007 編『災害社会学入門』/東京：弘文堂．
- 江川緑（2013）「高齢者の社会参加と健康」地域活性研究，4，67－74頁．
- 枝廣淳子（2015）『レジリエンスとは何か－何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる－』東洋経済新報社．
- 逢坂伸子，中川文子，塩見恭子，落合都（2012）「長期間の介護予防活動がもたらす効果と活動継続要因についての分析」理学療法学 2011(0)，Ec0379-Ec0379 頁．
- ――，高橋 慶子，足立 安正，中川 美知子，塩見 恭子，上柳 より子，伊藤 晴人，野村 典子，山本 明日香，中川 文子，竹谷 沙記，藤田 摂津子，樫田 初世（2009）「大東市における介護予防事業の取り組み：－専門職主体の教室と住民主体の活動の介護予防効果の比較－」日本理学療法学会，E3P1185 頁．
- 大高研道（2015）「社会的企業から地域の協同へ」pp. 127 - 151.，佐藤一子編『地域学習の創造－地域再生への学びを拓く－』東京大学出版会．
- 大塚旭（2007）「高齢者の社会参加に関する一考察－NPO 法人シニアネット仙台「ぐるーぷ・よっこより」を事例に」東北福祉大学大学院総合福祉学研究科社会福祉学専攻紀要，4，9－18 頁．
- 岡本純也（2000）「実践教育における正統的周辺参加」研究年報 2000 卷

82-87 頁 一橋大学紀要.

岡本秀明 (2008) 「高齢者における社会活動の促進・阻害要因の検討：独居・要介護・在日韓国人高齢者へのインタビュー調査から」社会福祉学, 48(4), 146-160.

片田敏孝 (2012) 「子どもたちを守った「姿勢の防災教育」：大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的行動に学ぶ (特集 東日本大震災と災害情報) 災害情報」日本災害情報学会誌 (10), 37-42.

京大・NTT リジエンス共同研究グループ 著 (2009) 『しなやかな社会の創造』日経 BP コンサルティング.

金子勇 (2011) 『高齢者の生活保障』放送大学教育振興会.

金宝藍 (2015) 「韓国における「エネルギー自立マウル」運動とその学習活動－「持続可能な社会」の創造に向かう自己教育実践を手がかりに－」pp101-111., 日本社会教育学会年報編集委員会『社会教育としてのESD－持続可能な地域をつくる』東洋館出版社.

木下康仁 (2007) ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて, 弘文堂.

倉林 しのぶ、後閑 容子、春山 早苗、青木 知子、藤岡 由美 (2002) 「過疎地域の高齢者の社会参加に影響を及ぼす要因に関する研究」群馬県立医療短期大学紀要, 9, 109-116 頁.

小林江里花 (2015) 「日本の高齢者の社会参加は進んだか：高頻度参加層の拡大と非参加層の縮小の視点から」老年社会科学, 36・4, 423-432 頁.

佐藤一子 (編集) (2004) 『NPO の教育力－生涯学習と市民的公共性』東京大学出版会.

ソーヤー りえこ (2010) 「理工系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化, pp. 93-126. 上野直樹, ソーヤー りえこ編著 (2010) 『文化と状況的学習-実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社.

佐藤郁哉 (2011) 『QDA ソフトを活用する 実践 質的データ分析入門』新曜社.

- 高木光太郎（1999）「正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張：実践共同体間移動を視野に入れた学習論のために」東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要 10, 1-14.
- 高橋満（2003）『社会教育の現代的実践：学びをつくるコラボレーション』創風社.
- （2009）『NPOの公共性と生涯学習のガバナンス』東信堂.
- （2011）「看護の力をどのように育むのか（1）－労働の場における学びの方法と構造－」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60（1）, 143－168.
- （2012）「看護の力をどのように育むのか（2）－労働の場における学びの方法と構造－」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60（2）, 99－124.
- 田中重好（2013）「東日本大震災を踏まえた防災パラダイムの転換」社会学評論 64(3), 366-385 頁.
- 日本社会教育学会編（2007）『NPOと社会教育』東洋館出版社.
- 西山 佐代子, 岩崎 清（2000）「地域高齢者の社会参加活動に関する研究」北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編, 50・2, 47-60 頁.
- 福井 庸子（2007）「NPO博物館の活動にみる「学び」の意義－NPO法人高麗博物館の取り組みを中心に－pp. 153-164., 日本社会教育学会編『NPOと社会教育』東洋館出版社.
- 藤村正之（2001）「社会参加, 社会的ネットワークと情報アクセス」, pp. 29－50, 平岡公一『高齢期と社会的な不平等』東京大出版会.
- 堀薫夫（1993）「高齢者のエイジングへの意識に関する調査研究」大阪教育大学紀要 第IV部門：教育科学, 42・1, 1－10 頁.
- , 福嶋 順（2007）「高齢者の社会参加活動と生涯学習活動の関連に関する一考察－大阪府老人大学修了者を事例として－」大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, 56・1, 101－112 頁.
- （2009）「人口の高齢化は学習をどう変えるか」関口礼子著『新しい時代の生涯学習』有斐閣アルマ, 171-186.

- (2015)「継続性の視点からみた高齢期における学習意識の変化に関する調査研究」大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 教育科学, 63・2, 91-100 頁.
- 堀川俊一 (2015)「住民主体の介護予防活動 : いきいき百歳体操の経験から (特集 地域包括ケアシステムとリハビリテーション)」総合リハビリテーション, 43・9, 825-829 頁.
- 前田 昌弘 (著) (2016)『津波被災と再定住: コミュニティのレジリエンスを支える』、京都大学学術出版会.
- 牧野篤 (2007)「高齢者教育の課題と老人大学のあり方に関する一考察ー福祉と教育のはざままでー」生涯学習・キャリア教育研究, 3, 19-38 頁.
- 松岡英子 (1992)「高齢者の社会参加とその関連要因」老年社会科学, 14, 15-23 頁.
- 松本大 (2006)「状況的学習と成人教育」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55 (1), 219-232.
- 矢庭さゆり, 矢嶋 裕樹 (2011)「地域高齢者の社会参加の実態とその関連要因」新見公立大学紀要, 32, 117-122 頁.
- 福嶋 篤, 河合 恒, 光武 誠吾, 大淵 修一, 塩田 琴美, 岡 浩一郎 (2014)「地域在住高齢者による自主グループ設立過程と関連要因」日本公衆衛生雑誌, 61・1, 30-40 頁.
- 季東輝 (2012)「女性高齢者の社会参加について: 北九州市での調査をもとに」奈良女子大学社会学論集, 19, 1-16 頁.
- Aldrich. D.P. (2012) *Building resilience : social capital in post-disaster recovery*, University of Chicago Press (アルドリッチ (著), 石田 祐 (翻訳), 藤澤由和 (翻訳) (2015)『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か: 地域再建とレジリエンスの構築』, ミネルヴァ書房)
- Brookfield, S. (1991) *Developing critical thinkers: Challenging adults to explore alternative ways of thinking and acting*. San Francisco:



Jossey-Bass.

- Clancey, W. J. (1997) *Situated cognition: on human knowledge and computer representations*. New York: Cambridge University Press.
- Contu, A. & Willmott, H. (2003) "Re-Embedding Situatedness: The Importance of Power Relations in Learning Theory", *Organization Science*, 14(3), pp. 283-296.
- Criticos, C. (1993) "Experiential learning and social transformation for a post-apartheid learning future". In D. Boud, R. Cohen, D. Walker (Eds.). *Experience for Learning*. pp. 157-168. London: Open University Press.
- Dale, John A., Glowacki-Dudka, Michelle., and Hyslop-Margison, Emery J. (2005). "Lifelong Learning as Human Ontology: A Freirean Response to Human Capital Education", *Adult Education Research Conference*.
- Dewey (1938) *EXPERIENCE AND EDUCATION*. New York : Macmillan.
- Fenwick, T. (2003) *Learning through experience: Troubling assumptions and intersecting questions*. FL: Krieger.
- Gergen, K. J. (1995) "Social construction and the educational process". In L. P. Steffe & J. Gale (Eds.), *Constructivism in education*, pp. 17-39. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Hansen, T.L. (1993) What Is Critical Theory? An Essay for the Uninitiated Organizational Communication Scholar. Paper presented at the Speech Communication Association of America Convention in Miami.
- Illeris, K. (2004). *Adult education and adult learning*. Malabar, FL : Krieger.
- Jarvis, P. (1987) *Adult learning in the social context*. London: Groom Helm.
- Jung, M.S. (2010) *Understanding of adult learning*, EPISTEME (原

文 : 정민승 (2010) 성인 학습의 이해 . 에스 테 메 스 )

Kang, D. J. (2015). *Life and learning of Korean artists and craftsmen: Rhizoactivity*. Abingdon, UK and New York: Routledge.

-----, U, T. Park, J, S. Choi, S, J. and Choi, I, S. (2017)

“Learner Positions, Learning Management Apparatus and Contextual Knowledge: Exploring Core Concepts for Building a Lifelong Learning”, Theory. Journal of Lifelong Education. 2017, Vol.23, No.4 pp.27-53. (原文 : 강대중 , 김의태 , 박지숙 , 최선주 , 최일선 (2017) 학습자 자세 , 학습 관리 장치 , 맥락 지식 - 평생 학습 이론 구축을 위한 중심 개념 탐색 -, 평생 교육학 연구 , Vol.23, No.4 pp.27-53 )

Kegan, R. (2000) “What “form” transforms? A constructive-developmental perspective on transformational learning”. In J. Mezirow & Associates, *Learning as transformation: Critical perspectives on a theory in progress*, pp. 35-70, San Francisco: Jossey-Bass.

Knowles, M, S. (1975) *self-directed learning: A guide for learners and teachers*. New York: Association Press.

Lave. J., Wenger. E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press (레이ヴ. J & 웬가- . E, 佐伯 胖 訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書).

Lemke (1997) “Cognition, context, and learning: A social semiotic perspective”. In Kirshner D., & Whison, J.A (eds.), *Situated Cognition*, pp.37-56 Mahwah NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

LISMAN.C.D. (1998) *Toward a Civil Society: Civic Literacy and Service Learning*, Praeger.

McDonald, B. Cervero, R, M. and Courtenay, B, C. (1999) “An ecological perspective of power in transformational learning: A case study of ethical vegans”. *Adult Education Quarterly*. 50(1).

pp.5-23.

Merriam, S, B. Caffarella, R, S. and Baumgartner, L, M. (2006)

*Learning in Adulthood: A Comprehensive Guide*, 3edition.

Jossey-Bass.

Mezirow, J. & Associates(2000) *Learning as transformation: Critical perspectives on a theory in progress*, San Francisco: Jossey-Bass.

Miriam Henry (2001) "Globalisation and the Politics of

Accountability: Issues and dilemmas for gender equity in education", *Gender and Education*, Volume 13, pp. 87-100.

Organization for Economic Co-operation and Development (OECD)

(1996) *Lifelong learning for all*, Paris: OECD.

Pestoff (1998) *Beyond the market and state : social enterprises and civil democracy in a welfare society*, Ashgate Pub Ltd.

Robert D. Putnam with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti

(1993) *Making democracy work : civic traditions in modern Italy*,

Princeton, N.J. : Princeton University Press. (ロバート・D・パットナム著 ; 河田潤一訳 (2001)『哲学する民主主義 : 伝統と改革の

市民的構造』NTT出版.)

Schied, F.M., Mulenga D., Baptiste, I.(2005) *Lifelong Learning in a Global Context: Towards a Reconceptualization of Adult Education*, Adult Education Research Conference.

Simon Marginson (1999) "After globalization: emerging politics of education", *Journal of Education Policy*, 14:1, pp. 19-31.

UNESCO (1996) *Learning: The Treasure Within; Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century*, UNESCO Publishing.

Usher, R., Bryant, I., & Johnston, R. (1997) *Adult education and the postmodern challenge: Learning beyond the limits*. New York: Routledge.

World Bank (2003) *Lifelong learning in the global economy:*

*Challenges for developing countries*. Washington, DC: World Bank.

Yang, H, K.(2017) *Introduction to Lifelong Education*. Seoul: SinJung.

(原文: 양 흥 권 (2017) 평생 교육론, 서울: 신정.) .

グローバルノート (国際統計・国別統計専門サイト)

<https://www.globalnote.jp/post-3770.html>

内閣府 - (2) 将来推計人口でみる 50 年後の日本

[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/sl\\_1\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/sl_1_1.html)

厚生労働省 - 介護予防マニュアル概要版

<http://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1a.pdf>

社会福祉法人 全国社会福祉協議会 - 東日本大震災ボランティア活動者  
数の推移 東日本大震災 岩手県・宮城県・福島県のボランティア活  
動者数 <https://www.saigaivc.com/>

仙台市統計情報 - 町名別年齢 (各歳) 別住民基本台帳人口データ

<https://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/jinko/chomebetsu.html>

南三陸町時計資料 <http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/10,0,56,239,html>

## 謝 辞

博士論文執筆にあたり、多くの方から指導と応援をいただきました。

まず、学問的にも学者としても多くの指導を賜り、尊敬する東北大学 教育学研究科 高橋満教授へ感謝申し上げます。東北大学に留学して5年半、その間、尊敬できる学者に巡り合わせていただいたことは、私にとって非常に大きな幸運です。これまでお世話になったこと、賜った研究指導に心から感謝申し上げます。

また、特定課題研究論文と博士論文審査の際に鋭い質問と助言を惜しみなくくださった東北大学教育学研究科 甲斐健人教授と市毛哲夫准教授へも感謝申し上げます。

そして、いつもお会いするたび、また悩んでいるときに遠くから励まし、応援してくださった北海学園大学 経済学部 地域経済学科 内田和浩教授へ感謝申し上げます。内田和浩教授は東北大学の入学以前から今まで精神的に支え励ましてくださり、いつも温かく力強いお言葉をかけてくださいました。留学中に体験した辛い時期、そのたびに私を支えてくださいました。本当にありがとうございました。

さらに、東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教育内容開発部門 言語・文化教育開発室 金鉉哲先生は、東北大学での留学中において勉強や生活面で悩みがあるたび、為になる助言をたくさんいただきました。感謝申し上げます。

最後に、論文執筆にあたりインタビューに協力してくださった宮城県仙台市鶴ヶ谷地区のつるがやりフレッシュ倶楽部のみなさん、宮城県南三陸町入谷地区のみなさんには、外国から来た学生を温かく受け入れてくださり快くインタビューに答えてくださったこと、心から感謝申し上げます。

この他にも東北大学で研究生として半年、修士2年、博士3年、計5年半の間たくさんの方から応援と支援をいただきました。5年半たくさんの方の応援と指導、支援のお陰で博士論文を無事に執筆することができました。ありがとうございました。

今後、学者として、ひとりの人間としてさらに成長、発展した姿をご報告したいと思います。

ありがとうございました。

2019 年 1 月

崔 敏 奎